英雄伝説・空の軌跡～銀の守護騎士～

黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄伝説・空の軌跡～銀の守護騎士～

【Ｎコード】
Ｎ９５０３Ｑ

【作者名】
黒

【あらすじ】
大学生になったばかりの北川司（きたがわつかさ）はある日、不幸にも偶然隕石が頭に直撃して死んでしまった！
しかも原因は神様のミス！？
さらに神様フリーダムだし、神様の都合で全然知らない世界に転生させられるし…

このお話はそんな主人公が色々な人達に出会い、成長していく物語
…だといいなぁ（遠い目）

※作者の一身上の都合（受験）のため、一時休載させて頂きます

楽しみにしていただいている方にはご迷惑をおかけします

プロローグ（前書き）

はじめまして！黒です！

初めての投稿ですが楽しんでもらえたら嬉しいです！

それでは本編をどうぞ！

プロローグ

ども、はじめまして司です

早速で悪いんスけど一つ質問させてもらいます

司「ここ…どこだ…？」

そう、気がついたら何か知らんけど真っ白な空間に立っていた

…え？話し方急に変わった？

こっちが素だけど何？

まあ話を戻すと何で俺はこんな訳のわからん場所にいるのかってことだ

司「オイオイオイオイ何ですか？目が覚めたら異空間でした～って何のテンプレだよ。つーかそもそも俺生きてるよ？お前死んだから転生しろ～ってフラグは有りませんよ～？」

とか誰もいないのに言ってたら急激に虚しさが…

あっ、ヤベ。涙でそう。

そこ、ヘタレとか言うな。

暫くｏｒｚになっていると

「待たせたな～…って何しとるんじゃお主？」

と、明らかにイケメンな、だけどなんとなく胡散臭～い雰囲気を纏った人がいつの間にか背後にいた

司「…お前いつの間にそこに？」

「『オイオイオイ…』のあたりから」

司「いや声かけろやぁぁぁ！！めちゃくちゃ恥ずかしいじゃねーかバカヤロー！」

「お主…仮にも神に向かってバカはないじゃろ…」

司「知るか若爺！バカはバカだ！…って神！？」

神「その通りじゃ北川司。
いや～すまんの～今回の事はこっちのミスでな～」

今回の事って俺がここにいる事か？

司「そっちのミスなら俺は帰れるのか？」

神「神ってわかっても敬語は使わんのじゃな…
それは無理じゃ」

司「こんなしょうもないミスするバカに敬語なんか使えるか何でだよ？」

神「そりゃあお主死んだからのぅ」

司「……は？」

俺が死んだ？イヤイヤイヤイヤ無い無い無い無い

司「冗談はその見た目と口調のミスマッチだけにしろよ。つか戻せ。今すぐ戻せ。さあ戻せ」

神「無理」

司「即答！？ちょっとは考えるとかしろや！」

神「無理なもんは無理じゃだってお主、隕石が頭に直撃してしんだから体は木端微塵じゃもん。」

木端微塵って…マジかよ…

と、再びｏｒｚになっていた俺だったが

神「ただお主はこっちのミスで死んだ事もあるからの、転生させて再び輪廻の輪に放り込むことに決まった」

…何ですと！？

司「爺、最初にそれを言え！」

神「お主がワシの言葉をちょいちょい遮って質問するのが悪い。で、転生先なんじゃがな…」

そこで一旦言葉を切る神

神「実はの…お主に何個かの選択肢の中から選んでもらおうと「よっしゃ～！」」

転生先選べるとかテンプレじゃねーか！夢にまでみたチート無双じゃねーかぁぁぁ！

神「落ち着かんか！…さっきも言ったがあくまで“いくつか”の中からじゃ。あんまり有名な所は転生先として人気じゃからな。世界が空いてないんじゃ」

司「…どんだけミス多いんだよ神なのに」

神「言うな。
それでお主の転生先じゃが…この中からくじ引きじゃ」

司「イヤそこは選ばせてくれるんじゃねーのかよ！？」

神「贅沢を言うな。さあ、引くがよい」

そう言って神はごく普通の紐式のくじを俺に差し出して来た

俺は諦めて大人しく引こうとしたが

神「おおっと！忘れる所じゃった。お主に5つだけ向こうに行ってからの特典をやろう。さあ言ってみるが良い」

司「マジで！？」

これは本格的にチート無双のチャ～ンス！

司「じゃあまずはテイルズの術全部使えるようにそれと身体能力だな…これはあれだ、限界を無くしてくれ。鍛えたら鍛えただけ強くなるみたいな感じに」

神「ふむ…これだけでも十分チートじゃな…他には？」

司「これだけでも十分だけどなぁ…じゃあアレ、写輪眼欲しい。使っても視力は落ちないやつで」

神「もう戦闘面だと目も当てられんくらいチートじゃな…後二つじゃ」

司「ん～…じゃあ見た目だな。黒猫のトレインみたいなのがいい。後は俺専用の武器がいい。小太刀と太刀で、どんだけ切っても切れ味は落ちない、折れないやつ」

神「やりたい放題じゃな…（くじとは言え流石に５つは不味くないかの？最高神様よ…）」

司「結構無茶言ったんだけどいけんのか？」

つーか今言った能力、戦闘無しの世界だとかなり意味ないな

神「無問題じゃ。じゃあ転生先を決めようかの」

司「よし…これだ！」

神「うむ…なになに？『英雄伝説空の軌跡』だそうじゃ」

なん…だと…？

司「ネ○まじゃなく？」

神「空の軌跡じゃ」

司「リリ○のでもなく？」

神「英雄伝説じゃ」

本日三回目のｏｒｚに苦しんでいると

神「む？時間じゃな…良いか北川司？一応向こうでは記憶はそのままじゃが精神は肉体に引っ張られるからの。気をつけて行ってくるんじゃぞ？」

司「行くってどうやっ…て？」

再び気がつくと、足元に穴が開いていた

神「良い旅を～」

司「てめっ、クソ爺！いつか覚えてろォォォォォォ！！…」

第一話『ちょ、名前ェェェ！！』（前書き）

どうも、黒です。

今回は司くんが拾われる話です

多分にキャラ崩壊が起きるかもですが、しゃーねーな～と軽く流せる懐の大きい人は是非読んで下さい

それでは本編をどうぞ～

第一話『ちょ、名前ェェェ！！』

おっす！オラ司！

…前回と入りが一緒とか言うな。俺だってなぁ…

司「おぎゃ～～～！（転生して目覚めたら赤ん坊でしたとか予想してなかったんじゃぁぁ！！）」

何この羞恥プレイ。プライドも尊厳もあったもんじゃねぇよ…

首ブランブランだし、動けねぇし、おぎゃ～しか喋れねぇし。

つーかマジで腹減ったんだが。ガチで餓死すんぞ？赤ん坊って燃費最悪なんだぞ？

…いやその前に今日の前にあるのが城なのに一人として通りかからないってどういうことだよ

司「う～～～（頼むから誰か通れ！）」

…十分くらいじっと誰かが来るのを待っていたが、いい加減どうしょうもないし暇なので、空腹を紛らわすためにもとりあえず状況整

理をする事にした

…まず、俺は神様のミスで死んだ。これは間違いない。本人が言ったのだから。

それで何か知らんが転生する事になって、神様に5つ願いを聞いてもらって『英雄伝説空の軌跡』なる世界に転生した訳だけれども…

司「（転生初日から死にかけるって何？）」

正直これはねぇだろ、と半ば諦めていたが…

？「…え？子供？」

突然声が聞こえて抱き上げられる感覚があった

ふと見上げると、そこには11、2才くらいの男の子？がいた

…だって声は女の子だったんだもん

？「城の前に捨て子とは…そこまで厳しい時代になったのか…？」

はい、女の子でしたね。声が違うわ。

まあ、そんなこたぁどうでもいい！（↑失礼）

今の俺の最優先目標は…腹を満たす事っ！

見つけてくれてありがとう！さぁ、俺を君のお母さんの所に連れて行ってくれ！

司「あ～、あ～」

秘技っ！誘惑（テンプテーション）っ！

？「／／／（か、可愛い！）」

こうかはばつぐんだ！

？「どうしようか…このままここに置いて行く訳には行かないし…かと言っていきなり七耀教会の孤児院に連れて行く訳にも…」

何かかなり悩んでいる様子の女の子だが、俺はできる事をした。後は運に任せるだけだ。

？「…うん、とりあえず連れて戻って女王様や皇太子様にどうしようか相談しよう。

…君、一緒にお城に行こう？」

女の子が笑顔で俺に言って来たので俺も笑顔で答える

…やっと飯にありつけるぜ…

…イヤ、ちょっと待て、今この子女王様って言った！？ｓｉｄｅアリシア

ア「よーしよしよし…ばぁ～」

？「きゃっきゃっ！」

私は今つい先日生まれた孫のクローディアをあやしている

これがまた可愛いのなんのって…目に入れても痛くないとはこの事かしらね？

？「女王様～！」

にしても、あの二人も私がクローディアにべったりだからって街に出掛けなくても…

？「女王様～」

仲がいいのはよろしいのだけれど、いつまでも新婚気分は考えものね…

？「女王様！！」

ア「！？…ユリア？急にどうしたのですか？」

ユ「急に、ではありません。何度もお呼びしましたよ…」

ア「え？…」

ま、全く気づかなかった…

ユ「…さてはまたクローディア様に夢中で…」

う…ユリアの視線が冷たい…

ア「そ、そんな事より！何かあったのですか？あなたが慌てて私を

探すなんて珍しい…」

とっさに話を逸らそうと、話題を変える。実際この子が慌てる姿なんてめったに見れないものね

ユ「それが…」

ユリアが抱えている何かを私に差し出す

ア「?…って、子供!?何故!?…ユリア貴女まさか…」

ユ「違います。思考を変な方向に飛ばさないで下さい」

ア「冗談の通じない子ねぇ…この子は?」

見たところ1、2才くらいのようだけど…

ユ「城の正門の前に置かれていました。多分ですが…」

ア「捨て子…ですか」

ユ「恐らくは…」

こんなに可愛い男の子なのにねぇ…そうだわ!

ア「この子、この城で保護しましょう!」

ユ「……は?」

ア「だから保護しましょう。あ、教育係は貴女にまかせるわ。クロ

ーディア共々よろしくね」

ユ「は、はっ！…しかし、この少年を保護するのは…」

ア「あら、貴女も一応保護されている身なのだけれど？」

ユ「私は軍を通じての保護です！王家が直接保護するなど…」

固いわねー。全く、誰に似たのかしら？

ア「いいのよ。ちょうどクローディアより一つ上くらいだろうし。話し相手…いえ、友達になってあげて欲しいの。」

ユ「……」

ア「あの子はこの城の中では年の近く子もいないし…貴女が姉のようになってくれて、この子が友達になってくれれば退屈もしないでしょう？」

ユ「……」

ユリアはまだ納得していないような様子だったけど、、はぁと溜め息をついて

ユ「……わかりました。姉代わり、務めさせていただきます」

ア「よろしくお願いします」

また楽しくなりそうね

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ…起きたら何かよくわからんが、この人…リベール王国?の女王様、アリシアさんに保護される事になったみたいだ

ア「よーしよしよし…ばぁ～」

ク「きゃっきゃっ！」

「……」

ア「あら?笑わないわね…クローディアはこんなに喜ぶのに…」

ただ一つ思ったのは…

この人本当に女王ですか?

なんかごく普通の孫思いのおばあちゃん（多分５０くらい）にしか見えん

いや、そりゃあ女王様も人間なんだから当たり前なんだけどさ…俺のイメージってもんがあった訳ですよ。

けど実際は実の両親が子供と触れ合おうとするのを諦めるくらい孫にべったりなおばあちゃんだった訳ですよ

何だかな～

ア「あ！そう言えばまだ名前を決めてなかったわね…どんなのがいいかしら？」

…ついにきやがったァァァ！

ヤバい。これはまたこれでヤヴァイ。どんくらいヤバいかと言うとマジヤバい

今まで慣れ親しんできた名前が変わるって結構キツい。反応出来ないかもしれない…

だから！できれば司で！いや、こっちだとツカサか。ツカサにしてくれェェェ！

ア「…うん、決めたわ。貴方の名前は…」

ツカサだ！ツカサと言えェェェ！

ア「…ケイジ。」

ぐはっ（吐血）

グッバイ…司…！

ア「後はファミリーネームねぇ…どうしようかしら…」

そこはせめてキタガワで！…望み殆ど無いけどな！（ヤケ）

ア「そうね…ルーンヴァルト。ケイジ・ルーンヴァルト。貴方の名前よ？これからよろしくね、ケイジ。」

俺の名前ェェェェ！！

せめて面影くらいは残して欲しかったァァァ！！

と、内心かなり落ち込んでいたのだが、アリシアさんは全く気づいていないのか、嬉しそうに俺を抱き上げていた

…すみません。俺精神年齢１９です。これから下がるらしいけど、今は１９なんです…

この扱いに慣れるまで、俺の精神がすり減っていったのは言うまでもない

…そういやクソ爺（神様）に頼んだ俺の武器ってどうなったんだ？

第二話『学校？名門？…面倒くせぇ…』（前書き）

連続更新！

今回一気に時間が飛びます

過去編は…そのうちやるんじゃないかな…？

ケ「何で疑問形なんだよ」

黙らっしゃい！

それじゃそろそろ本編をどうぞ！

ケ「…逃げたな」

第二話『学校？名門？…面倒くせぇ…』

ガギィッ！！

剣戟の音が訓練場（という名目の中庭）に響き渡る

ケ「……」

ユ「……」

ギリギリギリ…ッ

同時に仕掛けたために、鍔迫り合いになるが…

ユ「…せいっ！」

ケ「ちっ…」

そこは経験の差か、ユリ姉に弾かれ、距離を取られる

再び睨み合いになり、膠着状態になる。

ユリ姉はいつもの半身の構えで、俺は抜刀術の構えで隙を伺う

ユ「……ッ！」

暫くその状態が続いたが、状況が進まないと見たのか、猛スピードで俺に接近するユリ姉

そのまま目にもとまらない速さで俺を斬った…ように見えた

ユ「（やったか…？）ッ！？」

ユリ姉が俺の姿を確認しようと首だけを動かして気配を探る

…でも、もう遅い

ユ「……なぁ！？」

ケ「遅い。…鳳仙華（ほうせんか）ッ！」

俺は自身の戦技…クラフトの一つである鳳仙華の初動、斬り上げをユリ姉に当て―

ク「ケイジ～、ユリアさ～ん、お茶の準備が出来ましたよ～！」

ズシャァァァ！

ユ「…毎回思うが痛くないのか？」

ケ「クローゼェェ！何でいつも決着がつくっていうベストタイミングでストップかけんだよ！」

ク「ええ！？そんな事狙ってできないよ！？」

ケ「いーや！狙ってるとしか思えねぇよ！もう三回目だぞ！？」

ク「知らないよ！それに勝ちたいならもっと早く決着つけなよ！」

ユ「まあ、そのお陰で私にまだ負けがないんだがな…それにこれ以上ケイジに強くなられると私の立つ瀬がありませんよ、クローゼ」

ク「…むぅ…でもユリアさん！ケイジったらいつも模擬戦が引き分けだからっていっつも鍛錬ばかりなんですよ！？」

クローゼがユリ姉に抗議している

い～じゃねーかよ、鍛錬くらい

それにちょいちょいクローゼも参加してんじゃねーか

するとユリ姉ははあ～と深い溜め息をついて、

ユ「ケイジ…もう少し殿下を構ってやれ」

ク「そういう事じゃ…まぁ、構って欲しくない訳じゃ…（ゴニョゴニョ）」

？最後の方聞こえなかったんだが…

しかもユリ姉はなんか生暖か～い目でクローゼ見てるし…

ケ「…気が向いたら」

ク「…はぁ～…どうせそんな返事だと思ってはいたけど…」

ユ「はぁ…どうしてそうお前は鈍感なんだ…どこで育て方を間違えたかな…？」

何か知らんが二人に溜め息をつかれた。…俺自分で人より感覚は鋭い自身あるんだけどなぁ～

ク＆ａｍｐ；ユ「はあ～」

…何か腹立つな～（怒）ｓｉｄｅクローゼ

ケ「……」

ク「…美味しい？」

こんにちは、皆さん。クローディアです。

今日はおばあ様にケイジ共々お茶に誘われました。なので前々から作り方を教わって練習していたアップルパイをケイジに食べてもらっているのですが…

ケ「……」

ク「…ケイジ？ねぇ…」

ケ「……」

ア「…反応しませんね（苦笑）」

ケイジが感想を言ってくれません

黙々と食べ続けてます

…食べてくれてるって事は不味くはないと思うんだけど…

暫くして、ケイジが食べ終わった

ケ「……けぷっ（凄くご満悦な表情）」

ク「ケイジ」

ケ「ん？」

ク「あの…どうだった？」

ケ「……」

ううん…何かいざ感想を聞くと緊張する…

ユリアさんは美味しいって言ってくれたんだけど…

ケ「クローゼ…」

ク「う、うん」

ケ「めちゃくちゃ美味かった」

ク「ほ、ホント！？」

ケ「お、おう…」

ク「……♪」

やった♪ケイジが美味しいって言った～♪

ケ「（何でコイツこんなに嬉しそうなんだ？…ああ、自分のお菓子が上手く出来たからか）」

ア「ふふふ…（クローゼったら…立派に青春してるわね。あの子達も１５才になった事だし…そろそろいいかしら？）」

今度はケーキを作ってみようかな？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ア「ねぇ二人共」

ケ「なんですか？」

ク「？どうかしたのですか？おばあ様」

いつも通りに鍛錬の後にクローゼとお茶してだべって（今日はアリシアさんに誘われたらしいが）いたら、今まで俺とクローゼのやりとりを静観していたアリシアさんが急に改まって俺達に話しかけてきた

ア「貴女ももう１５才になった事ですし、城に籠もってばかりいないで、一度社会に出るべきだと思うのです」

ク「それは…」

ケ「まあ、その通りですね」

むしろ15まで外に自由に出れないなんて、どんだけ箱入り娘だよ

…あ、姫さんだったか

え?俺?基本出入り自由だよ?だからちょくちょくグランセルの闘技場とか行って修行ついでに小遣い稼いでますよ?

…ちなみに闘技場に行く時はフードで顔隠してるから正体はバレてない

…何か話がそれたな。つまりはアリシアさんはクローゼに一般常識とか社会の感じとかを実際体験して欲しいんだろう。

それに関しては大賛成だ。城にいれば、家庭教師がいるから教養は身に付くが、一般常識となると、少し勝手が変わってくる城にいて身に付くのは作法、市民に対しての振る舞い方などだ。

とてもじゃないが一般常識なんぞ学べる場所じゃない

俺は普通に接しているが、あくまでクローゼは王家の人間だ。当然兵士やメイド達はクローゼを“クローゼ”としてではなく“姫”として接する

…そんな環境で“常識”なんてわかるはずがない

アリシアさんもそれを危惧したのだろう

…となると、やっぱ年齢的にも、常識的にも行く場所は…

ア「それでですね、クローゼ。学校に行ってみる気はありませんか

？」

そう、学校だ

まあ１５って言ったら中３か高１だしな

ク「学校…ですか？」

ア「ええ。とある学園に知り合いがいましてね。そこでなら貴女の素性を隠して通えます。それに全寮制ですから、安全面でも心配ないでしょう」

ク「……」

何故かクローゼが俺をチラチラ見ている

…何でこっち見てんだ？

ア「それとも…嫌ですか？」

ク「いえ、そんな事は無いのですが…」

再び俺をチラリと見るクローゼ

だから何でこっち見んだよ

ア「（…ああ、そういう事ですか）心配ありませんよクローゼ。勿論ケイジも一緒ですから。」

爆弾発言をのたまいなさるアリシアさん

…今なんて言ったこの人？

ク「本当ですかおばあ様！？」

ケ「ちょ、アリシアさん！？何で俺まで！？」

ア「あら、貴方だってクローゼと同い年じゃないですか。それに貴方はクローゼを護るんでしょう？」

ケ「うっ…」

それを言われると俺はもう反論できない

俺は数年前、ある誓いをした。他の誰でもない、俺自身に。

それを破るのは俺のプライドが許さない

ケ「…はぁ…わかりましたよ」

ア「ふふ、それではクローゼをよろしくお願いしますね？（未来の旦那様候補として）」

…今なんか誰かに狙われた気がしたけど…気のせいか？

ケ「わかりました。出来る限りサポートさせて頂きます」

…まぁ、せっかく俺まで学校に入れてくれるって言うんだから、お言葉に甘えて学園生活を楽しむとしますか

ク「（ケイジと学校…つまりはケイジと…）」

…とりあえず隣でトリップしてるバカは放置しとこう。何か幸せそうだし。もう黒ーゼは見たくねぇし。

ア「…あ、そうだ、二人共、編入試験は一週間後ですよ」

ケ&ク「……はい？」

ア「編入試験はかなり難しいそうですよ。頑張って勉強しなさいね」

ク「（一週間…なんとかなるかな…？）」

ケ「え～…編入試験～…面倒くせぇ…」

ア「ふふふ…まあ、諦めてちゃんと勉強する事ですね」

ケ「は～い」

まあ、しませんけどね

～試験当日～

「用意は出来ましたね？それでは…始め！」

ついにただの一度も勉強する事無く試験当日を迎えた

クローゼの方はこの一週間みっちり勉強していたみたいなのでまず通るだろう

ま、俺も試験くらいはやる気だしますか

ケ「（なになに…問1、半径ｒの円と半径2ｒの円が一辺ａの正方形の内部に～略～…これを解け…）」

…これ大学レベル、しかも多分東大入試レベルじゃねーか。

え？何？普通の学園じゃねーの？そりゃあ全寮制って聞いた時からおかしいな～とは思っていたけどさぁ…

ケ「（まあいいか。余裕で解けるし。）」

転生前にハーバードを現役で主席合格した俺に不可能はないぜ！

～試験終了～

ク「……」

ケ「お～いクローゼ～、生きてるか～？」

試験が終わった瞬間、クローゼが机に倒れ込んだ

まあ、そりゃあ半日丸々休み無しで試験受けてりゃそうなるわな

ク「…ケイジは何でそんなに平然としてるの？」

ケ「いや、簡単だったし」

ク「嘘だッッッ！！」

ケ「うおっ！？ちょい待てクローゼ！その発言はなんかマズい！」

クローゼ→黒ーゼ「…ケイジがいけないんだよ?あんな試験を簡単なんて言うから…」

ケ「ちょ、待て!レイピアを出すな!」

黒「クすくスくすクス…」

ケ「笑いながら突くなァァ!正気に戻れェェ!ちょ、警備員さーん!!」

~しばらくお待ち下さい~

警&ａｍｐ;ケ「ぜー、ぜー、ぜー…」

あの後、俺の声に何事かとやって来た警備員と共に黒ーゼをなだめる事に成功した

ケ「…すみません、ご迷惑お掛けしました…」

警「いや、大丈夫だ…しかし何があったんだ?」

ケ「…とりあえずコイツがここに入ったら機嫌だけは損ねない事をオススメします」

警「ああ…そうするよ…」

ク「すー…すー…」

クローゼは気が済んだのか寝てしまった…ったく、誰がこの後グランセルまでおぶると思ってんだ。ものっそい目立って恥ずかしいだろうが

ケ「じゃあそろそろ俺達は帰ります。定期便の時間もありますし」

警「そうか…君達ここに編入するんだろ？これからよろしくたのむよ」

ケ「合格したら、ですけどね。こちらこそコイツ共々お願いします」

警「ははは、そうだったね。じゃあ合格してる事を祈っているよ」

ケ「ありがとうございます。じゃあ俺達はこれで…」

警「ああ、またね」

またね、か…試験、コイツも受かってたらいいな～

そんな事を考えながら俺はクローゼをおぶって帰路につくのだった

…勿論、クローゼをおぶって定期便に乗った俺は凄く目立ってしまい、ものすごい恥ずかしい目にあったのだった

「ふむ、クローゼ・リンツ…１０００点満点中６７８点…５００点で合格という事を考えるとかなり優秀な成績じゃな…
さて、もう一人の方は…ケイジ・ルーンヴァルト…１０００点満点中…１０００点!?満点じゃと!?ほぼ卒業試験級の試験を…

……こやつ、ここに入る意味あるのかのぅ…？」

その日、やけに沈んだ学園長ともの凄く騒がしい職員室が、生徒達の間で疑問に思われていたらしい…

第三話『生徒会ｖｓ自由人ｓ』（前書き）

第三話です！

とりあえず３ｒｄのキャラが普通に出て来ますが気にしない方向で

…いつになったらＦＣ入れるかな～…

第三話『生徒会ｖｓ自由人ｓ』

「…ふむ。これで入学手続きは全て終了だね。…改めて、ジェニス王立学園へようこそ。クローゼ君、ケイジ君。」

ケ「あ、こちらこそ。お世話になります。」

ク「……」

…ん？珍しいな。クローゼが挨拶されて何の反応もしないとは

「…クローゼ君、君はキチンと学園が課した編入試験を合格した。もっと堂々と胸を張ってもいいのではないかな？」

ク「コリンズ学園長…」

…ま～たこの阿呆は馬鹿な事考えてやがったか

ケ「…クローゼ」

ク「何？ケイジ…っていひゃいいひゃい！ふぁなふぃて～！（痛い痛い！離して～！）」

俺はネガティブ思考をまた展開するクローゼの頬を両側から引っ張る

お～よく伸びるな～

ケ「どうせまたお前『自分が王家の人間だから～』とか何とか考えたんだろ？」

ク「ふぁっふぇ…（だって…）」

何か言おうとしたクローゼの頬をさらに引っ張る。

…クローゼは手をばたつかせて逃れようとするが逃がすわけねぇだろ（笑）

ケ「ま～だそんな事を言うかその口は～？」

ク「いひゃいいひゃい！ふぉんふぉひいひゃい！ふぉめんなふぁい！ふぁふぁふぃふぁふぁふぁっふぁふぇふ～！（痛い痛い！ホントに痛い！ごめんなさい！私が悪かったです～！）」

ほぼハ行で構成された言葉を解読してクローゼの頬から手を離す

俺から解放された瞬間、クローゼは俺から距離を取って睨んでくる

…そんな涙目で睨まれても全く怖くないな

ク「うう～（泣）」

ケ「…そもそもあのアリシアさんが贔屓なんかする学校に通わせる訳ないだろうが。」

ク「それは…そうだけど…」

正直、あの人以上に公平、平等、公正、誠実な人を見た事がない

あの人が贔屓を認めるとか…天地がひっくり返っても無い

ケ「ちょっとは自分に自信持てよ。自信過剰になるのはダメだが、お前は自信持たなさ過ぎだ。
…この一週間一生懸命勉強したんだろ?その成果が出たって事でいいじゃねぇか」

ク「ケイジ…」

コ「その通りだよ、クローゼ君。私は女神(エイドス)に誓って贔屓なんかはしていない。君はクローゼ・リンツとして正規に試験を合格したんだ。もっと自信を持ちなさい」

ケ「…だそうだ。これでもまだ不満か?」

…これで不満だったら“お仕置き”喰らわしてやる

ク「(ビクッ!?)
う、ううん。ありがとう、ケイジ。
…学園長、これからよろしくお願いします」

ようやく納得したのか、学園長に頭を下げるクローゼ。

うんうん、人間素直が一番だな

コ「さて、それじゃあこれから君達は寮生活になるわけだが…」

あ、説明ですか。切り替え早いッスね

コ「君達の荷物は既に寮の前で待っている君達のルームメイトにな

る人に預けてある。
寮生活は基本的には自由だが、細かい事は彼らに聞いてくれ」

ケ「了解です」

ク「はい」

コ「それと、明日は朝にクラスメートたちに顔合わせしたらその後はジル君とハンス君…君達のルームメイトに学園を案内してもらいなさい」

ク「あ…ありがとうございます。」

コ「私からの説明は以上だ。君達の学園生活が実りのあるものになるように祈っているよ
…ああ、女子寮は正面玄関から真っ直ぐ中庭を抜けて右、男子寮は左だ」

その後俺とクローゼは学園長にお礼を言って寮に向かった

コ「…にしてもあの少年、本当に１５か？教師として雇っても問題ない位の精神年齢だね…」

ケイジ・ルーンヴァルト、実質的年齢、３０代の男。

中庭を抜けた所でクローゼと別れて寮に向かう

何か残念そうな顔をしていたクローゼはスルーした

中庭を抜けた辺りから既に寮は見えていたので、時間はそんなにかかっていない

？「…おっ、アンタが新入生か？」

薄紫の神に少しそばかす？が散った顔の少年が寮の前に立っていて、俺の姿を見つけるとすぐに近寄ってきた

ケ「ああ。ケイジ・ルーンヴァルトだ。これからよろしくな」

ハ「おう！俺はハンス。歓迎するぜ！
いや～今まで一人部屋だったから寂しかったんだよな～」

…うん、ノリはよさそうだな

ハ「じゃ、とりあえず部屋に案内するよ。疲れてるだろ？」

まあそりゃあ。定期便の中でずっとクローゼのネガティブ思考を聞かされてたからな。

まあ「お仕置きされたいか？」って言ったら一瞬で黙ったけど

その頃クローゼは…

ク「！？（ブルブル）」

ジ「？どうしたのクローゼさん？」

ク「け…ケイジが…」

ジ「ケイジ？」

ク「い、嫌！“お仕置き”はいやあぁぁ！」

ジ「ちょ！？クローゼさん！？クローゼさぁぁぁん！？」

何故かケイジの思考を悪い方向にキャッチして軽く錯乱していたそうな…

ハ「ここだ。さあ入った入った！」

ケ「ん。お邪魔しまんにゃわぁ～」

某貧乳貧乏神のセリフで部屋に入る

ケ「…おお！？なかなか広い！」

ハ「だろ？本来は三人部屋らしいからな」

俺は早速荷を解き始めるその途中

ハ「ルーンヴァルト」

ケ「ケイジでいいぞ？俺もハンス（笑）って呼ぶから」

ハ「（笑）ってなんだ!?俺のなにがおかしいんだよ!」

ケ「存在」

ハ「即答!?つーか初対面でここまで他人を弄り出す奴初めてだよ!?」

ケ「いや～何かハンスから“弄ってくれ”的なものが…」

ハ「出てねぇよ!?」

予想通り。コイツは弄られ役だ。

ケ「まあ、冗談はさて置き…」

ハ「真顔で冗談言うなよな…」

ハッハッハ、これくらいで疲れてたら俺のルームメイトは務まらんぞ?

ケ「これからよろしくな?ハンス。」

ハ「…ああ、こちらこそよろしく頼むよ」

まあ、何だかんだで楽しくなりそうだ…

翌日、クローゼと一緒にクラスに顔を出して、ハンスとクローゼのルームメイトのジルに学園を案内してもらった

…クローゼがやけに他人行儀だったのが気になったが…まあ、その

うち治るだろう

～1ヶ月後～

ケ「ｚｚｚ…」

ク「ケイジ、起きて…」

ケ「ｚｚｚ…」

ク「ケイジ～…」

ケ「ｚｚ…ん～…後五年…」

ク「待てるかっ！！」

ケ「ごっ！？」

いった～！めちゃくちゃ痛っ！？

せっかく気持ちよく寝てたのに…ん？

ケ「あれ？会長どこいった？」

ク「わからない。ジル達も必死に探してるんだけど…」

さっきまで隣でくつろいでいたんだがな

流石サボリ魔。逃げ足はもはやルパン並みだな

それはともかく、ここ1ヶ月でクローゼは固さが取れた

…ちょっとだけ。

まだジルやハンス、生徒会の人達以外にはちょっと固い

でもまだマシになったんだぜ?始めの二週間なんか同級生と別れる時に「それではこれで失礼いたします」だぞ?

…しかもその時に「どこの召使いだよ。バカだろ」って言ったらダイヤモンドダスト喰らいそうになった

このままじゃマズいって事であえてクローゼと距離を置いてみたらこれが成功したようで、ジルとハンスは呼び捨てに出来る位仲良くなり、生徒会の人達とも関わりを持ったみたいだ

ついでに、結構昔にクローゼ共々お世話になった孤児院の院長先生、テレサさんとも再開。

残念ながらご主人は亡くなってしまったらしいが…テレサ先生に会えただけでも嬉しかった

…クローゼなんか泣きついてたからな

…そのネタでからかったら顔真っ赤にしてアクアブリード連発された…いや~流石にあれは死ぬかと思ったね、うん

その後、なんやかんやあって俺とクローゼは生徒会にこそ入ってないものの、生徒会の手伝いをしている

…この生徒会、最重要にして最優先任務が

生徒会長の捜索

である

…今「それだけ?」とか思った奴、前に出ろ。今なら半泣かせで許してやる

現生徒会長…レクター・アランドール

生徒会長なのに、制服改造、授業のサボり、ギャンブル、ｅｔｃ…

コイツ本当に生徒会長か?という生徒会長だ

特徴としてサボリ魔。しかも逃げ足はルパン並み。さらに無駄に頭いいから裏掻きまくって捕まらない。

…個人的にはノリがいい人、くらいに思ってる。後サボり仲間とも。

…とりあえずクローゼが俺をわざわざ起こしてくる用事って言ったら一つしかない

ケ「…で?何か用事か?」

ク「うん。会長を捕まるのを…」

ケ「だが断る」

ク「ええ！？いいじゃない！」

ケ「やだよだりーよ面倒くせぇよ。いつも通りジークに探してもらえ」

因みにジークって言うのはシロハヤブサで、軍の通信ができない場所への連絡係だ。

飛空艇が使えなくなった時、ジークより速い連絡手段は無い、と言われるくらいチートなハヤブサである

ク「もうお願いしたよ。でも建物の中に逃げ込んだみたいで…」

ケ「…はあ…」

あの人もまた面倒くさい事を…

…確かこの前が旧校舎、その前が中庭の木の上…そう来れば今回は…

ケ「…体育館。」

ク「え？」

ケ「多分体育館だ。横の階段上がったとこら辺で本でも読んでんじゃねぇか？」

ク「…行ってみる！」

ケ「行ってら～」

さて、もう一眠りするか

余談だが、俺とクローゼが会長を探すのに参加した事で会長の捕獲率が2割から6割に跳ね上がったらしい。

特に俺が手伝った場合の捕獲率は9割だとか。

まあめったに手伝わねーし、むしろ一緒になってクローゼから逃げてる方が多いんだがな。

…つーか場所完全に読み当ててんのに逃げ切るとは…本格的にルパン?世目指せんじゃねーか?

第四話『鬼ごっこ…そして会長の失踪』（前書き）

何か無理やり過ぎたかな～

と本人でも思うくらいいつも以上の駄文です

それでも読んでやんよっと言う広い心の持ち主はどうぞ！

第四話『鬼ごっこ…そして会長の失踪』

ケ「ムリムリムリ！！何ですかアレ！？完全に狩る者の目じゃないスか！」

レ「バカヤロー！アレはそんな生易しいもんじゃねぇ！アレに捕まったら…」

ケ「捕まったら？」

レ「…死ぬな」

ク＆ａｍｐ；ル「好き勝手に悪者にするな～！！」

ケ＆ａｍｐ；レ「ギャァァァ！！来たァァァ！！」

どーも、ケイジです

とりあえず一言言わせて下さい

…何でこうなった？

――――――

そう、あれは今日の放課後…

ケ「～♪」

俺は授業が終わってやっと何の気兼ねもなく昼寝出来る！、と意気揚々とクラブハウスの屋根の上に行こうとしていた時だった

「あ、あの！」

ケ「ん？」

確か同じクラスの…名前は忘れたからいいや。Aさんに話しかけられた

ケ「どうした？俺に何か用か？」

「ええと、その、あの…」

…何かじれったい

しばらく待っていると、心を決めた様子で

「うん、…あの…初めて会った時から好きでした！付き合って下さい！」

告白してきた

…はい？

え～っと、この空気は冗談じゃないな。ガチだね。うん。

とは言っても、俺からしたら名前も知らない一般人Aさんからの告

白だったわけで…

ケ「…ごめん。」

断るしかねーじゃん。遊びで付き合うとか最低だと思う

「…そっか。ごめんね。急に変な事言っちゃって」

ケ「いや、こっちこそごめんな?せっかく勇気出してくれたのに断って」

「いいの。何となくこうなるのわかってたから」

その後、少しだけ話して、そいつを慰めて俺達は別れた

…俺もバカじゃないからアフターケアくらいはしますよ

あ、そういや名前聞くの忘れた

そんな事を考えながら後ろを向くと…

ク「……」

ものっっっすごい笑顔のクローゼがいた

その笑顔を見たら十人が十人惚れるんじゃないかって笑顔なんだが

…何故だろう。冷や汗が止まらない。

そんな俺の心境を知ってか知らずか、普段より三割増しの低さの声で

ク「…今の人、誰？」

と仰られました

ケ「…多分同じクラスの奴。名前は忘れた。つーか知らん」

表面上は落ち着いて返答する俺だが、実際は冷や汗ダラダラの足ガクガクだ

…そこ、チキンとか言うなら今すぐ俺と変わって下さい。お願いします。マジで

だって殺気とかそんなんじゃねぇもん。無条件で土下座したくなるとか初めての体験だぜ？

そんな中耐えてる俺を褒めてやりたい

ク「へぇ～知らない人なんだ～…だったらなんで…告白なんてされてたのかな？」

ケ「俺が知るかよ…こっちが知りたいくらいだ」

ク「へぇ～…それじゃあ無意識であの娘落としたんだ。凄いね～モテるんだね～ケイジは」

…最後の方が恐ろしく棒読みだった

ク「噂じゃケイジのファンクラブまで出来てるらしいしね～…」

ケ「…とりあえずお前は何しに来たんだ？」

ク「べっつに～？何も無いけど～」

ケ「じゃあブツブツ文句言うなよ～（怖いから）」

と、俺は恐怖の余りそう言った。言ってしまった

ブチッ

何かが切れる音がした（Dグレ風）

ク「フフフフフフフ…」

ケ「く、クローゼ？」

ク「ケイジ…ちょっとO☆HA☆NA☆SHI…しようか？」

ケ「何故そのネタを知っている！？」

ク「問答無用！少しは反省しろ～」

ケ「何にだァァァ！？」

やぶ蛇だったと、思わなかったんだ…

――――――

それから途中でこれまた何故かルーシーさん（生徒会の対会長最終兵器）から逃げてる会長を発見、合流して、魔王二人から逃げている

会長は廊下で女子とだべっていたら、何故か般若となったルーシーさんに追い掛けられてるらしい

クローゼ共々謎だ。俺達が何をした！

ル「レクター、いい加減に捕まりなさい！」

レ「嫌だ！今お前に捕まったら俺の中の大切な何かを失う気がする！」

ク「ケイジ、何で逃げるんですか？」

ケ「会長に同じ！」

ク「そうですか…あくまで抵抗しますか…」

ケ「つーかお前絶対キレてるだろ！お前に敬語なんか使われたの初めてだぞ！」

ク「いやですねぇ…キレてるなんて…ケイジが捕まってくれたら治る気がしますよ」

ケ「嫌だ！諸々危険な予感しかしねぇもん！（主に俺が）」

ク「大丈夫ですよ。痛いのは一瞬ですから」

ケ「それ何かお前が言ったらダメな気がする！」

会長は会長で同じような会話をルーシーさんとしている

くそう、タイムリミット（女子寮の門限）まで逃げ切れば俺達の勝ちだというのに…まだ一時間もあるだと!?（因みに現在7時）

ル「ちっ！切りがない！これは奥の手をきらないと…」

お願いします。いつもの優しい先輩に戻って下さい。そしてクローゼの暴走を止めて下さい

もちろんそんな儚い願いが叶う訳も無く…

ル「行きなさい！レオ！」

ク「こっちも出番ですよ！ハンス！」

ガサッ

レオ&ハ「うらぁぁぁ！」

ケ&レ「!?」

クローゼ達が二人の名前を呼ぶと同時に草むらからレオ先輩とハンスが出てくる

レ「なっ！レオにハンス!?お前ら裏切ったのか!?」

レオ「そもそもお前についていた覚えはないんだが…すまんケイジ、大人しくアレに捕まってくれ」

ケ「謹んで遠慮します。それより早くアレを止めて下さい。」

レ「つーか何でオレには聞かねぇんだ！」
レオ「日頃の行いの差だ」
ハ「むしろ会長はざまぁみろって感じだからな」
レ「ひどっ！！」

今の状況を説明すると、二人が俺をスルーして会長をとり押さえていて、その会長が俺の足に半端じゃない力でしがみついている

レオ「そしてケイジ。すまん。ルーシーはコレを献上しなくても明日になれば止まってくれる気はするが…正直ああなったクローゼは止まると思えん。無駄な抵抗は止めて捕まってくれ（俺達の平穏の為に）」
ハ「そうだぜケイジ。ルーシーさんは会長が怒らせてばっかりだから止める方法はよくわかるが、クローゼは今までに本格的にキレた事がない。つまり止める方法がわからないって事だ。…そう言う訳だから大人しく捕まってくれ（俺達の命の安全の為に）」
二人共心の声がだだ漏れなんだがな
ケ「絶対嫌です。俺の何かが確実に危ないんで。…と言う訳で離して下さい会長。」
もう奴（魔王）がうっすら見える距離まで来てるんで
レ「後生だから助けてくれ！まだ捕まりたくない！」

ケ「『俺に構わず行け』くらいの気概はねーのかアンタは！」

レ「お前こそ『お前を見捨てるくらいなら死んだ方がマシだ』くらいの優しさは無いのか！」

ケ「今までお世話になりました。骨くらいは拾ってあげますんで潔く逝って下さい」

レ「ふざけんな！お前も道連れだ！」

ケ「いやガチでふざけんな！もうクローゼの顔が見える距離まで来てんだよ！」

レ「人生諦めが肝心だと俺は思う！」

ケ「知らねーよ！つかアンタが手を離せば俺は諦めなくてもいいんだよ！」

そして仲間割れをした挙げ句、クローゼが後１００ｍくらいまで来たときに思いっきり会長の手を蹴って逃げた

…後ろから断末魔っぽい悲鳴が聞こえてきたが俺は気にしない。俺のせいじゃない。俺は何も聞いていない

会長が「覚えてろケイジー！！」と叫んでいたのを華麗にスルーして俺は再び逃げ始めた

…さようなら会長、迷わず成仏して下さい。（注：死んでません）

～３０分後～

…やべぇ…後３０分もあるのに体力が…

あの危機を乗り越えてから、クローゼの手が容赦なくなった

…いくら人が周りにいない所だけとはいえ、アーツもクラフト（ジーク）も使ってくるんだぜ?俺以外なら間違いなくもう死んでる（捕まってる）

ク「み～つ～け～た～！」

ケ「ギャァァァァ！！！」

しかもたまにこうやって角に隠れてるし！

レオ先輩とハンスには探させて自分は一つの場所に隠れて待ち伏せって…

しかも何言われたか知らねーけど先輩とハンスが俺を見つけると必死な顔で「頼む！捕まってくれェェェ！」って叫びながら追い掛けてくるようになった…本当に何言ったんだアイツ?

因みにジルはいち早く身の危険を感じて寮に逃げ込んだらしい

ク「ケイジ…どうして逃げるの?私の事嫌いなの?」

と、普通に言えばかなりキュンとくる台詞を言っているが、実際は追い掛けながらアクアブリードと、時々ダイヤモンドダストを溜め

無しで連発してきている
物理的に無理だろその攻撃！
ケ「嫌いじゃねぇけど、俺の本能が逃げろって言ってんだよ！」
ていうか今日でちょっとクローゼが嫌い…というよりトラウマになりそうです
ク「じゃあ…私の事どう思ってるの？」
アーツを放つのを止め、足も止めたクローゼがいつもの声で問う
どう思ってるって言われてもな～…ん～…
ケ「…大切な人、かな」
ク「大切な…人？」
ケ「ああ。昔っから一緒にいるからかな？周りの奴らより、一番大切な人だな（友達的な意味で）」
ク「…嘘じゃない？私が一番大切な人なの？（恋人的な意味で）」
ケ「ああ（フレンドリィ的な意味で）」
ク「そっか…ふふ♪」
ケ「？」

何かクローゼからプレッシャーが消えた？

…まあいっか。危険が去った訳だし

ケ「じゃあ帰るか。そろそろ門限だぞ？」

ク「あ、ホントだ。」

ケ「ほら行くぞ。」

ク「うん。…えいっ！」

ギュッ

何故かクローゼが腕に抱きついてきた

ケ「何してんのお前？」

ク「いいじゃない。別に」

…まあいっか。またクローゼの機嫌が悪くなっても面倒だし

そう考えた俺はそのままクローゼを送ってから寮に帰った

そして帰って早々にハンスが秘密で保管している秘蔵本を全て外に放り出し、イラプションで灰も残さずに焼却した

こういう時に指向性のある術って便利だよね

～その頃のハンス達～

レオ「…なあハンス。」

ハ「…何ですか先輩」

レオ「俺達は何の為にこの一時間走り続けたんだ?」

ハ「…言わないで下さい。何か無性に悲しくなるんで」

レオ&ハ「はあ…」

溜め息を吐いた二人の目はどこか遠くを見つめていた

レオ「…では俺は生徒会室に荷物を取りに行ってから寮に帰る。お前も早く帰れ」

ハ「はい。…お疲れ様でした」

レオ「お前もな」

ハンスはまだ知らない。帰ってからもまだ不幸が待っている事を…

～そして数ヶ月後～

今生徒会室は結構騒然としている

レオ「全く何を考えているんだアイツは！」

机を叩きつけ、怒りを露わにするレオ先輩

ル「……レクター」

言葉は少ないが、見るからに悲しんでいるルーシー先輩

ジ「…あのバカ会長…」

ハ「前々から何をするかはわからなかったが…」

なんとも言えない表情のジルとハンス

ク「会長…」

何かを思い返すように目を閉じているクローゼ

…こうなった理由は簡単だ。あのアホ生徒会長が卒業まであと数日と言うタイミングで退学したからだ

自由人だ自由人だ言っていたがまさかここまでやるとはな

一つだけ言える事は、その日は、いつもは騒がしいはずの生徒会がやけに静かだったって事だ

そして卒業式は何の滞りもなく終わった

…物足りない何かを残して

キャラ設定（前書き）

名前の通りキャラ設定です

何かあるたびに追加します

キャラ設定

ケイジ・ルーンヴァルト
（本名は北川司）

神様のミスで隕石が直撃して木っ端微塵と言う惨い死に方をしてしまった青年。

しかし、神様の罪滅ぼし（？）によってチート能力を持って転生し、運良くユリアに拾われて王城で育った

そのため、クローゼとは幼なじみであり、公式の場でもクローゼに敬語を使わなくていい数少ない存在である

死んだときは２０才だったが、神様のナイスフォローにより精神年齢＝肉体年齢となっているが、やはり時々ジジ臭い発言をする

３歳の頃には歩けて喋れ、５歳の頃には修行を始めていたため、すでにかなりチートである

リベール王国の親衛隊大隊長であり、アルテリア法国とも何らかの関わりがあるようである

・武器

長太刀『白龍』

ケイジ専用装備。ケイジのレベルに比例してＳＴＲが上がる刀。柄の所に白龍を模した飾りが鎖で繋がれている。七歳の時に神様から蒼燕と一緒に速達で渡された

小太刀『蒼燕』

ケイジ専用装備。刃を含めた全てが蒼い小太刀。白龍と同じで、レベルと一緒にＳＴＲと何故かＤＥＸが上がる

・容姿

黒猫のトレインをちょっと凛々しくした感じ（結社時代みたいな）

・クラフト

『鳳仙華』

切り上げで相手を宙に浮かせ、切り落として薙ぎ払う技。ＣＰ２０消費

単体　アーツ・クラフト解除

『閃華』

極限まで集中した居合いで駆け抜ける技。ＣＰ３０消費

直線　　ＳＴＲ２０％アップ　一撃死２０％

『写輪眼』

言わずと知れたあの技。ＣＰ２５消費

５ターン継続　　物理攻撃反射

・Ｓクラフト

『曼珠沙華』

極限まで高めた気を解放し、縦横無尽に駆け抜け、敵を屠る。剣戟の軌跡は、死の華を描く

一撃死８０％　　暗闇９０％

因みに術はアーツ扱いで
下級ＥＰ５０、中級ＥＰ１００、上級ＥＰ２００を消費する（ＥＰ省で削減可）

クローディア・フォン・アウスレーゼ

本作のヒロイン（仮定）

基本的な設定は原作通りだが、作者の陰謀でレククロを抹消された
普段は礼儀正しい、清楚なお嬢さまだが、ケイジが不穏な動き（他の女の子と無駄にフラグをたてる）を察知すると、黒ーゼになり、ケイジに天誅を下す
戦闘では、幼なじみの本領を発揮し、抜群のコンビネーションを誇る

・クラフト
原作通り

・Sクラフト
『白隼の夜想曲』（ノクターン・オブ・ホワイトファルケン）
扱いはチェインクラフトだが、ケイジ限定。二人がＣＰ１００以上の時、使用可能。
隙のない連携攻撃を叩き込んだ後、コキュートスとインディグネイション（アビス仕様）を決め込む鬼な技
夜に舞う隼は見るものを永劫の闇へ誘う
凍結ｏｒマヒ１００％

第五話『もっと熱くなれよォォォ！』（前書き）

第五話です

若干原作に入ったかな？

次くらいからは完璧に原作に入れるつもりです

それでは本編をどうぞ！

第五話『もっと熱くなれよォォォ！』

クローゼside

ク「クラム～！どこにいるの～！？」

私は今マノリア村に繋がる海道を歩いています

クラム…マーシア孤児院で引き取られている子供の一人…が孤児院を抜け出してしまったので、先生にお願いされて捜索中です。

…本当にどこまで行ったんでしょう？流石にクローネ峠までは行っていないと思うんだけど…

後はクラムが誰かにイタズラしてなければいいんだけど…

ク「クラム～！…まったく、ケイジがいない時に限って問題ばかり起こすんだから…」

まあケイジがいるときにこんな事をすればお仕置きはまず間違いないんですけどね

だからってケイジがいない時を狙って孤児院を抜け出すのはズルいと思います

ク「困ったな…どこに行っちゃったのかしら…」

そんな風に考え事をしながら歩いていたのがいけませんでした

「ヨシュア！ほらほら早く！」

「ちょっとエステル…ちゃんと前見て歩かないと…」

突然目の前に同い年くらいの二人組みが現れて…

「きゃっ！？」

「あうっ！？」

ぶつかってこけてしまいました

…結構痛いです

するとすぐに

「あいたた…ご、ごめんね、大丈夫？あたしが前を見てなかったから…」

と、オレンジ色の髪の女の子が手を差し伸べてくれました

ク「あ、いえ。大丈夫です。私の方こそよそ見をしてしまって…」

「あ、そうなの？じゃあおあいこって事で！」

女の子が笑う

明るい人ですね。太陽って言葉がピッタリな感じです

そんな事を考えていると

「まったく…エステル…何やってるのさ……」

ク「？」

横から男の子が女の子を注意してから私を見て固まってしまいました

…私の顔に何かついてるのでしょうか？

ハッ！？まさかクラムが！？

「ヨシュア、どうしたの？」

と、女の子が男の子の方を見ると、男の子は帰ってきたようで

「い、いや…ごめんね？連れが迷惑掛けちゃって。どこにもケガはないかな？」

ク「はい。大丈夫です。私も人を探していて…それでよそ見をしちゃって…」

私がそう言うと

「え？誰を探しているの？」

ク「帽子を被った１０歳くらいの男の子なんですけど…どこかで見かけませんでした？」

ケイジがいればすぐに…え～と、シャリンガン…だったかな？を使って見つけてくれるのに…

本人曰わく「一人一人の纏っているチャ…オーラは個人によって違う」らしいです

「帽子を被った男の子…？ヨシュア、見かけたりした？」

「いや、ちょっと見覚えがないな…」

やはりお二人共知らないようですね…

ク「そうですか…どこに行っちゃったのかしら……私、これで失礼します。どうもお手数をお掛けしました」

そう言って私はその場を後にして孤児院に向けて歩き出しました

本当に人に迷惑ばかりかけて…！

これはお仕置きが必要ですよね？

ク「ジーク！」

――ピューイ！

そんな鳴き声が聞こえたと共に、白い隼が私の腕にとまる

そしてそのまま私はペンと紙を取り出して手紙を書くと

ク「ジーク、これをケイジに届けてくれないかな？多分ハーケン門にいると思うから」

ジー「ピュイ！」

任せて、と言うように一鳴きすると、ジークは手紙をくわえて飛んでいきました

…ケイジが帰って来るまで一時間くらいですかね？

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

～ハーケン門～

ケ「は～い、後３０分以内に５周な～」

『だぁぁぁぁ！！大佐の鬼～！！』

ケ「……いいのか？そんな事言って…」

『さーせんしたぁぁぁ！！』

ケ「よし！後１０周だ！」

『…くそォォォ！この鬼畜大佐ァァァ！』

はい、見ての通り現在訓練中です。

俺はクローゼの護衛（アリシアさん曰わく友達かそれ以上…それ以上ってなんだ？）兼王室親衛隊大隊長なもんだから、いくら学生とは言っても自分の隊の訓練をしなけりゃならない

まあ俺の隊は全員で３０人だから時間はかからないんだけどな

…え？大隊じゃなくないかって？

いいんだよ。３０人で大隊分働けば

つー事で今ウォーミングアップをしていたんですが…

『……』

―死～ん―

全員見事にくたばってますね～…まあ甘やかすつもりは一切ありませんが

ケ「後休憩５分な」

「…なんで俺達と同じ時間、俺達の二倍以上の速度で走ってんのに、一切疲れてないんですか？」

ケ「鍛え方が違うからだよワトソン君（仮）……はい、休憩終了！一対一で組み手をしろ！」

『…イエス・マム』

ケ「…不満なら全員対俺でやるか？」

『イエス・マム！！あ～、一対一楽し～な～！！！』

…そんなに嫌か、全員対俺

そしてその後三対三、五対五をやり、時間が余ったので午前中の締めに何をしようかと考えていると…

――ピューイ

ケ「…ん？ジークか？」

ジー「ピューイ！」

突然ジークが何かをくわえて降りてきた

ケ「どうした？」

ジー「ピュイピュイ、ピュピュイ」

ケ「ふむふむ」

わからん。何言ってんのかさっぱりわからん。

と言うか良く紙くわえたまま鳴けるな

ジー「ピュイ！」

ジークがくわえている紙を突き出す

俺はそれを受け取り

ケ「なんだよ……ほぉ…」

そこには、急ぎで台も無しに書いたのか、少し雑な字で「クラムイタズラ　先生が困ってる」と書いてあった

他の人なら何コレ?となる文章だが、俺にはコレで十分だ

…流石幼なじみ、よくわかってらっしゃる。

ケ「ジーク、クローゼに昼過ぎ位に帰るって言っておいてくれ」

ジー「ピュイ!」

そう鳴くと、ジークはクローゼの所に戻って行った

ケ「さて…嬉しいお知らせだ。今日の訓練は午前中だけになった。」

『よっしゃァァァ!!』

そう言っただけでめちゃくちゃ喜ぶ兵士達。どんだけ訓練嫌いなんだよ

ケ「つー訳で、今日の締めは…やっぱり全員対俺だ」

『……』

一瞬で沈む。何か面白い

つーか今更だがコイツ等連帯感つきすぎだろ。戦闘中なんかアイコンタクトで動くんだぜ?凄くね?

ケ「まあそういう訳だ…今から正午の鐘が鳴るまで…大体二時間か、俺に一撃入れれたらその場で終了、治療班の5人がくたばっても続行、のルールで行くから
…そんじゃあ…掛かって来いやァァ！」

俺が開始を宣言すると

『オラァァァ！！日頃の恨みィィィ！！』

と、数人が突撃してくる。

ケ「甘いわァァ！」

俺はそれを軽く避け、全員を巻き込んで吹き飛ばすように横から蹴りを入れる

それで吹き飛んだ兵士達が壁に穴を開けて瓦礫に埋もれている

ケ「さあ…どんどん来いよ」

今の一瞬の出来事にビビったのか、残りの奴らは動こうとしない

ケ「来ねぇんなら…こっちから行くぞ？」

そう言って俺はいわゆる縮地を使って治療班を沈める

『なっ！？』

反応出来なかったのか、はたまた見えてすらいなかったのか、驚く兵士達

ケ「甘い…クローゼのアップルパイに砂糖と蜂蜜かけて食うより甘い！
…さて、これで治療班が消えた訳だ…どうするお前ら？」

『ち、チクショォォォォ！！』

ヤケになったのか、全員が一斉に掛かってくる

ここはあの台詞を言うしかないだろ！

ケ「もっと熱くなれよォォォ！！」

モ「まったく…もう少しまともに訓練できんのか…」

「無理ですよ…ルーンヴァルト大佐ですからね…」

揃って溜め息をつくモルガン将軍とその副官

モ「年に二回とはいえ、毎回どこかしらを壊すのはどうにかならん

ものか…
あ、また待機舎の壁が…」

「でもあの隊は実質王国の最強部隊ですから…
あ、執務舎の扉が…」

モ「他の隊と模擬戦をしても負けた所を見た事ないからな」

「せめて大して変わらない強さだったら何かしら言えるんですがね」

モ「カシウスの奴でももう少し真面目に訓練はしていたんだがな…」

「ルーンヴァルト大佐に真面目を求めるだけ無駄ですよ。面白さと楽しむ事と姫殿下の事しか頭にありませんから、あの人は」

モ&副「はあ……」
モルガン将軍、今も昔も部下に苦労する人

因みに訓練は鐘が鳴る前にケイジ以外の全員が動けなくなって終了した

兵士達には罰ゲームとして、午後の他の隊の訓練中ずっと走る事を命令された

その訓練を見ていた全ての人がケイジを『鬼教官』と認識したのは言うまでもない…

第六話『仕置き…いや、死置きだな』（前書き）

気付けば日付が変わってた…

とりあえず第六話です

まだエステル達は学園には来ません

次かその次くらいかな…

まあとりあえず本編をどうぞ！

第六話『仕置き…いや、死置きだな』

ｓｉｄｅクローゼ

とりあえず、ケイジに連絡はしたから、クラムが捕まるのは時間の問題なので、私は孤児院に帰ってきました

ク「ただいま戻りました～」

「あら、おかえりクローゼ。…クラムは見つかりました？」

ク「あ、いえ…まだですけど、ケイジに連絡を入れたので多分昼頃には捕まって連れてこられると思います」

「そうですか…良かった…」

あ、因みにこの人はこの孤児院の院長先生のテレサさんです

数年前まではテレサさんの夫さんが院長をしていたのですが…亡くなられたらしいです

私もおじさんにはお世話になったので、それを聞いた時は本当に悲しかったです…

テ「まあ、ケイジ君に任せたのなら安心ですね。ハーブティーでも飲みますか？」

ク「あ、ならアップルパイを作りますから、みんなでお茶にしませんか？」

テ「いいのですか？ならお願いします」

ク「はい♪」

そう笑って準備をし始めた時…

――ピューイ

ク「あ…ジーク！」

私が名前を呼ぶと、すぐに場所がわかったのか、キッチンの窓のへりにとまる

ク「どうだった？」

ジー「ピュイ」

ク「そう…昼過ぎ位までには戻ってくるのね？」

ジー「ピュイ！」

ク「ふふふ…だったらアップルパイはたくさん用意しなくちゃ♪」

ジー「ピュイ？」

ク「わかってるよ。ジークの分もあるからね。…後は焼くだけっと…」

と、ジークとお話していると…

――や、やめろよ！――――だろ！――！乱暴――！

と外から聞こえてきました

あれはクラムの声…？……まさか強盗！？

そうだったらクラムが危ない！！

そう思った私は慌てて外に出ました

すると、クラムを持ち上げている人の姿が…！

ク「ジーク！」

ジー「ピュイ！」

ジークが強盗（仮）の前を通り過ぎましたが、クラムはまだ持ち上げられたままです

とりあえずクラムを離させないと！

ク「その子から離れて下さい！それ以上乱暴をするのなら私が相手になりま……あら？」

…何か見覚えがありますね…ええと…

「あ、さっきの…」

「マノリアでお会いした…」

私とクラムを掴んでいる女の子が同時に気付く

何故こんな所にいるんでしょうか？

ジー「ピュイ？」

ジークも私の知り合いだと気付いたようで、敵なの？みたいな視線を送ってきます

クラ「助けて！クローゼお姉ちゃん！オイラ何もしてないのにこの姉ちゃんがいじめてくるんだ！」

クラム…あなたに限って“何もしてない”は絶対ありえないよ…

「な、何が何もしてないよ！あたしの紋章を取ったくせに！」

クラ「へん！だったら証拠を見せてみろよ！」

…完璧に悪役の台詞よね

女の子はまたクラムを捕まえようとしたけど…

クラ「あ、くすぐるのは無しだかんな！」

「ぐぬぬぬ…」

どうやらさっきはくすぐって自供させようとしてたみたいです

そんな漫才みたいな会話を見て半ば呆れていると

「やあ、また会ったね」

と、黒髪の少年が挨拶してきてくれました

ク「あ、その節はどうも…すみません、私てっきり強盗が入ったのかと思って…
…あの、それでどういった事情なんでしょうか？」

と、男の子に聞くと、男の子が答える前に

マ「クローゼお姉ちゃん、そんなの決まってるわよ。どうせクラムがまた悪さでもしたんでしょ」

と、マリィが言い切った

まあ、十中八九その通りでしょうけど

ダ「ねーお姉ちゃん、もうアップルパイできたのー？」

この子はどこからその情報を仕入れてきたのかな？

ク「もうちょっと待っててね。焼き上がるまで時間がかかるの（主にケイジのせいで）」

ケイジがかなり食べるからどうしても大きくなっちゃうしね…

「この悪ガキ！」

クラ「乱暴オンナ！」

ああ、まだやってたんですか…

マ「全く、いつまで経ってもクラムはガキなんだから」

ポ「アップルパイまだかな～」

…何だろう。このカオスな状況

「…何だかややこしい事態になってるね」

ク「あ、あはは…私もそんな気がします…」

と、私達は苦笑いするしかなかった

ジー「ピュイ」

ジークが急にテレサ先生だ、と言ったと思ったら

テ「あらあら、何ですか？この騒ぎは…」

ク「テレサ先生！」

本当にテレサ先生が出てきました

テ「詳しい事情はわかりませんが…どうやらまたクラムが何かしでかしたようですね…」

困った様子で言うテレサ先生

全くもってその通りです。流石院長先生ですね

クラ「し、失礼だなぁ。オイラ何もやってないよ。この乱暴な姉ちゃんが言いがかりをつけてきたんだ！」

「だ、誰が乱暴な姉ちゃんよ！」

…さっきと全く変わりませんね

テ「あらあら、困りましたね。…クラム、本当にやってないのですか？」

クラ「うん！当たり前じゃん！」

毎度の事ですが、返事だけはいいんですよね

というかまだこの期に及んでやってないと言い切るのがすごい…

テ「女神様にも誓えますか？」

クラ「ち、誓えるよっ！」

…今完璧に噛みましたね。テンパってるし

テ「そう…さっき子供部屋にバッジみたいな物が落ちていたけど…あなたの物じゃありませんね？」

クラ「え？だってオイラズボンのポケットに入れて……はっ！？」

「や、やっぱり～！！」

ク「まあ……」

「見事な誘導ですね…」

ゆ、誘導尋問（違）とは…流石です！テレサ先生！

私もアレが出来るようになれば…

……はっ！？私は何を！？

テ「クラム…もう言い逃れは出来ませんよ。取ってしまった物をそちらの方にお返ししなさい」

先生が諭すように言うと

クラ「うぅぅぅ～～～！わかったよ！返せばいいんだろ！？返せば！」

そう言って悔しそうにバッジみたいな物を女の子に投げた

「わっと…」

クラ「フンだ！あばよっ！」

と、その場から逃げようとしたけど…

ケ「へぇ…どこに行くんだ？」

クラムにとっての魔王に防がれました

side out

俺が孤児院に戻って来たら、何か地味に修羅場だった

まあ明らかにクラムが悪いって事はわかったがな

それでクラムはイタズラがバレたらバレたで、謝ろうともしないで逃げようとしたので…

ケ「へぇ…どこに行くんだ？」

とりあえず謝らせる方向でいきますか

クラ「け、ケイジ兄ちゃん！？」

ケ「他人様の物を取った挙げ句、バレたら逆ギレして逃げようたぁいい度胸じゃねぇか…」

…何か横で見慣れない奴らが震えてるけど…まあいいか

クラ「え、あ、あのな、ケイジ兄ちゃん？これには深～い理由が…」

まだ言い訳をするか…これは仕置き決定だな

俺は両拳をクラムのこめかみにセットする

クラ「ケイジ兄ちゃん！？」

ケ「理由があるなら遠慮無く言っていいぞ?…まあ嘘だってわかった瞬間にいつもの二倍の力と長さでお前のこめかみが抉れるけどな…」

クラ「ひいっ!?嘘です!理由はイタズラでやっちゃいました!ごめんなさい!」

ケ「よし!じゃあ…せいやァァ!」

クラ「ギャアァァァァァァ!!!」

~しばらくお待ち下さい~

ケ「反省したな?」

クラ「サー!イエッサー!めちゃくちゃ反省しました!」

ケ「じゃあ誰かに何か言うことあるよな?」

クラ「……はい」

そう言ってクラムはオレンジ髪の女の子の所に行って

クラ「……ごめんなさい…」

と、謝った

「…まあ、反省してるならそれでいいわよ」

ケ「本当にすまんかったな。うちのバカが迷惑かけた」

と、俺は女の子の連れであろう男の子の方に謝る

「別にいいよ。あの子も反省してるみたいだし。それにこっちの注意力不足って言うのもあるしね」

ケ「そう言ってもらえると助かる」

そんな感じでちょっとしんみりした空気になっていた時…

テ「まあ…こんな所で立ち話するのもなんですし…家に入りましょうか。お茶でも飲んで行って下さい。そのついでに詳しい話を教えてもらえますか？」

と言うテレサ先生の一言でお茶をする事になった

家に入る途中に

ケ「クローゼ。貸し一つな～」

ク「わかってるよ。今度は何がいいの？」

ケ「ん～…じゃあスイートポテトパイで。」

ク「了解♪近いうちに作って寮に持って行くね」

ケ「まあ、ほどほどに楽しみにしとくわ」

ク「何それ～！」

貸しを作るのは忘れない、それがケイジクオリティ！

～説明中～

テ「そうですか…そんな事を。あの子も悪気は無いのですが…イタズラ好きに加えて無鉄砲で…本当にすみませんでした。保護者としてお詫び申し上げます」

ケ「もう1～2回お仕置きしてからよ～く言い聞かせるんで…」

エ&ｐ;ヨ「いや、お仕置きはいいです」

何故かお仕置きはWで遠慮された

エ「あはは、お仕置きはともかく、もういいですよ。紋章もちゃんと戻ってきたし、美味しいハーブティーとアップルパイでチャラって事で」

テ「ふふ、ありがとう、エステルさん、ヨシュアさん」

女の子と男の子…エステルとヨシュアとはあの後自己紹介をした

どうやら二人共準遊撃士で、正遊撃士になるために王国を歩いて回っているんだとか

ヨ「でも本当に美味しいお茶ですね。街の酒場で淹れてもらったのと同じような味がしますけど…ひょっとして表で栽培されているものですか？」

テ「ええ、ハーブの栽培は私の趣味のようなものでしてね。それを宿酒場のご主人がご好意で仕入れて下さるんです」

エ「そうなんだ…さっき食べたアップルパイもすっごく美味しかったんですけど」

テ「ふふ…それは私でなくこの子が作ったものなんですよ」

エ「え?クローゼさんが?」

エステルが驚いてクローゼを見る

ケ「ははははっ!意外だとよ」

ク「ちょっと黙ってて」

ケ「ぐはっ!?」

冗談のつもりで言ったのに鳩尾に肘入れられた…理不尽な…

エ「い、いや、そういう意味でビックリしたんじゃないの!ただ本当に美味しかったから…」

ク「ふふ…ありがとうございます。あの…先ほどは本当に失礼しました。私とんでもない勘違いをしてしまって…」

エ「気にしなくていいってば。私もあの子を捕まえる時に荒っぽくしちゃったし。でも流石にあの白い鷹には驚いたけどね。」

ケ「鷹?ジークはシロハヤブサだぞ?」

いつの間に復活したのかって?…ついさっきだよ

結構ダメージがでかかったぜ…

ヨ「シロハヤブサ…確かリベールの国鳥だったね。よく訓練されてるみたいだけど君のペットなの?」

ク「いえ、私が飼っている訳じゃありません。仲の良いお友達なんです」

…仲良いのはわかるけど…言葉までわかるもんか?

エ「は〜、すごい友達もいたもんね。そういえばクローゼさんってジェニス王立学園の生徒よね?なのに、ここに住んでるの?」

ク「いえ…私は学園の寮に住んでいます。あまり遠くないので、休日などについケイジと遊びにきてしまうんです。ご迷惑かとは思うんですけど…」

少しだけすまなそうな表情になるクローゼ

テ「あらあら、迷惑だなんてとんでもない。色々と助かっていますよ」

ク「テレサ先生…」

流石先生、ナイスフォローです

テ「でもこちらに構いすぎて学業を疎かにしないようにね？まあ、“クローゼに限って”そんな事は無いと思いますけど」

ク「はい。肝に命じておきます」

ケ「…先生、クローゼに限っての所に悪意を感じたんですけど？」

テ「気のせいです」

…チクショウ、何も言えねぇ

エ「学園生活かぁ…そういうのも一度経験してみたかったわね」

ヨ「教会の日曜学校は週に一度しかなかったからね。でも、王立学園の入学試験はかなり難しいって聞くよ？」

エ「あう…私には逆立ちしたって無理か…」

ク「ふふ…そんな事無いです。遊撃士になる方がはるかに難しいと思いますよ。しかもその若さで…私の方こそ憧れてしまいます」

おーいクローゼ～？ここに同い年で王室親衛隊大隊長＋αの肩書きを持ってる人がここにいるんだけど？

その後アップルパイ（エステル達が食べた三倍の大きさ）を食べ終えた後、もう一度クラムに釘を刺してから戻って来たら、どうやらエステル達をルーアンのギルドまで送って行くらしい

…まあ色々世話になったみたいだし、少しくらい恩返ししときますか

第七話『やっぱりそうだよね君は！』（前書き）

第七話です

今回は若干甘？が入りますので、苦手な方は頑張って見てみてくださ
い

それでは本編をどうぞ！

第七話『やっぱりそうだよね君は！』

クラムのイタズラで迷惑を掛けてしまった新米遊撃士のエステルとヨシュアにルーアンのギルドまで案内をする俺とクローゼであった！」

ク「ケイジ、途中から口に出てるから（どうせわざとだろうけど）」

ケ「嘘っ！？」

ク「というか誰に喋ってたの？」

ケ「さあ？何か天の声が…」

ク「はいはい」

何かクローゼにあしらわれた気がしなくもないが、実際今かなり面倒くさい状況にはなっている

手配魔獣の…たしかジャバとかいうのが急に出てきて戦闘になってるからな

クローゼがこっちに近づいて来て

ク「（ケイジ、二人に手を貸さないの？）」

ケ「（アホか。いくら何でも時期尚早だ。エステルはともかく、ヨシュアに俺の正体がばれそうな気がするしな。）」

ク「（でも…）」

二人を心配そうに見るクローゼ

ケ「（大丈夫だって…いざとなったら…）って早速かよ!?」

チラッと二人の方を向くと、周りのザコは潰していたが、ジャバ本体に苦戦していた。

ケ「あ。そういやアイツは倒せば倒しただけ強くなるヤツだった」

今まで何体潰したっけ?…五体は軽いな

ク「もう!早く手助けしてあげて!」

ケ「あいさ〜」

まあクローゼの周りのザコは一瞬で切り払ったしいけるか…

そう考えて俺はエステルとヨシュアが二人がかりで押さえていたジャバに閃華を食らわせ、その追加効果で葬った

エ「え…!?ケイジ!?」

ヨ「助かったよ。…というか戦えたんだね」

エステルは純粋に驚いた目で、ヨシュアはジト目で俺を見て来る

ケ「や〜悪い悪い。アイツが倒したら倒しただけ強くなる事忘れてたわ。しかももう五回以上は倒してたしな」

エ&ａｍｐ;ヨ「それを早く言え！！」

ナイスハモりで～す

エ「もう…ケイジが始めから手伝ってくれてたらこんなに疲れなくても良かったんですけど」

ケ「まあ…ドンマイ？」

適当にはぐらかしてさっさと先に進む俺とヨシュアとクローゼ

ヨシュアはどうやら言っても無駄だと割り切ったらしい

エ「ちょ、ちょっと待ちなさいよ～！」

～ルーアン市～

エ「うわ～…ここがルーアンか。何て言うかキレイな街ね」

ヨ「蒼い海、白い街並み。まさに海港都市って感じだね」

その前にエステル、お前機嫌治るの早いな

口に出したらまた怒るだろうから言わないが

ク「ふふ、色々と見所の多い街なんです。すぐ近くに灯台のある海沿いの公園もありますし」

ケ「…クローゼ。何でそこで俺をチラチラ見るんだお前は？」

ク「もう…ケイジのバカ…」

ケ「何が！？」

最近クローゼがわかりません。マジで

エ「（ねぇヨシュア、クローゼさんってケイジの事好きだよね？）」

ヨ「（多分ね。…ケイジの方は気付いてないみたいだけど）」

そしてクローゼは気を取り直して

ク「でもやっぱり一番の見所は“ラングランド大橋”かしら」

エ「“ラングランド大橋”？」

ケ「この北街区と川向こうの南街区を繋ぐ橋だ。巻き上げ装置を使った跳ね橋になってんだよ」

ヨ「跳ね橋か…それはちょっと面白そうだな」

ケ「その前にギルドに行くんじゃねぇのか？」

エ「え？……あ、うん」

忘れてやがったなコイツ

ヨ「全く君って人は…」

ク「あはは…遊撃士協会は表通りの真ん中にあります。ちょうど橋の手前ですし、早く行きましょうか」

ケ「ああ、俺は橋ん所で待ってるな」

エ「わかったわ。それじゃあ後でね」

と、俺はギルドに向かう所で別れた。ぶっちゃけ面倒だったからだが…

まあどうせこの後街を案内とかするんだろうし、今のうちに休んでおくか

～15分後～

ケ「やっと来たか…」

エ「あはは、ちょっと時間掛かっちゃって…それにしても、これが“ラングランド大橋”かぁ…」

そう言って落ち着きなく周りを見渡すエステル

どうやら予想通りルーアン見物になったみたいだな

エ「やっぱり大きいわね。ヴェルデ橋の倍くらいはありそう」

ク「この橋が作られたのは今から40年ほど前だそうですそれまでは渡し船で両岸を行き来していたんですって」

エ「え?どうして橋を作らなかったの?」

ケ「この川は湖と海を結ぶ唯一の川だからな…橋を掛けると船が通れなくなるだろ?」

ク「それも導力革命によって跳ね橋を作る事で解決したんです」

エ「なるほど…」

エステルが納得した所で、次は南街区に渡る事になった

しかもエステルはどんどん倉庫区画に進んで行った訳で…

クローゼが倉庫区画について説明した後さらに奥に進む

すると

「ど、どうしてこんな場所に若い女の子たちが…」

…やっぱりいたな

「やいやい、ここは立入禁止だ!て、てめえらみたいなガキ共が入っていい場所じゃねぇんだよ!」

と、若干震えた声で不良A君が言った

エ「いや、別に入りたいなんて一言も言ってないんだけど…ところで、なんでそんなに緊張しちゃってる訳?」

「あ、やっぱり緊張してるように見える…？」

やっぱりしてたんかい

「…じゃなくて！とにかくここは立入禁止だ！とっとと向こうに行っちまえ！」

最後まで照れた感じで言う不良Ａ…ここまで来たら照れ隠しにしか聞こえねぇな

隣でヨシュアもクローゼも呆れてるしな

エステルは不良を見た事が無いのか興味津々だが

まだ話し掛けようとするエステルを引きずって、倉庫区画の出口辺りに来た時に…

「待ちな、嬢ちゃん達」

ケ「やっぱり来たか…」

倉庫区画の方から三人組の男がやって来た

エ「え、あたし達？」

「おっと、こりゃあ確かに当たりみたいだな」

「ふん、珍しく女の声が聞こえてきたかと思えば…」

因みに上からディン、ロッコ。で、まだ喋ってないのがレイス。俺

曰わく、“三バカトリオ”だ

ク「あの、何か御用でしょうか？」

デ「へへ、さっきからここをブラついてるからさ、ヒマなんだったら俺達と遊ばないかな～って」

そう言って明らかににやけるディン

ケ「おお、クローゼ良かったな。今モテてんぞ？お前」

ク「全く全然微塵も嬉しく無いから黙ってて」

俺のジョークに即答で返してくるクローゼ

…流石に酷くねぇか？

ほら、ディン若干涙目になってるし

エ「何よ、今時ナンパ～？悪いけどあたし達ルーアン見物の最中なの。他を当たってくれない？」

ここらへんは流石エステルだな。クローゼだけだったら「え、あの…」とか言ってどもりそうだ

レ「お、その強気な態度、オレちょっとタイプかも～♪」

エ「ふぇっ？」

止めとけ。ヨシュアが睨んでるから

ロ「見物がしたいんだったら俺達がしてやろうじゃねぇか。そんな生っちろい小僧共なんか放っておいて俺達と楽しもうぜ」

ヨ「……」

もう止めて…ヨシュアが怖いから

しかも…

ケ「あの～…クローゼさん?何故俺の腕に抱きついているのでせう?」

ク「え?駄目だったの?」

ケ「止めてくれ。主に周りの視線が痛いから。俺の心に突き刺さってるから」

ク「いいじゃない。今更そんな事を恥ずかしがる関係じゃないよ?」

ケ「いやどんな関係だよ。ただの幼なじみじゃねぇか」

と、クローゼと半分コントみたいな会話をしていたのだが…

エ「ちょっと!何が生っちろい小僧よ!あんた達みたいなド素人、束になってもヨシュアには…」

ヨ「いいよ。エステル。別に気にしてないから」

どうやら無視らしいです

デ「なに、このボク…余裕かましてくれてんじゃん」

ロ「ムカつくガキだぜ…上玉二人とイチャつきやがって」

俺の存在無視ですか？シバくぞ？

レ「世間の厳しさを教えてやる必要がありそうだねぇ」

そう言って三バカトリオがじりじりと距離を詰めてくる

エ「ちょ、ちょっと…！」

ク「や、止めてください…！」

こいつら…調子にのるまえに潰すか…？

そこで俺とヨシュアが二人をかばうように

ヨ「…僕の態度が気に入らなかったなら謝りますけど…彼女達に手を出したら…手加減、しませんよ」

ケ「まあとりあえず遊ぶ云々はまだ見逃すとして…」

エ&ク「オイ」

ケ「これ以上クローゼを怯えさせたら…消すぞ？」

後ろでエステルが「あたしは！？」とか叫んでいるが気にしない

すると、俺とヨシュアの威圧感（俺の方は結構台無しだが）に気圧されたのか、三バカトリオが後ずさる

レ「なっ…」

ロ「なんだコイツら…」

デ「は、ハッタリだ、ハッタリ！」

後ずさって言うセリフじゃねぇよな、それ

デ「へっ！女の前でカッコ付けたくなる気持ちも判るけどな、あんまり無理をし過ぎると大ケガをする事になるぜ…」

ケ「いや、お前ら程度、１秒以内に無力化できるけど？」

ロ「言うじゃねぇか…やれるもんならやってみろよ…」

ロッコが凄む。プレッシャーも何もないが

ケ「言われなくてもやってやるよ…ヨシュアがな！」

ヨ「やっぱりそう言うよね！君は！」

ケ「当たり前だ！面倒くさいしな！」

そう言いながら戦闘体制に入っていると…

「お前達、何をしているんだ！」

と、市長邸の方から青髪のいかにもキャリアですみたいな男が歩いてきた

レ「げっ…」

ロ「うるせぇヤツが来やがったな…」

どうやら三バカトリオにとって天敵らしい

「お前達は凝りもせずまた騒動を起こしたりして…いい年をして恥ずかしいとは思わないのか！」

デ「う、うるせぇ！てめぇの知った事かよ！市長の腰巾着が…」

「なんだと…」

一触即発ですね～…あっはっは

「…おや、呼んだかね？」

突然、オッサンが口を挟んできた

レ「だ、ダルモア！？」

どうやらこのオッサンが市長らしい

ついでに青髪の方はギルバートと言う名前だとクローゼが説明してくれた

…つーかいつまでコイツは腕に引っ付いてるつもりなんだ？

ダ「ルーアンは自由が象徴の街だ。君達の服装や言動についてとやかく文句を言うつもりはない。しかし他人に、しかも旅行客に迷惑を掛けるというなら話は別だ」

そう市長が言うと、また三バカが文句を言ってギルバートが言い返す不毛な口喧嘩になるが、エステル達が遊撃士だと言う事でとりあえずは落ち着いたらしく、三バカは去って言った

と言うか「覚えてろ」って…今時レアな捨て台詞だな

エ「なんて言うか…めちゃくちゃ陳腐な捨て台詞ね」

どうやらエステルも同じ考えだったらしい

ヨ「まあ、ああいうのがお約束なんじゃないのかな？」

ダ「済まなかったね、君達。街の者が迷惑を掛けてしまった」

ケ「ああ、別にいいですよ。結果的に何も被害はありませんでしたし」

ダ「そうか…申し遅れたが私はルーアン市の市長を務めているダルモアと言う。こちらは秘書のギルバート君だ」

ギ「よろしく。君達は遊撃士だそうだね？」

エ「あ、ロレントから来た準遊撃士のエステルと言います」

ヨ「同じく、ヨシュアと言います」

ダ「そう言えば、受付のジャン君が有望な新人が来ると言っていたが…ひょっとして君達の事かい？」

そんなに評判良かったのかコイツら？

そう言えばハーケン門に向かう途中に“凄く優秀な二人組の新人遊撃士がいる”って聞いたような…

エ「えへへ…有望かどうかはわからないけど」

ヨ「暫くルーアン市で働かせて貰おうと思っています」

ダ「おお、それは助かるよ。今、色々と大変な時期でね。君達の力を借りる事があるかも知れないから、その時はよろしく頼むよ」

ヨ「大変な時期…ですか？」

ダ「まあ、詳しい話はジャン君から聞いてくれたまえ。…ところでそちらの二人は王立学園の生徒のようだが…」

ク「はい、王立学園二年生のクローゼ・リンツと申します」

ケ「同じく、二年のケイジ・ルーンヴァルトです」

ヨシュアの真似をして自己紹介する

…今更だが、ルーンヴァルト性を名乗るのまずかったか？

ヨ「（ルーンヴァルト…ケイジ…やっぱりどこかで聞いた事が…？）

」

ダ「そうか。コリンズ学園長とは懇意にさせて貰っているよ。…そう言えばギルバート君も王立学園の卒業生だったね？」

……え〝

ギ「ええ、そうです。クローゼ君とケイジ君と言ったかい？君達の噂は色々と聞いているよ。ケイジ君は万年主席で、クローゼ君はジル君と次席の座を争っているそうだね。優秀な後輩がいて僕もＯＢとして鼻が高いよ」

ク「そんな…恐縮です」

ケ「…そりゃどーも」

クローゼに肘でつつかれたが気にしない

俺が主席なのはテスト限定だからな…テストで点数稼がないと、自由に動けない訳だし

ダ「はは、今度の学園祭は私も非常に楽しみにしている。どうか頑張ってくれたまえ」

ク「はい。精一杯頑張ります」

ケ「内容で頑張りたくなくなるんだけどな…」

うん、アレはねぇよ。何が楽しいんだ？アレで誰が得するんだ？…ジルか

ダ「…？まあ、それじゃあ私達はこれで失礼するよ。先程の連中が迷惑を掛けたら私の所まで連絡してくれたまえ。ルーアン市長として、しかるべき対応をさせて頂こう」

そう言って市長とギルバートは去って行った

エ「うーん…なんて言うかやたらと威厳がある人よね」

ヨ「確かに、立ち振る舞いといい、市長としての貫禄は充分だね」

ク「ダルモア家はかつての大貴族の家柄ですから。貴族制が廃止された後も、いまだに上流階級の代表者と言われている方だそうです」

ケ「まあ、俺からしたら胡散臭いだけだけどな。現に今も借金を抱えているらしいし」

エ「そうなんだ…しかし、それにしてもガラの悪い連中もいたもんね」

ク「そうですね。ちょっと驚いちゃいました」

ケ「でも良かったじゃねぇか。嫁の貰い手が見つかって」

ク「……」

ケ「冗談だからダイヤモンドダストは勘弁してくれ…」

もう凍るのはごめんだ。

クローゼをからかう度に凍ってたら命がいくつあっても足りないな

ク「もう！…ごめんなさい、不用意な場所に案内してしまったみたいです」

クローゼがエステル達に謝る

ヨ「君が謝る事はないよ。ただ、わざわざ彼らを挑発に行く事はなさそうだね…倉庫区画の一番奥を溜まり場にしてるみたいだからなるべく近づかないようにしよう」

エ「うーん…納得いかないけど仕方ないか」

この世で不良を叩きのめさないと納得いかない女はエステルだけだと思う

その後、またギルドに戻って、それからラングランド大橋の巻き上げを見て、エステル達がホテルにチェックインしたのを見届けてからクローゼと学園に帰った

…途中あの我が儘放蕩キノコ頭を見た気がするけど…気のせいだよな？

第八話『怒り』（前書き）

放火編～ＶＳレイヴンまで一気にいきました！

それでは本編をどうぞ！

第八話『怒り』

～エステル達にルーアンを案内した翌日～

「……ですから、この時は…」

ク「……」

ケ「……」

ク「……」

ケ「…ｚｚｚ」

ク「（寝るな！）」

ケ「あたっ！？」

はい、察しの通り授業中です

でもな～低血圧の俺にとって朝の授業は地獄なんだよな…

そんな感じで、時々クローゼにたたき起こされながら授業を受けていると…

学「クローゼ君、ケイジ君！！」

突然学園長が血相を変えて教室に入ってきた

「学園長!?今は授業中ですよ!?」

学「済まない。だが、クローゼ君とケイジ君に今すぐ知らせなければならない事があってね」

ケ「…何があったんスか?」

学園長は少し呼吸を整えてから

学「二人共、落ち着いて聞いて欲しい…

マーシア孤児院が火事にあった」

ク「!!」

その言葉を聞いた瞬間、クローゼは教室を飛び出していった

学「クローゼ君!」

ケ「心配しなさんな、学園長。行く場所はわかってますから。…先生とガキ共は?」

学「ああ…大丈夫だ。今はマノリア村にいるらしい。…君は流石に冷静だね」

ケ「…いえ。これでもかなり動揺してますよ…」

あのテレサ先生が火の始末を怠る訳がない…

…もし犯人を見つけたら理性を保っていられなくなるくらい俺は腸が煮えくり返っていた

今の俺はかなり怖い顔になっているだろう

自分でもびっくりするくらい声が低くなってるからな

ケ「…すみません先生。今日俺とクローゼは早退します」

「え、ええ。わかったわ」

ケ「じゃあ、学園長…」

学「ああ。わかっているよ」

ケ「お願いします」

学園長にある“お願い”をして、俺はクローゼを追いかけた

～マーシア孤児院～

ケ「……くそっ！！」

入り口に近づいただけでも何かが焦げた匂いが鼻につき、火事の凄まじさを物語っている

ケ「（落ち着け…今は現場検証と犯人特定が先だ…）」

怒りが精神を支配しそうになるが、自分に優先すべき事を言い聞かせ、深呼吸して無理やり落ち着く

院の方に進んでいくと…

ケ「……ひどいな」

ク「ケイジ……」

言葉に出来ないほどに酷い院と、今にも泣き出しそうなクローゼ、そして調査に来たのかエステルとヨシュアがいた

ク「ケイジ…孤児院が…」

ケ「皆まで言うな。…大丈夫だ。先生達は全員無事でマノリアにいるらしい。…見舞いに行ってやろうぜ？」

無言でコクリと頷くクローゼ。…ここまで弱ったコイツを見るのは久しぶりだ…

エ「ケイジ…あたし達も行ってもいいかな…？」

ケ「ああ…じゃあ行くぞ」

～マノリア村・蓮の木亭～

マノリアに着き、宿酒場の主人に先生達が二階にいると聞いて、一も二も無くダッシュで向かう

ク「先生、みんな…！」

扉を開けると同時にクローゼが絞り出したような声で言う

クラ「あ、クローゼ姉ちゃん、ケイジ兄ちゃん！」

マ「来てくれたんだ…！」

思っていたより元気そうな声でクラムとマリィがクローゼに答える

…見た所、全員ケガはしてないみたいだな…良かった

ク「良かった…本当に良かった…」

ケ「全く…心配かけさせやがって…」

クラム達が俺とクローゼの周りに群がる

いつもならクラム辺りが生意気言って、俺が追いかけ回すのだが、今はその生意気が聞けただけでもほっとする

テ「ふふ…良く来てくれましたね。エステルさん達も…」

エ「はい…ギルドに連絡があったから…」

ヨ「調査に来たついでに、お見舞いに寄らせて頂きました」

テ「そうですか…訪ねてきてくれてありがとう」

先生が穏やかな笑顔で言う

クラ「調査って…あの火事を調べに来たんだろ?何かわかった事あんの?」

エ「えっと…」

ヨ「なんと言ったらいいのか…」

言いにくそうに顔をしかめるエステルとヨシュア

まさか…な

そして二人で目を交わしてから、クローゼが大体察したのか

ク「ねぇ、みんな?お腹はすいてないかしら?私、朝ご飯を食べてなくて食堂で何か頼もうと思うの。ついでだから、みんなにも甘い物をごちそうしてあげる」

ダ「え?ほんとぉ?」

ポ「ポーリィ、プリン食べたーい!」

勿論、クローゼが朝ご飯を食べてないと言うのは嘘だろう。…せめてコイツらに大人の汚い部分を見せないようにとの配慮だ

渋っていたクラムもマリィが言いくるめ、クローゼと共に下に降りていった。…クローゼは後で詳しく話すように、と目で俺に知らせながら

エ「ふう、助かっちゃった」

ケ「まあ、好んで聞きたくなる話じゃねぇしな…」

その後、エステル達は一通り先生に事情を聞いてから、現在わかっている事を話し始めた

…勿論事情聴取の時は俺は下にいたぞ？

ヨ「まず、火災現場を調査した結果なんですが…」

ケ「…放火、少なくとも人為的な原因…だろ？」

俺がそう言うと、ヨシュアはかなり驚いたが

ヨ「…その通りだよ。」

テ「そうですか…やはり…火には気をつけていたのでおかしいとは思っていたのですが」

ヨ「そこでお聞きしますけど…犯人に心当たりはありませんか？」

テ「見当もつきません…ミラにも余裕はありませんし、恨まれる覚

えも全く…」

ケ「俺から見ても無いな。この辺りではマーシア孤児院はかなり評判が良い。それに孤児院に放火して得が有るわけが無いしな」

エ「つまり、強盗目的でも、怨恨でも無いってわけね」

ヨ「事件前に怪しい人物が孤児院の周りをうろついていたという事は？」

テ「そうですね…昼間にエステルさん達がお見えになってからは特に…あの方は関係無いでしょうし」

エ「あの方？」

テ「火に包まれた建物から脱出しようとした時、天井の梁が落ちてきて、玄関から出られなくなってしまったんです。その時に扉を破って助けに来てくれた方がいて、梁をどけて、逃げるのを手伝って下さったんです」

…なるほど、だから扉の蝶番が不自然に壊れてたのか（↑何気に見てた人）

エ「そんな事が…それってマノリアの人なの？」

テ「それが、村の者を呼んで来ると言ってすぐに居なくなってしまって…マノリアの方々に聞いても誰も心当たりは無いそうです」

ヨ「…怪しいですね」

ケ「先生達を助けた人を疑いたくないが…犯人は現場に戻ると言うしな…どんな人だったんですか？」

テ「象牙色のコートを着た２０代前半の方です。悪い方には見えませんでした」

エ「…普通の人とは思えないけど、人助けをしたのは事実だし…確かに犯人じゃなさそうね」

…そうなると、愉快犯の可能性がかなり高い、か…まあ一応他の線でも調べてみるか…？

そんな事を考えていると、いつの間にかクローゼが入って来ていたどうやら、ケーキをごちそうして、マリィに後を任せたらしい…まあマリィなら大丈夫か

ク「あの…先生。お客様がいらっしゃいました」

テ「お客様？」

こんな時にか？

「お邪魔するよ」

そう声が聞こえたと思うと、市長とギルバートが入って来た

ダ「お久しぶりだ、テレサ院長。先程知らせを聞いて慌てて飛んで来た所なのだよ。…だが、ご無事で本当に良かった」

テ「ありがとうございます、市長。お忙しい中をわざわざ訪ねて下さって恐縮です」

ダ「いや、これも地方を統括する市長の勤めていうものだからね。それよりも、誰だか知らんが許し難い所業もあったものだ。ジョセフのやつが愛していた建物があんなにも無残に…心中、お察し申し上げる」

…このオッサンは何故かわからないが、信用できない。

目が…相手を見ていない。コイツが見ているのは自分の立場だけ…そんな気がする

テ「いえ…子供達が助かったのであればあの人も許してくれると思います。…遺品が燃えてしまったのが唯一の心残りですけれど…」

ク「テレサ先生…」

ダ「…遊撃士諸君、犯人の目処はつきそうかね？」

ヨ「調査を始めたばかりですから確かな事は言えませんが…ひょっとしたら愉快犯の可能性もあります」

ダ「そうか…何とも嘆かわしい事だな。この美しいルーアンの地にそんな心の醜い者がいるとは」

ギ「市長、失礼ですが…今回の件、もしかして彼らの仕業ではありませんか？」

ダ「……」

エ「ま、待って！“彼ら”って誰の事？」

話がわからなかったのか、ギルバートに聞くエステル

ギ「君達も昨日絡まれただろう。ルーアンの倉庫区画にたむろしているチンピラ共さ」

エ「あいつらが…」

ク「……」

そこ、鵜呑みにすんな

ケ「何であいつらが怪しいと？」

ギ「昨日もそうだったが…奴ら、いつも市長に楯突いて面倒ばかり起こしているんだ。市長に迷惑をかける事を楽しんでいるフシさえある」

俺にはお前が勝手に突っかかって行ってるように見えたがな

ギ「だから市長が懇意にしているこちらの院長先生に…」

ダ「ギルバート君！憶測で滅多な事を口にするのは止めたまえ！…これは重大な犯罪だ。冤罪が許されるものではない」

…俺はあんたらも怪しいと思っているんだがな

ダ「余計な事をしなくてもこちらの遊撃士諸君が解決してくれるだ

ろう。…期待してもいいのだろうね？」

市長が二人に聞く

エ「うん、任せて！」

ヨ「全力を尽くさせて頂きます」

ダ「うむ、頼もしい返事だ…ところでテレサ院長、一つ伺いたい事があるのだが…」

テ「何でしょうか？」

ダ「孤児院がああなってしまってこれからどうするおつもりかな？再建するにしても時間がかかるし、何よりミラが掛かるだろう」

テ「……」

言葉を返せない先生

貯えなんざないだろうし、ましてや家一軒建てるだけのミラとなればそう簡単には集められない

ダ「どうだろう、私に一つ提案があるのだが」

テ「…なんでしょう」

ダ「実は王都に我がダルモア家の別邸があってね。たまに利用するだけで普段は空き家も同然なのだが…暫くの間そこで暮らしてはどうだろう？…勿論ミラを取るなどと無粋な事を言うつもりは無い。

再建の目処がつくまで幾らでも滞在してくれて構わない」

…まるで始めから用意されていたように聞こえるのは俺だけか？

王都の別邸にしろ、この考えの早さにしろ、忙しいはずなのにわざわざ本人が訪ねてくる事にしろ…都合が良すぎる

テ「で、ですがそこまで迷惑をお掛けするわけには…」

ダ「どうせ使っていない空き家だ。気がとがめるのであれば…屋敷の管理をして頂こう。勿論謝礼もお出しする」

テ「……少し考えさせて頂けませんか？」

やはり少し頭の中がこんがらがっていたのか、あいまいに返事をした

それを聞いた市長は、また連絡してほしいと言って去って行った

エステル達は市長を褒めていたが

ク「先生…どうなさるおつもりですか？」

テ「…あなた達はどう思いますか？」

ク「……」

ケ「俺は反対だ」

エ「何で！？市長さんは再建する手伝いまでしてくれるんだよ！」

ケ「今回の話…少し出来過ぎのように思える…始めから計画されていたようにな」

ヨ「……」

ヨシュアも同じ事を考えていたのか、目を閉じて俯いている

テ「クローゼ、あなたは？」

ク「…常識的に考えて、受けたほうがいいとは思います。でも、一度王都に行ってしまうと……いえ、何でもありません」

…また自分を偽ってやがるな

テ「ふふ…あなたは昔から聞き分けがいい子でしたからね。いいのよクローゼ。正直に言ってちょうだい」

ク「……あのハーブ畑だって世話する人がいなくなるし…それに…それに…

…先生とジョセフさんに可愛がって貰った思い出が無くなってしまう気がして…

ごめんなさい。愚にも付かない我が儘です」

テ「ふふ、私も同じ気持ちです。あそこは子供達とあの人の思い出が詰まった場所。でも思い出よりも今を生きる事の方が大切なのは言うまでもありません」

ケ「先生！」

テ「…近い内に結論を出そうと思います。あなた達はどうか学園祭の準備に集中して下さいね。あの子達も楽しみにしていますから」

ク「…はい」

ケ「…わかりました」

そしてその後ルーアンのギルドに戻る事になった…のだが

マ「クローゼお姉ちゃん！ケイジお兄ちゃん！」

マリィが慌てた様子で走ってきた

ケ「どうした？」

マ「あのね！あのね！クラムの奴がどこかに行っちゃったのよ！」

ケ「…詳しく話してくれ」

マ「うん…あのオジサン達が来てからクラム、二階に上がったみたいで…すぐに降りて来て、真っ赤な顔して『絶対許さない！』とか言って…そのまま飛び出して行っちゃったの！」

ク「絶対許さない…もしかして…！」

ヨ「もしかしなくても《レイヴン》の所だね…秘書の人が話しているのを聞いてしまったんだろう…」

ケ「あの青髪…余計な事を…」

俺達はマリィを蓮の木亭に返してから急いで倉庫区画に向かった

～倉庫区画～

途中、ラングランド大橋が巻き上がってしまうと言うハプニングがあったが、何とか倉庫区画にたどり着いた

そこには、三バカに囲まれ、ディンに持ち上げられているクラムがいた

ク「止めて下さい！」

クローゼの声に反応してこっちを見るバカ共

ロ「お、お前達は…」

あ、全員武器同じなのな

クラ「クローゼ…姉ちゃん？」

オイコラ、俺は無視か

ク「子供相手に遊び半分で暴力を振るうなんて…最低です。恥ずかしくないんですか」

デ「な、何だとー！」

レ「ようよう、お嬢ちゃん。ちょっとばかり可愛いからって舐めた口利き過ぎじゃねぇの？」

…雰囲気がボケられねぇな

ロ「いくら遊撃士がいた所でこの数相手に勝てると思うか？」

確かに数の暴力は脅威だが…この場合練度が違いすぎるから問題はないな

エ「クローゼさん、下がってて！」

ヨ「僕達が時間を稼ぐよ。その隙にあの子を助けて…」

ク「いいえ…」

やっぱりな…

ケ「大丈夫だヨシュア。コイツ…普通に戦えるから」

エ「へ…」

ク「本当は使いたくありませんでしたけど…」

ケ「少なくともそこらの魔獣なら一蹴できるくらいには鍛えられてるから（ユリ姉に）」

ク「剣は人を守る為に振るうと教えられました…今が、その時だと思います」

エ「ええっ！？」

ヨ「護身用の細剣（レイピア）…」

ク「その子を離して下さい」

ケ「さもなくば…実力行使で返してもらう」

何かレイヴン側からカッコイイとか可憐だとか聞こえたが、ディンの一喝で収まる

レ「こんなアマっ子にまで舐められてたまるかってんだ！」

ロ「俺達（レイヴン）の恐ろしさを思い知らせてやるぞ！」

あ、ザコキャラフラグ

そう言って飛びかかってくるレイヴンメンバー

…どうでもいいけどなんでリーダー格以外俺とクローゼに狙い定めてんの？

ケ「はあ…速攻で終わらせるぞ？ついて来いよ」

ク「わかってる」

まずは俺が正面の一人を吹き飛ばし、その隙を突こうとした奴をクローゼが三連の突きで気絶させる。

そこでこっちが劣勢と見たのか、ロッコが加勢してくる

残った不良Cを威力を逃がさないように挟み込んだ同時攻撃で挟み込んだ後、クローゼの背後に迫ったロッコを迎撃して、鍔迫り合いになる。

ク「ケイジ！」

ケ「！」

クローゼの声で全てを察した俺は、ロッコを押し返して後ろに下がるその直後、ロッコの足元から強力な水流が現れ、ロッコを吹き飛ばして気絶させる

ケ「…容赦ねぇな」

ク「ケイジ程ではないよ♪」

失礼な。これでも１０分の１しかだしてねぇのに

デ「こ、こいつら化け物か…」

化け物はキレた時の黒ーゼだっての

レ「遊撃士共はともかく、こっちの奴らもただ者じゃねぇ…」

エ「ひゅー！二人共やるーっ！」

ヨ「その剣…名のある人に習ったものみたいだね」

ケ「クローゼはな。俺は独学だよ」

ケ「いえ、まだまだ未熟です」

ケ「その割にはフェンシングの大会で大暴れしてたよな」

ク「それは言わないで…」

顔を真っ赤にして照れるクローゼ

その後、クローゼがレイスとディンを説得しようとするが、プライドの問題なのか、頑として受け付けない二人に、気絶させた方が早くないかな～とか考えていると

「オイ、そこまでにしとけや」

と、赤毛のトリ頭をした男が入ってきた

…ヨシュアとエステル、クローゼが三人掛かりで倒せるくらいか…そこそこ強いな

「やれやれ、久々に来てみりゃ俺の声も忘れているとはな…」

デ「ア、アガットの兄貴！」

どうやらアガットというらしい

レ「き、来てたんスか…」

エ「ど、どうしてあんたが…ていうかこいつらの知り合いなの！？」

エステル達とも知り合いらしい

その後、アガットが二人をシメた事でクラムが解放され、テレサ先生の登場もあり無事にこの件は解決した

いや～あのパンチは思わず昇竜拳と言いそうになったわ

その後、ギルドに戻り、三バカが犯人ではないとわかった

何か依頼を巡ったゴタゴタもあったが、面倒なので我関せずを貫いたしかしその延長でクローゼがエステル達に学園祭の手伝いを申し出て、エステル達が学園に来る事になった

かく言う俺も…

ケ「（ちょっと待てよ?…もしかしたら“あの役”…ヨシュアに押し付けられるかも…）」

ク「ケイジ…“アレ”からは逃げられないと思うよ?」

ケ「いーや!絶対に逃げ切ってやる!俺の全力をかけて!」

ク「…ジルが許すと思う?」

ケ「あんな役やるくらいならクローゼに甘い言葉囁くほうがマシだ」

ク「それ…どういう意味?」

ケ「そーゆー意味」

そう言って俺は全力で逃げる

ク「あ！待ちなさい！」

クローゼが追いかけてくるのがわかってるからな

エ「はあ…クローゼさん、前途多難ね…」

ヨ「…何か嫌な予感がするんだけど…」

エ「気のせいじゃない？」

勘の良いヨシュアであった

第九話『…このリア充が』『お前もな！』（前書き）

第九話です

さり気なく新術が出てきますが、次回登場予定はありません

あしからず…

とりあえず、本編をどうぞ！

感想待ってます

第九話『…このリア充が』『お前もな！』

ギルドで依頼を済ませ、エステル達が報告するのを待った後、俺達は学園に向かった

～ジェニス王立学園～

エ「は～、ここが王立学園か。何て言うか…落ち着いた感じのいい場所ね」

ヨ「静かだし、勉強をするにはもってこいの環境みたいだね」

ケ「まあ、今授業中だからな」

ク「もう少ししたら途端に騒がしくなりますよ。学園祭まで間もないですし」

ヨ「なるほど。みんな準備に大忙なんだね」

ク「あはは…それもあるんですけど…」

ケ「主に俺の捕獲に命かけてるからな…生徒会長が」

ガチで全生徒仕向けてくるからな…あのバカは

ヨ「それは何と言うか…大変だね」

ケ「大丈夫だ。そろそろ解放される（予定だ）から」

ヨ「（ブルッ）！？」

俺の表情に思わず悪寒を感じたらしいヨシュア…いかんいかん、つい顔に本音が

ク「とりあえず、まずはコリンズ学園長に紹介します。ついて来て下さい」

～学園長室～

ク「学園長、ただいま戻りました」

ケ「後、客を連れて来ました～」

コ「クローゼ君、ケイジ君、戻ったか。客人とはそちらの方々かな？」

相変わらずの落ち着いた態度で俺達を迎える学園長

エ「初めまして、学園長さん」

ヨ「遊撃士協会から来ました」

コ「ほう、まだ若いのにケイジ君同様大したものだ…」

ケ「学園長」

コ「おっと済まない。失言だったね。」

全く、くえないオッサンだ

まだ俺の正体はどっちもばらせない

エステル達は事情を察してくれたのか、深く聞いてくる様子は無い

コ「…孤児院で火事があったそうだが、もしやその関係できたのかね？」

少し顔をしかめる学園長…まあ、学園の中に事件に関わった者がいるとは考えたくないだろうな

ク「はい、実は…」

クローゼが放火事件の事について説明する

コ「なるほど…私も何か力になれる事があればいいのだが…」

ケ「ま、今は学園祭を成功させてガキ共を楽しませる位しかできねぇわな」

コ「そうだな…そこから始めるしかないだろうな」

ク「はい…」

孤児院と深く関わりを持つ者が頷く

ク「そこでお芝居についてはエステルさんとヨシュアさんに協力して頂こうと思いまして…」

コ「いい考えだと思うよ。
…おや?でも確か空き役は1つしか…」

ケ「“あの役”があるじゃないですか〜」

コ「む?“あの役”は君がやると台本にあったが?」

ケ「そんなもん、どうとでもなりますよ」

ク「でも私は個人的にケイジにやってほし…」

ケ「だが断る。あんなのは恥以外の何物でもない!」

この時の俺は内心必死だったと言っておく

ケ「大体アレをガキ共に見せてみろ!ここぞとばかりに大爆笑だろうが!」

ク「え〜…みんな見とれると思うけど…」

ケ「無理。…という訳でヨシュア」

俺はヨシュアの肩に手を置いて、無言で頷く

ヨ「…激しく嫌な予感しかしないんだけど…とりあえずその頷きは何さ?」

ケ「…直にわかる」

コ「もういいかい？」

ケ「あ、はい」

律儀にツッコまずに待っていてくれた学園長に感謝

コ「コホン、エステル君とヨシュア君には劇の手伝いをしてもらうと言う事でいいんだね？」

ヨ「はい」

コ「ならば劇の事は生徒会長のジル君に聞いてくれ。劇については彼女に一任しているしね」

エ「わかったわ」

ケ「…あいつさえ、生徒会長じゃなかったら…」

え？しつこい？お前らはあの役の恐ろしさを知らないからそんな事が言えるんだよ！男子生徒ほぼ全員による強制着替えを体験してから出直して来い！

コ「私からは…寮の準備をさせてもらうよ」

エ「え！？寮！？」

ケ「学園祭まで時間がないからな…練習は多分夜までやるし、泊まり込みの方が色々楽だろ？」

エ「それはそうね…」

ヨ「助かります」

そうエステル達が納得した時、終業の鐘が鳴った

コ「ちょうど授業も終わりだな」

ケ「（ヤベ…）じゃあ俺はこれで！」

俺は全力で部屋を出て、隠れる場所を探す

ク「あ！待って…って聞こえてないか…」

エ「ねぇクローゼさん…何でケイジはあんなに劇を嫌がっているの？」

ク「それはケイジの役が問題ですね」

ヨ「…ちなみにどんな役なの？」

ク「それは…私の口から言うのは…」

少し慌てた感じになるクローゼ

エ「言うのは？」

ク「恥ずかしい…です」

ジ「いた！一班から三班はこのまま追って！残りは裏に回るわよ！」

全『応！』

ケ「来んなてめぇらぁぁ！！」

現在リアル鬼ごっこ進行中です

…俺以外全員鬼とか言うイジメ設定だけどな！

「待てぇぇ！大人しく練習をしろぉぉ！」

ケ「ふざけんな！二度とあんな格好してたまるか！」

もう気付いた人もいるとは思うが、あんな格好とは…

女　装

である

「むしろ劇でやらなくていいからもう一回女装して！」

ケ「ふざけんな変態共！」

そう言って俺は中庭の階段を全段飛ばしで降り、挟まないように四方に逃げ道をつくる

そして案の定反対側から来た軍団を撒いて、旧校舎の方へと逃げ込む…フリをしてクラブハウスの裏手で術を使って屋根まで登る

ケ「ハア…ハア…これで少しは…」

ジ「甘い！」

ハ「悪いな。ケイジ」

ケ「なっ！？」

俺が屋根に登った瞬間、待ち構えていたかのようにジルとハンスがいて、ハンスが俺を拘束していた

ジ「やぁっ～～～～っと捕まえたわ～。フッフッフ…もう逃げられないわよ」

ケ「お前ら…指示を出した後は生徒会室で予算チェックとかしているはずじゃ…」

ジ「もうおおまかには終わらせたわよ…気力で」

バカな…ギリギリまでかかるように情報操作したはずだ！

ハ「…こいつ3日間生徒会室に泊まり込みで終わらせやがったんだよ」

ケ「くっ…ジルの面白い事に関する時の根性…いや、執念を甘く見ていたか…！」

ジ「そう言う事。さて、あんた以外にあの役が出来そうな奴がいないんだからいい加減覚悟を決めなさい」

ケ「……？あれ？お前ヨシュアとエステルに会ってないのか？」

俺以外にいないって事はないはずだ…ヨシュアに会っていれば

ジ「会ったわよ？」

ケ「なら…」

ジ「本人が断ったんだから仕方ないじゃない（クローゼにも悪いしね～）」

なっ！？ヨシュア…貴様裏切ったのか！？（違）

ジ「さあ、逝くわよ。みんな待っているんだし」

ケ「ち、ちくしょぉぉぉぉ！！！…」

ジルに引きずられて行く俺の目に手を合わせて見送るハンスが印象に残った

…帰ったら秘蔵本人ＶＯＬ．２燃やし尽くしてやる…！

～講堂～

ヨ「へぇ…エステルにクローゼ。なかなか似合ってるじゃない」

エ「えへへ…そうかな？」

ク「なんか照れくさいです…」

講堂には、すでに騎士衣装に着替えたエステルとクローゼ、…＋普通の格好のヨシュア

その三人が談笑している所に

ケ「や～め～ろ～や～！！」

ジ「さあ、全員ケイジを着替えさせちゃって～」

『サーイエッサー！』

男子生徒全員に担がれた縄で拘束されたケイジが連行されてきた

そしてそのまま奥の更衣室に連れて行かれて

ケ「ちょっ！？待て！お前ら落ちつ…ぎゃあぁぁぁぁ！！！」

エ「だ、大丈夫かな…？」

ヨ「さ、さあ…？（ゴメン、ケイジ…）」

少し心配になる二人であった

～5分後～

『…会長～！準備完了で～す！』

ジ「ＯＫ！じゃあ練習始めるわよ！」

ジルがそう言った事で更衣室の扉が開く

…超行きたくねぇ

しばらく渋っていたが、いつまでもじっとしていても仕方ないので、扉を出る

始めに目に入ったのは、唖然としているエステルとヨシュア、それと何故か見とれているバカ共（クローゼ含む女子全員）だった

エ「嘘…ケイジ…？」

ク「相変わらず見事ですね…」

ヨ「……」

ヨシュア、無言はキツい。主に俺の精神が

ケ「チクショー、そんなにおかしいか！笑えよ！笑えばいいだろバカヤロぉぉぉぉ！！！」

ク「（あ、ケイジが壊れた）」

暫くとち狂っていたが、少しすると落ち着いて、だんだん色々恥ずかしくなってきた

ク「落ち着いた？」

ケ「…見苦しい所をお見せしました…」

ジ「よし、今度こそ始めるわよ！」

…せめて気持ちを切り替える時間が欲しかった…

それからかなり本格的な練習が始まった

余談だが、紅騎士の役が決まってなかった事と、姫役の俺が逃げ回っていた事で、メインの練習が一切できなかったらしく、脇役のみんなの完成度が異常に高かった

…今回やる劇は『白き花のマドリガル』

簡単に紹介すると、平民の蒼騎士オスカーと貴族の紅騎士ユリウス

…この二人が国の姫のセシリアに恋をしてしまう

その二人の恋をそれぞれの上役達が政治的に利用しようとして、ゴタゴタに巻き込まれると言う話だ

…最後は結局ハッピーエンドの大団円だがな

そしてその日の練習が終わり…

ケ「……」ｏｒｚ

ハ「ケイジいつまでへこんでるんだ？」

ヨ「あはは…」

ヨシュアは元々三人部屋だった事もあり、俺とハンスの部屋に泊まる事になった

ヨ「でも何かいいね…」

ケ「…？何がだ？」

ヨ「いや、僕はロレントにいた時に同期くらいの年の男がいなかったから…何か羨ましいなって…」

ヨシュアが少ししんみりした様子で言う

…ヨシュア、ハンスの前で、特にお前みたいな奴はそれを言うと…

ハ「はあ！？お前本気でそれ言ってんのか！？」

ハンスがキレるぞ…って手遅れか

ヨ「え？」

ハ「エステルみたいなかわいい女子と一緒に旅するどころか一つ屋根の下で暮らしていたってのに…このモテない男の敵が！」

全くだ！（↑モテているが本人が鈍感過ぎる所為で気づいてないだけ）

ハ「いいか！？大体お前は…」

何故か正座のヨシュアに説教し始めるハンス…中年の酔ったオヤジかお前は

…そういや今の内にさっきの恨みを返しておくか…

俺は二人をよそにハンスのベッドの下を探り、小包くらいの木箱を取り出す

それを窓から放り出して、ゆっくりと詠唱を始める

ちょうどいいから新術の実験台にするか…範囲と威力を１００分の１に絞って…

ケ「…祈り来たるは浄化の炎界、願い来たるは暗黒の氷河…」

第一詠唱だけでも、木箱が燃え出し、その燃えた場所から凍っていく

ケ「其は回天を表す刹那の痛み…今我が元にて具現せよ」

ハ「…だから…ってケイジ何してんだ…まさか！」

そのまさかだ！

ケ「『アーククリムゾン』…砕けろ！」

ハ「俺の秘蔵書がぁぁぁぁ！！」

ガクッｏｒｚ

ケ「さて、ヨシュア…俺からも言わせてもらえば…このリア充が」

ハ「お前もな！」

復活はやいな…というか俺の何処がリア充だ

その後少し騒いでから俺達は寝た

それからはまた、騒がしくも楽しい日々が始まった

授業に参加したエステルがバカさ加減を発揮して、ヨシュアが秀才っぷりを見せたり…

昼休みに6人で談笑しながら昼食をとったり…

放課後は練習をかなり頑張ったり…

（ヨシュアは結局メイド長の役に決まり、女装する事になった。…ざまあ（笑））

あっという間に学園祭前日がやって来た

ケ「ヨシュア、いたか？」

ヨ「いや…寮にはいないみたいだ」

ハ「じゃあ講堂じゃないか？劇の最後の練習してるとか」

ケ「ありえそうだな…行ってみるか」

講堂に行くと、案の定練習をしていた二人がいた

ヨ「ここにいたのか」

エ「ヨシュア！？」

ク「ケイジまで…」

ハ「（俺は…？）予行演習は終わったのにまだ稽古をやってるとはな」

ケ「決闘シーンいけそうか？」

エ「ま、任せなさいっての！完璧に演じてみせるんだから！」

ヨ「そっか…うん、楽しみにしてるよ」

…桃色空間を展開するのは止めて欲しい

ク「そういえば、三人はどうしてここに？」

ケ「ああ…ヨシュア達が寮に泊まるのも今日で最後だからな。明日の前祝いを兼ねて夕食でもと思ってな」

ク「ケイジにしてはいい提案だね」

ケ「一言余計だ阿呆。…そういやジルは一緒じゃねぇのか？」

ク「ジルならさっき呼び出されたみたいだけど…私、呼んでこようか？」

ハ「ああ、頼む。俺達は先に食堂で席を取っておくよ」

ヨ「じゃあ、行こうか」

ケ&ハ「がってんだ、大将」

ヨ「だれが大将だよ…」

そうやってヨシュアをからかいながら、食堂に向かった

暫くして、食堂に来たクローゼ達とほどほどに騒いで、最後にソフトドリンクで乾杯し、寮に戻って早めに寝た

…明日の劇が成功する事を祈って

第十話『白き花のマドリガル』（前書き）

第十話です

後悔も反省もしていません！

ではとりあえず本編をどうぞ！

第十話『白き花のマドリガル』

～学園祭当日～

ジ「…配置も照明もＯＫ…うん、準備完了ね！」

俺達は講堂で劇の準備をしていた

ジ「さて、劇の公演まで時間はあるから遊んできていいわよ」

エ「そうこなくっちゃ！屋台とか片っ端から食べ尽くすわよ～♪」

花より団子だね～

ヨ「食べるのはいいけど…食べ過ぎて劇の最中に動けなくならないようにね」

エ「わ、わかってるわよ」

ケ「…ヨシュア。くれぐれも頼んだぞ」

ヨ「任されたよ」

エ「あ！二人共信用してないでしょ！」

当たり前だ。食べ物に関してエステルを信用する事は即ち死だ。

何も知らずにエステルとクローゼに昼を奢った時、俺の財布が空になったからな！

…一万ミラは入れてたのに

エ「全く…みんなも行くんでしょ？」

ジ「私とハンスは生徒会の仕事があるからね～」

ク「それって昨日言ってた？手伝おうか？」

ジ「いいわよ。あんたはケイジと一通り回ってらっしゃい。チビ達もすぐに来るんでしょ？」

ク「うん…ありがとう」

ハ「ケイジ、ヨシュア。わかってるな？俺の好みの女の人がいたらすぐに教えてくれよ」

ヨ「わかってるよ…」

ケ「美人で背が高くて大人の魅力を兼ね備えたお姉さん、だったか？」

ハ「それでこそ親友だ♪」

…呆れて何も言えねえ

向こうでジル達がハンスをゴミを見るみたいな目で見てるしな

エ「それより！ヨシュア、行くわよ！」

ヨ「ちょ、エステル落ち着いて…」

と、まだ開始のアナウンスもされてないのにエステルはヨシュアを引っ張って行ってしまった

ケ「相変わらずの仲の良さだな…」

ク「ふふ…私達も行こう？」

ケ「へいへい」

俺とクローゼはそんな二人を追いかけるのであった

ジ「…ねぇハンス」

ハ「どした？」

ジ「あの二組…端からみれば完全にカップルよね」

ハ「言うなよ…何か羨ましい通り越して虚しくなるから…」

ジ「…何かゴメン」

よくわからない敗北感を抱くジルとハンスであった

『皆様、大変お待たせしました。只今より、ジェニス王立学園第５２回学園祭を開催します』

ケ「始まったな」

門が開くと同時にかなりの数の人が学園に入ってくる

エ「うわ～…凄い数のお客さんだわ」

ヨ「さすがは名高いジェニス王立学園だね。学園レベルの祭りとは思えないな」

ヨシュアが関心したように言う

ク「ふふ、今年は例年よりもお客さんが多いみたいです」

ケ「ジルが宣伝に張りきってたからな」

ク「ふふ、じゃあ私達も回り始めましょうか」

そのクローゼの一言を皮きりに、俺達は学園祭を回り始めたのだが…

ケ「…はぐれたな」

ク「そうだね…」

見事にはぐれた

だってエステルがヨシュア引っ張ってどんどん先に行くんだぜ？…

屋台の食べ物一通り頼んでから

しかも食べるスピードが半端じゃないから…立ち食いに慣れてないクローゼは大変だった

ク「ごめんね、ケイジ…私のせいで…」

ものすごい落ち込んでいるクローゼ

ケ「気にすんな。どうせエステルの事だから、ガキ共を探したら一緒にいるだろ」

そう言って、クローゼを復活させて、学園祭を楽しみながら先生達を探していると…

クラ「あ！クローゼ姉ちゃん！ケイジ兄ちゃん！」

ケ「ここにいたか」

案の定クラム達と一緒にエステル達もいた

ク「みんな…来てくれたのね！」

その後は暫くガキ共と喋っていたが、先生が来た事で一旦区切りがついた

テ「今日は招待してくれて本当にありがとうね。子供達と一緒に楽しませてもらってますよ」

クラ「なあ、ケイジ兄ちゃん。兄ちゃん達が出る劇っていつぐらいに始まるのさ？」

マ「あたし達、すっごく楽しみにしてるんだから☆」

ごめんな…今はお前らのその純粋さに俺のメンタルが…

ケ「…ああ、まだもう少しかかるな」

何とか根性で乗り切って返事をした

エ「院長先生、まだマノリアにいるの？」

エステルが俺の心情を読み取ったのか話を変えてくれた

テ「はい、宿の方のご好意で格安で泊めて頂いています。ですが…」

何か言いにくそうにする先生

…決めたのか

ケ「…なあ、みんな。劇の衣装、見たいか？綺麗なドレスとか騎士装束とかあるぞ」

マ「綺麗なドレス！？」

クラ「騎士しょーぞく！？」

ヨ「ふふ、興味があるみたいだね」

…ヨシュア。「ふふ」みたいな笑い方をお前がするとオカマに見える。…劇の影響か？

ヨ「それじゃあ特別に見せて上げるよ」

ダ「やったぁ！」

ポ「ポーリィもいくー」

ケ「（舞台の控え室にいるから、ゆっくり話せ）」

ク「（…ありがとう）」

ケ「よし！んじゃ行くか！」

そうして俺とヨシュアはガキ共を連れて控え室に行った

途中、銀髪の男…ってあれ《剣帝》じゃねぇか！

ヨシュアが目を丸くしていたから何か関係でもあるのか？

ヨ「…ごめん、ケイジ。子供達を頼むよ」

ケ「ん。わかった」

後で追いかけようか…

～控え室～

ケ「さて、衣装は着れるんなら着てもいいぞ。…俺はちょっと外すから大人しくしてろよ？」

『は～い』

俺は急いでヨシュアを追う。

じゃないと《剣帝》は見失う可能性大だしな

裏道を走っていると、旧校舎に向かう二人を見つけ、追いかける

ヨシュアは途中で見失い、エステル達も俺達を捜しに来た事で戻って行った

「行ったか…」

ケ「残念でした～ＮＯ２《剣帝》」

「!?…何だ、《白刃》か…」

ケ「それで呼ぶな阿呆。…久しぶりだなレーヴェ」

レ「お前もな、ケイジ」

そう、実は俺達は知り合いだ。…昔斬り合った、な

今も立場上は思いっきり敵同士だが

レ「俺を捕らえにでも来たか?」

ケ「祭りの日にんな無粋な事するかよ…それに俺がかなり限定的な条件でないと仕事しないの知ってるだろ?」

レ「ふっ…違いない」

ケ「俺が聞きたいのは…この前の孤児院放火にあの組織は関わって

いるのか？」

先生達を助けた銀髪の男はまずコイツで間違い無い…今はそれもどうでもいい

問題はあの組織が関わっているのかどうかだ

レ「直接は関わっていない」

ケ「直接は…？じゃあ間接的には関わっているのか」

レ「さあな。…一つだけ言うとすれば、偶には軍の方にも気を張っておけ。…ではな」

ケ「あ、オイ！」

俺の制止の声も聞かずにレーヴェはさっさと行ってしまった

…軍に気を張れ？何か起きているのか？

『…連絡します。劇の出演者とスタッフは講堂で準備を始めて下さい。繰り返します…』

…まあ、いつまでも考えていても仕方ないし、戻るか

～講堂～

俺が戻った時には、既に大体の準備が終わっていた

すぐに着替えて、準備を終わらせると、それが合図だったように客

が集まってきた

エ「うっわ～…めちゃくちゃ人がいる～…あう～、何だか緊張してきた」

客席を覗き見していたエステルが言う

ク「大丈夫ですよ、エステルさん。あれだけ練習したんですから」

ケ「そう言って足がガクガクになってんのは誰かな～♪」

クローゼの足を指でつつく

ク「きゃあっ！？…あう～…」

涙目で睨まれても怖くない

ヨ「大丈夫だよ。劇が始まったら他の事は気にならなくなるさ。特にエステルは１つの事にしか集中出来ないタイプだからね」

ヨシュアがエステルをからかうように言う

エ「むっ、言ってくれるじゃない。でもまあ、そのカッコじゃ何言われても腹は立たないけど♪」

ク「そうですね♪」

ケ&ｐ;ヨ「ぐっ…」

俺とヨシュアの精神にかなりダメージが入る

ジ「はいはい、痴話喧嘩はそのくらいで」

ジルは急に真面目な顔になって

ジ「…今年の学園祭は大盛況よ。公爵だの市長だのお偉いさんがいるみたいだけど私達が臆する事はないわ。練習通りにやればいいだけの事。」

ウインクをしてジルが言う…こういう時の盛り上げは巧いんだよな～

ハ「俺達自身の手でここまで盛り上げた学園祭だ…最後まで根性入れて花を咲かせてやるとしようぜ！」

そうして俺達は気合いを入れ直して

『…大変お待たせしました。只今より、生徒会が主催する史劇、≪白き花のマドリガル≫を上演します。皆様、最後までごゆっくりお楽しみ下さい…』

俺達の公演が始まった

（ここからケイジ→セシリア、エステル→ユリウス、クローゼ→オスカー、ヨシュア→メイドに変換します）

――――――

ジ「時は七耀暦１１００年代…１００年前のリベールでは未だ貴族制が残っていました。

一方、商人達を中心とした平民勢力の台頭も著しく…

貴族勢力と平民勢力の対立は日増しに激化して行ったのです…
王家と教会による仲裁も功を奏しませんでした…」

舞台が明転して、俺の姿が見えるようになる

ジ「そんな時代…時の国王が病で崩御されて一年が過ぎたくらいの頃…
早春の晩、グランセル城の屋上にある空中庭園から、この物語は始まります…」

そしてジルは退場する

セ「街の光は、人々の輝き…あの一つ一つにそれぞれの幸せがあるのですね…
ああ、それなのに私は…」

ヨシュア登場

メ「姫様…こんな所にいらっしゃいましたか。そろそろお休み下さいませ。あまり夜更かしをされてはお身体に障りますわ」

セ「いいのです。私など病にかかれば…そうすれば、このリベールの火種とならずに済むのですから」

メ「まあ、どうかそんな事を仰らないでくださいまし！姫様はリベールの至宝…よき旦那様と結ばれて王国を統べる方なのですから」

セ「私、結婚などしません。亡きお父様の遺言とは言え、こればかりはどうしても…」

メ「どうしてでございますか？あのような立派な求婚者が二人もいらっしゃるのに…一人は公爵家の嫡男にして、近衛騎士団長のユリウス様…もう一人は平民出身ながら帝国との紛争で功績を上げられた猛将オスカー様…
はぁ～どちらも素敵ですわ♪」

ごめん、ヨシュア。キモイ…あ、俺もか

セ「……彼らが素晴らしい人物であるのは私が一番良く知っています」

一歩前に出て

セ「ああ、オスカー、ユリウス…
私は…どちらを選べばいいのでしょう…」

――――――

（中略…テヌキトカ、イワナイデ…）

――――――

ジ「二人の覚悟を悟った姫に、もはや止める手だてはありませんでした
そして次の日…王都の王立闘技場に二人の騎士の姿がありました
貴族、平民、中立勢力など大勢の人々が見届ける中…
セシリア姫の姿だけがそこには見られませんでした」

ユ「我が友よ…こうなれば是非もない…我々はいつか雌雄を決する運命にあったのだ」

剣を抜くユリウス

ユ「抜け！互いの背負うものの為に！何よりも愛しき姫の為に！」

オ「運命とは自らの手で切り開くもの…背負うべき立場も、姫の微笑みも、今は遠い…」

ユ「臆したか！オスカー！」

オ「だが、この身を駆け抜ける狂おしいまでの熱情は何だ？自分もまた、本気になった君と戦いたくて仕方ないらしい…」

オスカーも剣を抜き、構える

オ「革命と言う名の猛き嵐が全てを呑み込むその前に…剣をもって運命を決するべし！」

ユ「おお、我ら二人の魂、女神もご照覧あれ！いざ尋常に勝負！」

―――――

オ「くっ…」

ユ「オスカー！？」

オ「問題ない、カスリ傷だ…」

ユ「我々の剣は未だ互いを傷つけてはいないハズ…まさか！？」

「卑怯だぞ、ラドー公爵！貴公の謀か！？」

「ふふふ…言いがかりは止めて貰おうか。私の差し金という証拠があるのか？」

ユ「父上…なんという事を」

オ「いいのだ、ユリウス。これも自分の未熟さが招いた事。
…それに、この程度のケガ、戦場では当たり前のものだろう？」

ユ「……」

オ「次の一撃で全てを決しよう。自分は…君を殺すつもりで行く」

ユ「オスカー、お前…わかった…私も次の一撃に全てを賭ける」

二人が飛び退き、間合いが出来る

ユ「さらなる生と、姫の笑顔。そして王国の未来さえも…
生き残った者が全ての責任を背負うのだ」

オ「そして敗れた者は魂となって見守っていく…それもまた騎士の誇りだろう」

ユ「ふふ、違いない…」

オ「……」

気合いの声を上げた後、お互いが雌雄を決する為に斬り合う―

ハズだった

「だめーーーっ！」

舞台が明るくなった後、そこにはセシリア姫がいた

セ「あ…」

ゆっくりと倒れるセシリア姫

ユ「ひ、姫ーーっ！」

オ「セシリア、どうして…君は欠席していたはずでは…」

セ「よ、よかった…オスカー、ユリウス…
あなた達の決闘なんて見たくありませんでしたが…どうしても心配で…戦うのを止めて欲しくて…
ああ、間に合ってよかった…」

オ「セシリア…」

ユ「ひ、姫…」

セ「皆も…聞いて下さい…
私に免じて…どうか争いは止めて下さい…

皆…リベールの地を愛する大切な仲間ではありませんか…ただ…少しばかり…愛し方が違っただけの事…
手を取り合えば…必ず分かり合えるはずです…」

「お、王女殿下…」

「もう…それ以上は仰いますな…」

セ「ああ…目が霞んで…
ねぇ…二人とも…そこに…いますか…？」

ユ「はい…」

オ「君の側にいる…」

セ「不思議…あの風景が浮かんできます…幼い頃…お城を抜け出して遊びに行った…路地裏の…
オスカーも…ユリウスも…あんなに楽しそうに笑って…
私は…二人の笑顔が…だいすき…
だ…から…どうか…いつも笑って…いて…」

ユ「姫…？嘘でしょう、姫！
頼むから嘘だと言ってくれええ！」

オ「セシリア…自分は…」

メ「姫様、おかわいそうに…ああ、どうしてこんな事に…」

「殿下は命を捨ててまで我々の争いをお止めになった…その気高さと較べたら…貴族の誇りなど如何ほどの物か…

そもそも我々が争わなければこんな事にはならなかったのに…」

「人はいつも手遅れになってから己の過ちに気がつくもの…これも魂を肉体に縛られた人の子としての宿命か…
女神よ…大いなる空の女神よ。お恨み申し上げますぞ…」

『まだ…判ってないようですね
確かに私はあなた達に器としての肉体を与えました。しかし、人の子の魂はもっと気高く自由であれるはず。
それを貶めているのは他ならぬあなた達自身です』

「おお…なんたる事！方々、畏れ多くも女神が降臨なさいましたぞ！」

ユ「これが女神…」

オ「なんという神々しさだ…」

『若き騎士達よ。あなた達の勝負、私も見せてもらいました。なかなかの勇壮さでしたが…肝心なものが欠けていましたね』

ユ「仰る通りです…」

オ「全ては自分達の未熟さが招いた事…」

『議長よ…あなたは身分を憎むあまり、貴族や王族が同じ人である事を忘れてはいませんでしたか？」

「…面目次第もありません」

『そして公爵よ…あなたの罪はあなた自身が一番良く判っているはずですね？』

「……」

『そして今回の事態を傍観するだけだった者達…あなた達もまた、大切な物が抜けていたはず。胸に手を当てて考えてごらんなさい』

「……」

『ふふ、それぞれの心に思い当たる所があったようですね。ならばリベールにはまだ未来が残されているでしょう今日と言う日の事を決して忘れる事のなきように…』

メ「ああ…消えてしまわれた…」

セ「…ん…あら？ここは？」

ユ「ひ、姫！？」

オ「セシリア！？」

セ「まあ…ユリウス、オスカー…まさかあなた達まで天国に来てしまったのですか？」

二人「……」

「こ、これは…これは紛う事無き奇跡ですぞ！」

メ「姫様ぁ～！本当に、本当に良かった！」

セ「きゃっ！…どうしたのです二人共…
あら…公爵…議長までも…私…死んだはずでは…」

それぞれが騒ぎ出す

セ「オスカー、ユリウス…あの…どうなっているのでしょう？」

オ「セシリア様…もう心配する事はありません。永きに渡る対立は終わり…全てが良い方向に流れるでしょう」

ユ「甘いなオスカー。我々の勝負の決着はまだ付いていないはずだろう？」

オ「ユリウス…」

セ「そんな…まだ戦うと言うのですか？」

ユ「いえ…今回の勝負はここまでです。何せそこにいる大馬鹿者が利き腕をケガしております故。しかし、決闘騒ぎまで起こして勝者がいないのも格好が付かない。ならばハンデを乗り越えて互角の勝負をした者に勝利を！」

オ「待てユリウス！」

ユ「勘違いするなオスカー。姫を諦めた訳ではないぞ。お前の傷が癒えたら、今度は木剣で決着をつけようではないか…幼き日のように、心ゆくまでな」

オ「そうか…

ふふ、わかった。受けて立とう」

セ「もう、二人共…私の意志は無視ですか？」

オ「そう言う訳ではありませんが…」

ユ「ですが姫…今日の所は勝者へのキスを。皆がそれを望んでおります。」

セ「…わかりました」

オスカーが近づいてくる

セシリアはその唇に…

って待て。俺が今ここでオスカー（クローゼ）にキスをすればどうなる…？

今は学園祭→確実にユリ姉がいる→見られてる→ユリ姉激怒（頭カッチコッチだから）→俺死亡

…あれ？死亡フラグじゃね？

ちなみにここまでの思考時間は約０，０５秒だったりする

オ「（もう…じれったいなぁ…えいっ！」

セ「んっ！？」

不意に唇をふさがれたと思ったら、何故か周りが光り始めた

セ→ケ「（まさか…）」

『あ～、あ～…業務連絡～業務連絡～』

こ、この声は！

ケ「（神！？）」

『御名答～。さて、報告だが…俺が大爆笑…もとい劇を見ていた時に…』

やっぱり笑ってたのか！チクショー！

『ついつい、机を叩いちまってな～…パクティオー発動させちゃった♪』

……

ケ「（いや、大問題じゃねぇか！？）」

『てへ♪』

ケ「（可愛くねーよ！キモイんだよ！）」

その後の事はよく覚えていないが、どうやら劇は成功したらしい

閑話『酒は呑んでも呑まれるな…いやマジで』（前書き）

閑話です！

更新遅れて済みません…

テストが終わり次第また以前のように更新したいと思います

それでは本編をどうぞ！

後書きにクローゼのカードの説明載せました

閑話『酒は呑んでも呑まれるな…いやマジで』

ケ「どーしてこうなったかな…」

今俺は旧校舎の入り口の所で座り込んでいる

俺達が上演した劇、『白き花のマドリガル』は大成功、学園祭は大盛況に終わった

…まあその劇で俺の体裁とか俺の命とかが終わりを告げたんだけれども…今はそれはいいや

現在の俺の悩みの種は手の中に収まっている二枚のカード…神のミスで何故か仮契約の陣が発動した事による仮契約カードだ

…これを渡すか渡さないか…渡しても別にいいんだけども…どう渡すかって言うのがな…

「神さんが何か異世界の魔法陣を敷いちまったから仮契約しちゃった」とか頭大丈夫か疑われる事必死だ

そんなこんなでめちゃくちゃ悩んでいると…

ハ「おお、ケイジ。お前こんな所にいたのか」

ハンスがやって来た

ケ「どうしたハンス？」

ハ「いや、ジル達が打ち上げ打ち上げうるさくてな…エステルとヨシュアは帰っちまったが結局打ち上げは予定通りにやるらしい」

ケ「そうか」

ハ「特に劇出演者は全員出席！だそうだ」

…面倒くさ～

ケ「悪いけど俺パスす…」

ハ「欠席した場合、男子は劇の恥ずかしい写真をバラまくってさ」

ケ「出席させて頂きます」

…ちくせう、逃げ道を作れない自分が憎い

～クラブハウス・食堂～

ハ「ケイジ連れてきたぞ～」

『わあああああ！！』

俺が食堂に入った瞬間歓声があがる

…何故に？

ジ「あんたが主役だったからよ」

ケ「心読まれた!?」

後に聞いた所「乙女の勘」らしい…謎だ

ケ「つーかエステル達本当に帰ったんだな」

見回してみたがエステル達の姿が無かった

ジ「そうよ…参加していけば良かったのに」

一瞬残念そうにするジルだったが

ジ「それよりクローゼを助けてあげなさい」

すぐにいつもの表情に戻り、ある方向を指さした

そこには、ものすごい多くの生徒（男：女＝1：1）に囲まれているクローゼがいた

ケ「…あれ助けに行けと?」

ジ「なによ～キスした仲じゃない」

ケ「劇の中でな」

ジ「もう、ちょっとは慌てるとかすれば面白いのに…」

俺がこの程度で慌てるとでも?十年早いわ

…まあ、しゃあないか

クローゼ若干涙目だしな

ケ「…逝ってくる」

ジ「逝ってらっしゃ～い♪」

字は間違ってないと思う。多分

ク「あ、あの…」

「飲んで飲んで飲んで酒呑んで！」♪

…クローゼそっちのけで騒いでね？

むしろこいつら騒ぎたいだけだな

…も～どろっと。触らぬ神に祟り無しだ

ク「…あ！ケイジ！助けて！」

…何でお前はこういう時に名前呼ぶかなぁ！

「…ケイジ？」

周りで酒酒言ってた奴らが一斉にこっちに向く

心なしか目が妖しい光を放っている…気がする

「ケイジ…」

「さあ…」

じりじりと俺を囲んで少しずつ迫ってくる

ケ「ちょ、待て！何かじりじり迫られると無駄に怖いんだけど！？」

「確保～！！」

『しゃあぁぁぁぁぁ！！』

ケ「ぎゃあぁぁぁぁ！？」

あれ？なんかデジャヴ

そして案の定拘束され…

ジ「それでは本日のメインイベント！」

ケ「やっぱり元凶はお前か！！」

ジ「…さあ、クローゼ！」

ク「ふぁ～い♪／／／」

無視！？つーか…

ケ「クローゼ！？お前酔ってんのか！？」

ク「酔ってないろ～？わらひぜんぜんへーきらもん／／／」

ケ「呂律回ってねぇじゃねぇか！誰だ！？クローゼに酒呑ませたの

は！？」

『会長です！！』

ケ「やっぱりかぁぁぁぁ！！」

つーかジル！お前は何人酔わせりゃ気が済むんだ！

ハンスを皮きりにもう十人近く潰れてんじゃねぇか！

ジ「フッフッフ…ケイジを潰そうと画策する事幾星霜…ついに今まで一回も酔わせられず逆にこっちが潰れる始末…
今宵こそこの無念を晴らす好機！」

めっちゃ個人的な理由だなオイ

ジ「対ケイジ戦汎用人間決戦兵器！出番よ！クローゼ！」

ク「あいあいさ～／／／」

そういうとクローゼは俺に近づいて

ク「じゃあ…」

ケ「待て！何するつもりか知らんが落ち着け！」

ク「…召し上がれ＆ａｍｐ；いただきま～す♪」

その言葉と同時に俺の唇はふさがれ、無駄に度の高いアルコールが喉を通った

翌日、俺とクローゼを除く全員が二日酔いでダウンした

その日から生徒達の間である言葉が合い言葉になった

『ケイジとクローゼを同時に酔わせてはいけない。ダメ、絶対』と。

閑話『酒は呑んでも呑まれるな…いやマジで』（後書き）

クローゼのカード説明

名称：聖なる意思を継ぎし姫君

アーティファクト：白隼の御扇（はくしゅんのみせん）

効果：基本的には補助専門のアーティファクト
ケガ、又は状態異常をＥＰと引き換えに完全回復する
時間制限の無いこのかのやつみたいなイメージ

付属として相手のアーツを吸収して自分のＥＰにできる
ただし、クローゼの属性上の問題で、今の所は水属性しか吸収はできない

第十一話『人が慌ててると何故か自分は落ち着くよね』（前書き）

第十一話です

テスト中の投稿なので短いです

明日で終わるから頑張るぞ！

それでは本編をどうぞ！

第十一話『人が慌ててると何故か自分は落ち着くよね』

あの魔の泥酔事件（ジル命名）から1日…

俺とクローゼは偶々学園に忘れ物を取りに来て、不運にも生徒に見つかり半ば無理やり授業に参加させられたエステルとヨシュアを送るため、そのついでにマノリアの先生達の所に泊まるためにメーヴェ海道に来ていた

ヨ「さてと、ここでお別れだね」

ク「はい…この数日間本当にありがとうございました」

エ「あはは、いいって。あたし達も楽しかったし。それじゃあ…先生とあの子達によろしくね」

ケ「覚えてたら言っとく」

そうして別れようかという時に

「おお、あんた達か！」

後ろから孤児院の片付けを手伝ってくれていた人が慌ててやって来た

ケ「オッサンは…確かマノリアの…」

「はあ…はあ…そこのあんた達は確か遊撃士だったな！た、大変な事になったんだ！」

エ「大変な事？」

ケ「その前に落ち着け。はい深呼吸～」

「す～は～す～は～…ふう、
…テレサ先生と子供達がマノリアの近くで何者かに襲われた」

エ「あ、あんですって～！？」

ク「あ…」

その言葉に全員が驚き、クローゼに至っては膝を着いて座り込んでしまっている

俺はそのクローゼを支えて

ケ「落ち着け。…オッサン、詳しい事を教えてくれねぇか？」

と、冷静に言えたが、俺も頭の中がかなりぐちゃぐちゃになっている

自分より慌てている…もとい、頭が真っ白になっているクローゼを見て、何とか平静を保っているようなもんだ

「あ、ああ。学園祭から帰って来る途中で変な連中に襲われたみたいでな。子供達にケガは無かったが先生と遊撃士の姉ちゃんが気絶させられたみたいだ」

エ「カルナさんが！？」

ヨ「相当の手練れみたいだね…」

ク「……」

エステルとヨシュアは知り合いの遊撃士がやられたようで驚いている

「ギルドに連絡するはずが宿屋の通信機が使えないんで走ってここまで来たんだ！」

ケ「サンキュー、オッサン。悪いがここまで来たついでにルーアンのギルドにも知らせてくれ。俺達は遊撃士と一緒にすぐにマノリアに向かう」

「ああ、わかった！」

そう言ってすぐに走って行った

ケ「俺らも早く行くぞ！クローゼ！いつまでそこに座り込むつもりだ！」

ク「！…うん。ごめん」

そうして俺達は一路マノリアに向かった

～マノリア村～

俺達はマノリアに着くなりすぐに酒場の二階に入った

ケ「無事か！？」

マ「お姉ちゃん達…」

ク「みんな…」

子供達は俺達を見て緊張がほぐれたのか、すぐに飛びついてきた

ダ「わあああん！」

ポ「怖かったの～！」

エ「良かった…あんた達は無事みたいね」

ヨ「すみません、先生達の容態は？」

エステル達はすぐに仕事に取りかかっている

「安心しなさい。二人共大したケガじゃないわ。ただ目を覚まさないからちょっと心配なんだけど…」

ヨ「ちょっと失礼します」

容態を聞いたヨシュアはすぐに先生達の様子を調べる

すると、

ヨ「うん、間違いない。睡眠薬をかがされたみたいだ」

エ「す、睡眠薬ぅ！？」

エステルが過剰なリアクションをとる

ヨ「うん、微かに刺激臭がする。副作用がないタイプだから安心していいと思うけど…」

それを聞いた俺はすぐに先生達に近づき

ケ「…この匂いは…すんません、今から書く薬草をすりつぶした物を湯で溶かして飲ませてあげて下さい」

そう言ってメモに数種類の薬草を書いてさっきヨシュアと話していた人に渡す

「この通りにすればいいのね？」

ケ「はい」

そう答えるとすぐに部屋を出て行く

ヨ「…ケイジ、君は…」

ケ「説明は後だ。クラム、何があった？」

俺はクラムに説明してもらおうとするが、クラムは俯いて答えない

マ「…あたしが説明します…

あたし達…遊撃士のお姉さんと一緒に海道を歩いていたんですけど…突然覆面をかぶった変な人達が現れて…遊撃士のお姉さんが追い払おうとしたけど…覆面の人達にすぐに囲まれて…先生もあたし達を守ってあいつらに向かって行って…それで…」

そこまで話すと、マリィが泣きそうになる

エステルがそれを慰めていると

クラ「…あいつら…先生からあの封筒を奪ったんだ…オイラ…取り返そうとしたんだけど…思いっきり突き飛ばされて…
ケイジ兄ちゃん、ヨシュア兄ちゃん、オイラ…守れなかったよ…」

クラムまで泣き始める

ケ「…そんな事はない。お前は守ろうとしたんだろ?今はそれだけでも大したもんだ。それに…誰もケガしてないだろ?先生はそれだけでも喜んでくれるさ」

クラ「…でも…オイラ…」

気がつけば子供達全員が泣いていた

エ「許せない…!どこのどいつの仕業よ!」

ついに我慢の限界が来たのかエステルが叫ぶ

ク「…はっきりしているのは…犯人が手練れだと言う事です。遊撃士の方が為す術もなく気絶させられた訳ですから…」

本来の冷静さを取り戻したクローゼが事件の分析をする

ク「そしてもう一つ…計画的な犯行だと言う事です。狙いは勿論先生の持っていた寄付金…」

ケ「放火の件も十中八九そいつらが犯人だろうな」

ヨ「うん、その可能性が高そうだね」

エ「クローゼ…」

心配そうにエステルが言うが

ケ「ようやく落ち着いたか。アホ」

ク「うん…いつまでも落ち込んでいても仕方ないよね。今はともかく、一刻も早く犯人を捕まえないと…！」

「…そいつは同感だな」

ルーアンで見た赤毛…アガットがいきなり入って来た

エ「あーっ！」

ヨ「アガットさん…」

ア「話は聞いたぜ。ずいぶんと厄介な事になってるみたいじゃねぇか」

エ「ひ、他人事みたいに言わないでよ！カルナさんだってやられちゃってるんだから！」

ア「わかってる…きゃんきゃん騒ぐな。確かにカルナは一流だ。相当ヤバい連中らしいな。大ざっぱでいいから今までの事情を教えて貰おうか」

ヨ「はい…」

物凄いくってかかるエステルを華麗に流すアガット

…なんかコイツとは気が合う気がする

その後ヨシュアがアガットに一連の事情を説明すると…

ア「ふん、成る程な。妙な事になってきやがったぜ」

エ「妙ってなにがよ?」

ア「ああ、実はな…《レイヴン》の連中が倉庫から姿をくらませやがった」

エ「それってやっぱり連中が先生を襲ったんじゃ!?」

エステルが騒ぐが

ケ「アホ。あんな奴らに現役の遊撃士が負ける訳ないだろうが」

エ「それもそうよね…連中、口ばっかりで碌に鍛えて無かったし」

ア「しばらく睨みをきかせて大人しくなったと思ったが…今日になっていきなり姿をくらませやがって…そこに今日の事件と来たもんだ」

手のひらに拳をうちつけるアガット

ヨ「何か関係はありそうですね」

ア「ああ、だが今はそれを詮索している暇は無い。新米共、さっさと行くぞ」

エ「何よいきなり。一体どこに行くの？」

そうエステルが言うと、アガットは呆れたように

ア「わかんねえ奴だな。犯行現場の海道に決まってるだろ。できるだけ手がかりを掴んで犯人の行方を突き止めるんだ！」

エ「あ、成る程」

ヨ「分かりました。お供します」

エステル達が出て行くのに、俺達は子供達をあやしてから着いて行った

外に出ると、エステル達が辺りの暗さに面食らっていた

ケ「はあ…計画もなしに行動するからだ」

エ「む。なら何かいい案でもあるの？」

ケ「…ジーク！」

俺がジークを呼ぶ返事を返してジークがクローゼの腕に止まった

ア「な、なんだコイツは」

エ「クローゼのお友達でシロハヤブサのジークよ」

ア「はあ…お友達ねぇ」

半信半疑のアガット。…まあ、普通はその反応だろうな

ケ「先生達を襲った犯人の行方…わかるか？」

ジ「ピューイ！ピュイ、ピュイ！」

ケ「…クローゼ、通訳頼む」

ク「判る。案内してあげる、だって」

ア「はは、面白いジョークだぜ！」

笑い飛ばすアガットだが

エ「やった！流石ジーク！」

ヨ「うん、お手柄だね」

ジ「ピューイ♪」

ア「ちょ、ちょっと待て！お前らそんなヨタ話を信じてるんじゃねぇだろうな！？」

普通にこの状況を受け入れているエステル達を見て慌てだした

ケ「…信じられないなら一人で海道を探せばいい。つーか信じねぇんなら着いてくんな」

エ「行くわよみんな！」

全員がジークに着いて行き、その場に取り残されたアガット

ア「…（ポカーン）

…えーと…こ、コラガキ共、待ちやがれ！」

結局後を追うアガットであった

第十二話『灯台での攻防…いや、私刑？』（前書き）

第十二話です

若干シリアスで暗め…かな？最後は

好き嫌いはハッキリ分かれると思いますね

それでは本編をどうぞ！

P．S．息抜き更新小説、始めるつもりですので、そっちも宜しくお願いします

第十二話『灯台での攻防…いや、私刑？』

先生達を襲った犯人を見ていたジーク。
俺達はジークに頼んで犯人達のアジトに案内してもらうのであった」

ク「だから途中から心の声が表に出てるって」

ケ「なにー！？（棒読み）」

エ「漫才はいいから早く行くわよ！」

ちょ、漫才て…

そして気付けばマノリア間道まで来ていた

ア「確かに誘導しているみたいだが…オイ、冗談だったら勘弁してくれよ？」

アガットは未だにジークを疑っているようだ

ケ「こんな事で冗談なんか言うかよ。恩人がやられてんだぞ」

ア「ち…仕方ねぇな。ダマされたと思ってここは乗せられてやるとするか」

エ「全くもう…素直じゃないんだから」

ヨ「とにかく急いでジークの後を追いかけよう」

ヨシュアの一言で再び無言でジークを追いかける

～バレンヌ灯台～

エ「あの建物って…」

ア「バレンヌ灯台…ルーアン市が管理する建物だな」

ケ「ここには灯台守のオッサンが一人で住んでる…まあ、言っちゃ悪いがアジトにはぴったりだろうな」

ク「間違いなくこの中に犯人達がいると思います」

ヨ「となると、犯人に灯台を占拠されていると考えた方が良さそうだね」

エ「入り口はあそこだけみたい…とにかく入ってみるしかないか」

ク「はい…」

そうして灯台に突入しようとした時…

ア「ちょっと待ちな。お前らは…」

空気を読まずにアガットが俺とクローゼを引き止めようとした

俺が言い返そうとすると…

ク「この目で確かめてみたいんです」

ア「何ぃ？」

ク「誰がどうして先生達をあんな酷い目にあわせたのか…だから…どうかお願いします」

ア「そ、そうは言ってもな…」

尚も渋るアガット

ケ「…ここまで来ておいて今更帰れだぁ？一般人舐めんのもいい加減にしろ。こっちはとっくに我慢の限界越えてんだ。お前を叩きのめしてから灯台に殴り込んでもいいんだぜ？」

ア「う…わかったよ！好きにしやがれ！」

一気にまくし立て、ついでに殺気まで当てるとアガットは大人しくなった

そしてその後すぐに突入すると《レイヴン》のメンバーがいた

エ「こ、こいつら…」

ク「あ、あの時の人達…」

驚くエステルとクローゼ

ア「まさかとは思ったが…オイてめぇら！こんな所で何してやがる！」

アガットが叫ぶが、《レイヴン》メンバーの目は光が消えて、まるで死人のようだった

ア「お、オイ…」

様子がおかしい事に気付いたアガットがディンに近寄ろうとするが、ディンは突然刃物を取り出してアガットに襲いかかった

ヨ「アガットさん危ない！」

ヨシュアが叫ぶ

間一髪背中に背負っていた大剣でディンの攻撃を防ぐアガット

しかし

ア「こ、この力…！？」

どうやらディンの元々の力の数倍の力で攻撃されているようだ

ア「ディンてめぇ…」

デ「……」

ア「はっ！上等だ！何をラリっているのか知らねえが…キツいのをくれて目を覚まさせてやるぜ！」

その声を皮きりに戦闘が始まる――

――ハズだった

ケ「……邪魔だ。消えろ」

そう声が聞こえると共に、俺はその場を動く

ケ「―曼珠沙華」

そして出来る限りのスピードで動きまわり、何度も剣戟を食らわせる

…勿論峰打ちだが

俺が元の位置に戻った時には既にディン達は倒れ伏していた

ケ「…さっさと次行くぞ」

エ「す…すごい」

ヨ「待ってケイジ。…うん、やっぱりこの人達は誰かに操られてるみたいだ」

ヨシュアが原因を判明させ、《レイヴン》の疑いを晴らした所で俺達は上を目指した

ＶＳレイス

ケ「雷雲よ、我が刃と成りて敵を貫け…サンダーブレード！」

ドガァァァン

ケ「さっさと消えろ！…次！」

エ「…容赦ないわね」

ＶＳロッコ

ケ「古より伝わりし浄化の炎…消えろ！エンシェントノヴァ！」

ズガァァァン

エ「ああ…人がゴミみたいに…」

ヨ「…何かレイヴンの人達が可哀想になってきたよ…」

～最上階～

エステル達と最上階の手前まで来た時に人の話し声が聞こえて、足を止めた

ゆっくりとバレないように中を覗くと

ギ「ふふふ…君達、良くやってくれた。これで後は連中に罪を被せれば万事解決という訳だね」

ギルバートと黒い悪趣味な装束を着た男達が下卑た笑みを浮かべながら話していた

「我らの仕事ぶり、満足して頂けたかな？」

…つーかあいつら、情報部の連中じゃねぇか。
レーヴェの言ってた事はこの事だったのか？

ギ「ああ、素晴らしい手際だ。念の為に聞いておくが…証拠が残る事は無いのだろうね？」

「ふふ。安心するがいい。正気に戻っても我らの事は一切覚えていない」

「そこに寝ている灯台守も朝まで目を覚まさないだろう」

ギ「それを聞いて安心したよ。これであの院長も孤児院再建を諦めるはず…放火を含めた一連の事件もあのクズ共の仕業に出来る…正に一石二鳥と言うもの」

「喜んで貰えて何よりだ」

黒装束が笑みを強くするギルバートに言う

「しかし、あんな孤児院を潰して何の得があるのやら…理解に苦しむ所ではあるな」

ギ「ふふ、まあいい。君達には特別に教えてやろう。市長はあの土地一帯を高級別荘地にするつもりなのさ」

「ほう…」

ギ「風光明媚な海道沿いでルーアン市からも遠くない。別荘地としてはこれ以上無い立地条件だ。そこに豪勢な屋敷を建てて国内外の

富豪に売りつける…それが市長の計画なのさ」

…ヤバい。理性が崩れそうだ

「ほう、なかなか豪勢な話だ。しかしどうして孤児院を潰す必要があるのだ？」

ギ「はは、考えてもみたまえ。豪勢さが売りの別荘地の中にあんな薄汚い建物があってみろ？おまけにガキ共の騒ぎ声が聞こえてきた日には…」

「成る程、別荘地としての価値半減か…しかし危ない橋を渡るくらいなら買い上げた方がいいのでは無いか？」

ギ「は、あのガンコな女が夫が残した土地を売るものか。だが連中が不在の内に建物を建ててしまえばこちらの物さ。フフ、再建費用も無いとなれば泣き寝入りするしかないだろうよ」

ギルバートが大笑いする

…もう限界だ

俺が連中の前に飛び出ると、クローゼも同じだったのか、全く同じタイミングで飛び出して来た

ケ＆ａｍｐ；ク「…それが理由か（ですか）」

後ろからエステル達も慌てて付いて来た

ク「そんな…つまらない事のために…先生達を傷つけて…思い出の

場所を灰にして…あの子達から笑顔を奪って…」

ケ「私利私欲の為か、それとも純粋に市の事を思ってか…どっちにしろ許すつもりはねぇが…覚悟は出来てんだろうなァ…」

ギ「ど、どうしてここがわかった!?それより、あのクズ共は何をしてたんだ!」

ケ「全員下で仲良くのびてるよ…」

エ「しっかしまさか市長が一連の事件の犯人だなんてね…しかもどこかで見たような連中も絡んでるみたいだし」

「ほう…娘、我々を知っているのか?」

エステル達が会話をしている間に俺は術の詠唱を始める

しばらく集中して詠唱していたが

ギ「き、君達!そいつらを全員皆殺しにしろ!か、顔を見られたからには生かしておく訳にはいかない!」

見苦しくも黒装束…情報部に命令して証拠、いや証人隠滅を図るギルバート

ク「先輩、本当に残念です…」

クローゼが憐れむように呟く

「まあクライアントの要望とあらば仕方あるまい」

「相手をして貰おうか」エ「ふん、望む所だっての！」

ク「例え雇われていたとしても、あなた達の罪は消えません…」

ア「《重剣》の威力…たっぷりと味わいやがれ！」

アガット達に情報部が襲いかかったが…

ケ「―天光満つる所に我は在り、黄泉の門開く所に汝在り！…出でよ！神の雷！」

俺の詠唱を聞いて両者の動きが止まる

ク「……！アガットさん！急いで離れて下さい！」

俺のやろうとしている事にいち早く気付いたクローゼがアガットに向かって叫ぶ

その声を聞いて我にかえったアガットはすぐに部屋の端に逃げる

情報部もすぐに外に逃げようとするが…

ケ「逃がすかよ…インディグネイション！」

瞬間、閃光が部屋を包み、轟音が響く

目が開くようになってから辺りを見渡すと、情報部が床に膝をついていた

…動けなくはないが、戦える状態でもないらしい

「…動くな！それ以上動けばこいつの頭は吹き飛ぶぞ！」

情報部がギルバートを人質にとる

エステル達は卑怯だの何だの叫んでいるが、俺の答えだけは違った

ケ「…だから？」

『なっ！？』

驚愕の声を上げるエステル達…うるさいな

ケ「確かに犠牲は出ないに越した事は無いが、いちいちそんな物を気にすればチャンスを逃しかねない。今みたいにな。…それにその秘書は初めから敵側だ。何で情をかけなきゃならない？…自業自得だろ」

「…よく喋るな」

ケ「じゃあお話は此処までにしようか」

俺はゆっくりと情報部に近づく

すると、俺が本気だと悟ったのか、舌打ちをして秘書の足を撃ち抜いてから煙幕を使った

煙が晴れた頃には既に情報部の姿は無かった

その後、アガットが無言で連中を追い、エステル達と秘書とレイヴンの連中をマノリアの風車に閉じ込めた

その間、会話は一切無く、エステルは白い目で、ヨシュアは意外そうに俺を見ていた

閉じ込め終えた時

エ「…どうしてあんな事言ったの？」

突然エステルが俺に質問した

ケ「…いちいち敵側の、しかも俺の護る対象を傷つけた奴を助けようとする程俺は甘くない」

エ「でも…」

ケ「確かに、助けられるなら助けるさ。でもな、あの後もし秘書を盾に、そこから眠らされていた爺さんを、調子に乗ってクローゼやお前、ヨシュアや俺の誰かが人質にされたらお前らは抵抗できるか？」

エ「それは…」

ケ「加えて俺は遊撃士でもなければ、全てを守らなければいけない義務も無い。…もしクローゼとその他の１００人を天秤にかけられたら、俺は迷わずクローゼを取る」

エ「っ…！」

ケ「全て救いたいと考えてる事はすげぇとは思う。
…でもな、その考えがある限りはやっぱりお前は綺麗なだけだよ」

…昔の俺みたいにな

ヨ「…それはどういう事？それに…君は一体誰なんだ？」

…誰…か。

ケ「…今は答える気は無い。
…だけどこれだけは言える。俺は俺と俺の護る対象に敵意が無い限りお前らの敵にはならない」

エ「……」

ヨ「……今は…と言う事はいつか話してくれるのかい？」

ケ「時が来れば、な。
…今は、市長を追い詰めるのが先だ」

エ「…そうね。行くわよ！」

元気に走って行くエステルと慌ててついて行くヨシュア

クローゼは俺を心配そうに見上げている

ク「…ケイジ…」

ケ「『敵だから関係ない』…はは、何時から俺はこんな合理的になったんだかな…」

ク「……」

ケ「俺は十を捨ててでも一を救うと決めた。…なのに、何でかな…エステル達が眩しく見える…羨ましく、な…」

ク「ケイジ」

突然クローゼが俺に抱きつく

ク「ケイジは、ケイジの考えでいいと思うよ…いつも護られてる私が言うのも変だけど…私もあなたを護りたい…だから…無理は…しないで…」

ケ「……」

俺はクローゼの言葉には答えずに手をほどき、市長の下に走った。

後ろでクローゼが涙を流している事に気づかぬフリをして…

第十三話『市長を追い詰めろ！』（前書き）

まだＰＳＰが直らない…

今回は記憶を頼りにやったので所々間違ってるかもです

気にしないぜ！って仏の心をお持ちの方はどうぞ！！

第十三話『市長を追い詰めろ！』

ケ「ふぅ…ちょっと熱くなりすぎたか…？」

今俺は学園の自分の部屋に戻って来ている

理由は自分の武器…蒼燕と仕事着を取るためだ

ハンス？生徒会だが？

クローゼには一足先にエステル達に合流して貰った

流石に二人だけってのは何か不安だったからな…

ケ「…さて、こっちも急いで行きますかね」

俺はダルモア邸に瞬動を使って向かった

ｓｉｄｅエステル

私達は今ダルモア市長のお屋敷に向かっている

あの黒装束の奴らのおかげで今回の黒幕が市長だった事がわかったからだ

自分のやりたい事をやるためだけに他人を不幸にするなんて…絶対に許せない！

ヨ「…エステル？わかってるよね？僕達の役目はあくまで時間稼ぎ。

僕達じゃ市長を逮捕出来ないんだからね」

エ「わかってるわよ。怒らせてもいいから市長を足止めするんでしょ？」

ヨ「わかってるならいいんだ」

正直私が直接ぶっ飛ばしたいけど…これぱっかりはしかたないよね

納得はいかないけど

～市長邸～

屋敷に到着。

エ「しっかし、大きな屋敷よね～。やっぱりあくどい事してるからこんな屋敷に住めるのかしら？」

いかにもお金使ってますって感じだしね～

ヨ「それは無いと思うけど…」

ク「ダルモア市長は元は大貴族の家柄ですから。この屋敷も代々の当主に受け継がれたモノだと思います」

クローゼが丁寧に説明してくれた

エ「そっか…確かに屋敷に罪は無いわよね。まあ、いいや。なんとかあの市長を問い詰めてやらなくちゃ」

待ってなさいよ！悪徳市長！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

やって来ました市長邸。

俺が庭に侵入したのと同じタイミングでエステル達が入って来たが…なぁ？

ヨシュアあくどっ！！

よくあんな口からデマカセが出てくるもんだよ。しかもオマケにメイドさん落としてるしな

…この天然たらしが！！（↑人の事言えない）

まあ、エステル達はヨシュアがいる限り大丈夫だろうと判断してさっさと屋敷に侵入して市長を探す

…な～んかあのキノコ辺りが絡んでそうな気がするんだよな～…

まあ、いいや。この事件が終わったら一回帰って情報部とキノコの事を調べて回ろう

そんな事を考えながら屋敷を探索していると、やたら騒がしい部屋を見つけた

すぐさま扉に近づき、耳を当てると、中には既にエステル達がいて、市長と口論していた

…ついでに認識したくなかったけど、キノコの存在も認識した

ダ「な、何っ！？」

お、何か驚いてる

それにつられてかなりがっつりと会話を聞く

エ「今回の事件の犯人、それは…ダルモア市長！あんたよ！」

エステルが声を張り上げて言うと、市長が物凄く慌てた声を出す

ヨ「秘書のギルバートさんは既に現行犯で逮捕しました。あなたが実行犯を雇って孤児院放火と寄付金強奪を指示したという証言も取れています。この証言に間違いはありませんか？」

ダ「で、デタラメだ！そんな黒装束の連中など知るものか！」

…馬鹿だね～このオッサン。自分で自分の首締めてら

エ「あれ～？おっかしいな。あたし達、黒装束なんて一言も言って無いんだけど～？」

ダ「うぐっ」

流石にそんな失言を逃す筈もなく、しっかり追い込みにかかるエステル達

ダ「知らん！私は知らんぞ！全ては秘書が勝手にやった事だ！」

エ「往生際の悪いオッサンねぇ」

全くもって同感だな

ヨ「高級別荘地を作る計画のために孤児院が邪魔だったと聞いています。それでもまだ容疑を否認しますか？」

いいね～この徐々に追い込んで行く感じ。燃えるねぇ～

ダ「しつこいぞ、君達っ！確かに随分と前から別荘地の開発は研究されている！だがそれはルーアン地方の今後を考えた事業の一環にすぎん！どうして性急に事を運ぶ必要があるのだ！」

まだ、あがくか…それも無駄だってのに

エ「そ、それは…」

…まさか、忘れてるのか？ちょっと前に俺が言ったぞ？

しゃあねぇ。助けてやるか

ケ「借金…だろ？」

『ケイジ！？』

ふっふっふ、いい感じだな

ダ「君は…」

ケ「…答える必要はない。ダルモア市長…あんた、市の予算を相当使い込んでるな？」

ダ「それは…土地開発の費用として…」

ケ「馬鹿かお前？そんな言い訳通る訳無いだろ。なんせまだ工事なんざ準備すら始まって無いからな～
…しかもあんた、ちょくちょく共和国に出掛けてんだろ？何してんだかな～」

ダ「た、ただの観光だ…」

ケ「あはははは！嘘はいけねぇなぁ！あんたは共和国で相場に手を出して大火傷したんだ。取り返しのつかない程、な」

後ろでエステルが相場が何かヨシュアに聞いていたがスルーだ。

因みにわかりやすく言えば株の事だよ

ケ「よくもまあ、つぎ込んだもんだな。一億ミラも」

エ「い、一億ミラぁ～！？」

デ「ひっく…一億ミラとな。私もミラ使いは荒い方だがお主には完敗だぞ」

黙ってろキノコ。誰も勝負なんざしてねぇんだよ

ダ「くっ…」

逃げ場を失って苦い顔をするダルモア

エ「なに競ってんだか」

ケ「ま、そういう訳で莫大な借金を抱えたあんたはルーアンの予算に手を出した。でも返すアテが無くて別荘地を作ろうとしたが…まさか土地確保のために放火や強盗までやるとはな。計画制皆無な上に市長失格だな」

ダルモアはしばらく黙っていたが

ダ「…ふん、そんな証拠がどこにある」

エ「あらま、開き直った」

ダ「貴様らもそうだ！市長の私を逮捕する権利は遊撃士協会には無いはずだ！今すぐここから出て行くがいい！」

エ「む、やっぱりそうきたか」

ヨ「流石に自分の権利はちゃんとわかってるみたいだね」

まあ、それがこの場でのコイツの切り札だからな。俺がいる時点で意味ないけど

そんな呑気な事を考えていると、壮絶な悪寒が俺を襲った

ク「……市長、一つだけお伺いしてもよろしいですか？」

こ、これは…

ダ「なんだ君は！王立学園の生徒の癖にこのような輩と付き合って…とっとと学園に戻りたまえ！」

ク「……」

ダ「うっ」

クローゼが市長を睨むと、途端に市長の勢いがなくなる

…間違いないな。クローゼがキレてる

ク「どうしてご自分の財産で借金を返さなかったのですか？確かに一億ミラは大金ですが…ダルモア家の資産があれば返せない筈じゃ無いはずです。例えばこの屋敷なんか一億ミラで売れそうですよね？」

ダ「ば、馬鹿な事を…この屋敷は先祖代々から受け継いできたダルモア家の誇りだ！どうして売り払う事ができよう！」

ケ「馬鹿はお前だ。カス野郎」

クローゼには悪いが、そろそろ俺も我慢の限界なので割り込ませて貰う

ケ「あの孤児院だってなぁ…沢山の思い出がある大切な場所だったんだ。それこそ俺やクローゼ、孤児院の子供達、先生…あそこで育った奴らなんかにとっては特にかけがえの無い程のな。お前は知ってんのか？何の力も持っていない子供がレイヴンの連中が犯人だと聞いてかなわないとわかっていても戦いに行った事を…」

ダ「そ、そんな事を私が知るものか！」

ケ「だろうな。…だからこそお前は市長失格なんだよ。…逮捕する前に聞いておく。何故孤児院を襲った！自分の屋敷を売ればそれで済む話じゃねぇのか！！」

ダルモアは怯んで縮こまっていたが

ダ「あ、あんなみすぼらしい建物と我が屋敷を一緒にするなぁぁぁ！！」

ついに喚きはじめた

ク「あなたは結局自分自身が可愛いだけ…ルーアン市長としての自分とダルモア家の当主としての自分を愛しているだけに過ぎません。可哀想な人…」

クローゼが心底憐れんだ目で市長を見る

するとダルモアは突然笑いはじめ…

ダ「よくぞ言った、小娘が…こうなったら後の事など知るものか！」

俺を無視したような発言の後、壁のスイッチをダルモアが押すと、隠し扉が開いた

ダ「ファンゴ！ブロンコ！エサの時間だ！出て来い！」

扉の奥から足音と何かの気配がしてくる

エ「な、なんなの…？」

ヨ「獣の臭い…！」

そして扉から現れたのは二匹の巨大な魔獣だった

デ「ま、魔獣ぅぅぅ！？うーん、ブクブク…」

フ「公爵閣下！？」

泡を吹いて気絶するキノコと駆け寄るフィリップさん

キノコがそのまま食われれば万々歳だが、フィリップさんがいるから無事なんだろうなぁ…チッ

そんなこんなで意識をキノコの方に向けていると、急にダルモアが狂った笑いをし出した

エ「こ、こんな屋敷で魔獣と戦う事になるなんて…」

ヨ「でもこれで市長を現行犯として逮捕できる」

ク「あなた達に恨みは無いけれど…人を傷つけるつもりなら容赦はしません！」

ケ「とりあえずはコイツらを片付けるのが先だ……来るぞ！！」

戦闘が始まった

第十四話『ＶＳファンゴ＆ブロンコ！』（前書き）

ついに…明日！

ＰＳＰが帰ってきます！

超個人的な理由で更新がおろそかになってすみませんでした

ＰＳＰも帰ってきますので、これからは計画的に更新できると思います

それでは本編をどうぞ！

第十四話『ＶＳファンゴ＆ブロンコ！』

ダルモアの放った魔獣…ファンゴとブロンコが同時に俺達に襲いかかってくる

ケ「ちっ…」

エ「このっ！」

コイツは…連携されると面倒だな

倒されはしないが倒せもしねぇ

ヨ「くそ…何か決定打があれば…」

…仕方ねぇ、か

ケ「…俺が片方を抑える。その隙にお前らはもう片方をやれ！」

ク「ケイジ！？無茶だよ！」

エ「クローゼの言う通りよ！４人で二匹を抑えてるのに！」

ケ「だったらいつまでもこうしてるのか！？今は余裕かましてのんびり突っ立ってるがいつダルモアが逃げてもおかしくねぇんだぞ！」

エ「それは…」

言いよどむエステル

ヨ「…信じていいんだね？」

ク「ヨシュアさん！？」

ケ「任せろ。あの犬に格の違いを教え込んでやる」

俺はニヤリと笑って魔獣を見る

それでヨシュアは心を決めたのか

ヨ「無茶はしないでよ？クローゼが暴走しそうだから」

ク「ちょ！ヨシュアさん！？／／／」

ケ「おーおー、怖い怖い。こりゃあケガできねぇな」

ヨシュアの軽口に俺も軽口で返す。クローゼは何故か慌てていたが

…なんだかんだ言っても余裕あるじゃねぇか

ヨ「…じゃ、頼んだよ。親友」

ケ「任せろ。むしろ俺がケリ着けてやるよ」

魔獣と対峙しているにも関わらず、俺とヨシュアはハイタッチをして、そこから一気に作戦通りに別れる

俺が相手する方…ファンゴだったか？はダルモアの指示を待っているのか、身じろぎ一つしない

そしてその後ろにダルモアがいた

ケ「悪徳市長の割には空気読めるじゃねぇか」

ダ「何、最後の別れを邪魔する程私は無粋ではないさ。…こちらに一人で来たという事は君は囮だな？仲間に捨てられるとは…いやはや何とも哀れな事だ」

かなりハイになっているのか、やたら一方的に喋り倒すダルモア

ケ「はっ。勘違いすんなよ」

ダ「何がかね？君が死ぬ。その後に彼女らも後を追う。その事に変わりは無いよ」

ケ「こっちに俺が一人で来たのはなぁ…俺一人で十二分に戦えるからだ」

そう言った瞬間、ダルモアは高笑いをする

ダ「ははははは！ついに気が触れたか！４人で抑えるのが精一杯だった魔獣の片割れを一人で倒すと！？」

ケ「…もう、面倒くせぇ舌戦は終わりだ」

実際、終わりそうにねぇし、何よりコイツの声を聞くたびにイライラする

ケ「そろそろかかって来いよ…その犬っころ共々ブった斬ってやる」

ダ「ははは！自ら死期を早めるとは愚かな！いいだろう！ファンゴ！やってしまえ！」

ダルモアの号令と共にファンゴが雄叫びをあげて襲いかかってくる

ケ「はっ…魔獣風情が…
ケイジ・ルーンヴァルト…推して参る！」

ｓｉｄｅ　クローゼ

エ「はぁぁぁぁ！！」

ヨ「せいっ！」

ク「行きます…やぁっ！」

相手の魔獣…ブロンコは向こうのファンゴと違って完全に自立して暴れ回っている

…そして、まずい事に、少し押されている

現に今もエステルさんとヨシュアさんの攻撃を避け、私のアーツは当たったものの、あまりダメージが無いのかそのまま二人に反撃していた

エ「くぅ…いつもみたいに棒を振り回しにくいわね…」

ヨ「エステル」

エ「ん？」

ヨ「君は後衛に回って欲しい」

エ「ええ！？何で！？」

…確かに、ヨシュアさんの言う通りですかね…

ク「エステルさん、私からもお願いします」

エ「クローゼまで…何か理由、あるんでしょうね？」

ヨ「うん」

エ「…わかったわよ」

そう言ってエステルさんもアーツの準備にかかる

…理由は、エステルさんの武器。棒術具はいわば長柄武器なので、突き、払い、薙ぎを主に戦う

けれど、今は屋敷の中で戦っている。突きはともかく、払いや薙ぎでは確実にどこかに引っかかってしまうからだ

ヨ「僕がアイツを攪乱するから、その隙に大きいのを頼むよ」

エ「了解！」

ク「はい！」

そう言ってエステルさんはダークマターを、私はダイヤモンドダストを準備する

ヨ「行くよ…」

――漆黒の牙

ヨシュアさんがSクラフトを決め、その直後に私とエステルさんが同時にアーツを叩き込む

ブロンコは断末魔をあげて、ゆっくりと倒れた

ヨ「戦闘終了…」

ク「…そうだ！ケイジ！」

私は急いでケイジの援護に入ろうとしたけど…

ケ「――鳳仙華！――閃華！」

エ「へ？」

目に入ってきたのは、ファンゴにトドメを刺していたケイジだった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第十五話『《白烏》』

ケ「――鳳仙華！――閃華！」

鳳仙華でファンゴを薙払い、その隙を閃華で突き、追加効果によってファンゴを葬る

横を見るとどうやらエステル達も終わったようで、一瞬呆けていたが、すぐにこっちに駆けつける

ダ「ば、馬鹿な…私の可愛い番犬達が…貴様ら、よくもやってくれたな！」

エステルもヨシュアも何か言いたげだったが、すぐにダルモアに向き直り

エ「それはこっちの台詞だっての！」

ヨ「遊撃士協会規約に基づきあなたを現行犯で逮捕します。抵抗しない方が身のためですよ」

しかし、ダルモアは俯いて震えるだけで返事は無い

再度ヨシュアが投降を促そうとしたその時

ダ「ふ…ふふ…こうなっては仕方ない。奥の手を使わせてもらうぞ！」

ダルモアが喚き、懐から杖を取り出す

あれは…マズい！！

ケ「全員早く逃げろォ！！」

エ「え！？」

ダ「遅いわ！『時よ、凍えよ！』」

ダルモアがそう唱えた瞬間、俺達は金縛りにあったようにその場から動けなくなる

ケ「クソ…まさかそんなモンを持ってやがるとは…」

ダ「ほう…これを知っていたか。賢しい事だな」

エ「な、何なのよこれ！？」

ク「身体が動かない…」

ケ「古代遺物（アーティファクト）…ゼムリアの遺産。古代遺物一つで国を滅ぼす物さえある。古の技術の結晶…アレは多分《封じの宝杖》と呼ばれるモンだ」

ダ「そこまで知っていたか…まさかとは思うが七耀教会の者か？」

ケ「…さあな。仮にそうだとして、お前に教える訳が無いだろう？」

ダ「それもそうだ…なら、危険な芽は早めに摘み取らねばな」

ダルモアが再び懐から拳銃を取り出す

ク「なっ…」

エ「拳銃!?」

驚くエステルとクローゼ。ヨシュアは無言でダルモアを睨み付ける

ダ「先ずは目障りな小僧からだ…」

ク「や、やめなさい!ケイジに手をだしたら許しません!」

クローゼが叫ぶが、ダルモアは毛ほども気にかけずに俺に近寄り、眉間に拳銃を押し当てる

ダ「どうだ?怖いか?恐ろしいか?今すぐ土下座して命乞いをするのなら助けてやらん事もないぞ?まぁ、《封じの宝杖》で指一本動かせないだろうがなぁ!ふはははは!!」

絶対的優位に立ち、勝利を確信したのか、余裕の表情で語りかけてくるダルモア

ケ「はあ…アホだろお前」

ダ「何だと?」

ケ「アホかって言ったんだよ。ハゲが」

ダ「貴様ァ!口を慎め!この状況を理解しているのか!?」

ケ「…むしろお前が理解してんのか？お前の切り札…ちょっとずつ消えていってんのによ」

ダ「何！？」

ダルモアが慌てて封じの宝杖に目を向けると、封じの宝杖の先に黒い雷がついていて、少しずつ、だが確実に封じの宝杖を消滅させていっている

ダ「な、なんだこの雷は！？」

ケ「『天照』…ま、アレだ。切り札は最後までとっておくもんだよ」

ダルモアが顔を上げた時には、既に俺の渾身の一撃（拳）が顔面に突き刺さっていた

ダ「ぐはっ……」

エ&ク「……（ポカーン）」

ヨ「……ってケイジ！早くダルモアを捕まえないと！」

ケ「は？……あ！」

完全に忘れてた

ダ「…！！思い出した…！黒髪に変質する紅い瞳にルーンヴァルト姓…かなうわけが無い！！」

ダルモアが叫んで逃げ出す

どうやら隠し扉があったようで壁が開き、そこからダルモアが逃げ出す

ケ「チッ…」

ヨ「舌打ちしてないで早く追うよ！」

ク「ケイジ早く！」

ケ「わかってるよ…」

エステルはとっくにダルモアを追いかけているようだ…せっかちな

――――――

隠し通路を抜けると、小さな船着場に出た

エ「あ！ヨシュア！」

ヨ「エステル！ダルモアは！？」

エステルは無言で指を指す

その方向を見ると、ヨットに乗って逃げているダルモアがいた

ケ「ヨットまで用意してたか…」

ヨ「良いから早く乗って！」

言われて振り返ると、既に三人がボートに乗っていた

ケ「…もちょっと早く声掛けろよ…」

――――――

ダ「ふう…このままだと、もうリベールには居られんな…」

ダルモアは呟く。何故こうなってしまったのかと

秘密裏に孤児院を襲撃し、その罪を目障りな不良共に押し付け、心優しい市長を演じつつ、何の疑問も後腐れもなく別荘を建てて大金を手に入れる…

ただそれだけ。ただそれだけで借金を返す事ができる。相手がよければ、浮いた金で相場にリベンジもできる…

そう考えていた

…あの遊撃士達と一人の男が来るまでは

ダ「まさかかの《白烏》（びゃくう）が王立学園の生徒だったとは…」

つい言葉に出してしまう

それだけ衝撃が大きかったのだ

ダ「やれやれ…奴に見つかったのなら、やはり一度『奴ら』をたよ

…！」

ダルモアはそこまで来てようやく後ろの影に気づく

ダ「くっ…しつこい遊撃士風情が…」

ケ「大人しく捕まった方がいいんじゃねぇか？」

ク「逃がしません…！」

ダ「くそっ！」

ダルモアはそう言うと、ヨットからマシンガンを取り出し、ケイジ達が乗っているボートに向けて撃ち始めた

ケ「げっ。マシンガンなんざ持ってたのかよ！？」

エ「任せなさい！」

言うが早いかエステルがボートの船首に立ち、棒術具を回転させて弾丸を弾く

ケ「おぉぉー」

エ「ふっふーん！ザッとこんなもんよ！」

やたらと胸を張って誇るエステル

そしてもう少しでボートがヨットに追いつくという所で…

追い風が吹き始めた

ヨ「な！？追い風！？」

ケ「やべーな」

ヨ「ヨットは風が吹けばボートより格段に早くなる…このままだと逃げられる！」

エ「あ、あんですってー！？」

はい、あんですっていただきましたー

ヨ「こんな時にボケるな！」

ケ「大丈夫だって。絶対…いや、多分。きっと。恐らく」

ク「…だんだん信用が無くなっていくんだけど」

そんな緊張感のない会話をしていた時、不意に大きな影が俺達の上におりた

ケ「やっとご到着か…」

水上に降り立つは、一隻の飛空挺

白き翼の名を冠する純白の機体

――巡洋艦（アルセイユ）

ダ「なぁ!?王国軍!?まさか…こんなに早く来れるはずが…」

見る間にダルモアを包囲し、逮捕する王国軍親衛隊の面々

逮捕が済んだ後、全員が船のへりに一列で並び、その内の一人が前へ出てくる

ユ「…ルーンヴァルト大佐。ダルモア市長汚職の証拠掴み、ご苦労様でした」

ケ「ああ。報告は後日、女王陛下に直接行う」

ユ「わかりました。そのように伝えます」

ユリ姉と業務連絡を終えると…

エ「た、大佐ぁー!?」

ついにエステルが爆発した

ヨ「そうか…何か引っかかってると思っていたんだ…」

ケ「その様子だとヨシュアは俺を知ってるらしいな」

ヨ「まあね…

――ケイジ・ルーンヴァルト。リベール女王の懐刀。百日戦没にて多大な功績をあげ、電撃作戦にも参加。常に前線に在り続ける姿は味方に希望を、敵に絶望を与え続けた。その姿から敵味方問わずこう呼ばれた…

《白烏》（びゃくう）…味方を支えし純白き（しろき）翼を掲げる悪魔、と」

閑話『とある二人の会話』（前書き）

今回は完全に伏線です

しかも短い上に会話文オンリーです…

基本的に本編が進めば明らかになると思うので、読みたいという方はどうぞｍ（＿＿）ｍ

閑話『とある二人の会話』

『…で？どうなんだ？奴の動向は掴めそうか？』

「いや、わかんないッス。正直尻尾すら掴めてませんね～」

『そうか…』

「まあ、そのうち暇を作って調べて回りますよ」

『…すまんな。お前も色々忙しいだろうに…』

「いえいえ。これも仕事ですし」

『それでもだよ。君が居てくれて本当に助かっている。リースの修業にも集中できたしな』

「ああ、そう言えば…リースさんの修業はもう終わったんスか？」

『ああ。おかげさまでな。今はとりあえず騎士の仕事をしているよ。無意識にケビンも探しているようだけどね』

「ケビンさん見つけたらリースさんはびっくりするでしょうね～」

『ハッハッハ！何せ星杯騎士の守護騎士第五位だからな！』

「そうですね～

…で？本当の用件は？」

『…バレていたか』

「子供と思って油断しない方がいいですよ？」

『怖い怖い…さて、用件だが…この任務、ケビンも参加させる』

「！？」

『アイツがそっちに着くのは生誕祭が終わったあたりだろう』

「…理由は？」

『“塩の杭”…』

「はあ！？アレは危険すぎて使用不可になった筈じゃ！？」

『それがどうやら上が勝手に設計したらしくてな。今回の件にどうしても試したいそうだ』

「…俺達は捨て駒って事ですか。実験を失敗してもまたすぐに次の守護騎士が現れる…そいつにまた実験させればいいってね」

『…すまない。私では止めきれなかった…ハハッ、こんなザマで何が守護騎士第一位兼星杯騎士団総長なんだかな。つくづく自分が嫌になるよ』

「気にしないでいいッスよ。今はまだ耐える時なだけ…足下をしっかり固めないと」

『…そうだな。今はどこまで?』

「司祭数人は。けれど教区長はリベールだけなら掴んでます」

『ほう…どうだったんだ?』

「ロレント、ルーアンは白。その他は黒。…つくづく腐ってますよ」

『そうか…』

「総長は引き続き星杯騎士団の“整理”をお願いします」

『わかっている。そっちも引き続き第二位と第五位は情報収集を兼ねて任務、その他は今まで通りだ』

「承りました。…くれぐれも気を付けて下さいよ?第一位《紅耀石》(カーネリア)殿」

『むしろそっちの方が危険度は高いぞ?第二位…《白刃》よ』

「わかってますよ~…それでは失礼します」

『ああ』

プツッ、

通信ガ終了イタシマシタ

通信先…アルテリア法国・星杯騎士団本部

通信元…

リベール王国・ルーアン地方・ジェニス王立学園敷地内

第十六話『隠密作戦…開始』（前書き）

やっとプロットが出来た…

完全オリジナルの話ってキツいっすね～

ツァイス編は半分オリジナルみたいな感じで行こうと思います！

第十六話『隠密作戦…開始』

～アルセイユ・船橋～

ケ「それにしてもよくアルセイユなんて使えたな～」

ユ「ちょうど試験運転中にジークが来たんだ。まぁ、リシャール大佐には偶然捕まえたとでも言っておくさ」

ナイスタイミング、クローゼ！

ユ「…それより、この前の…」

ケ「『情報部に注意しろ』って件か？」

ユ「ああ。情報部は王都では評判もいいし実績もあげている。正直頼もしく思っているしな」

ケ「まあ、それはそうだろうな…クーデターを起こす前に問題は起こしたくないだろうしな」

ユ「なっ！？」

驚くのも無理はない。実際、トップのリシャール大佐の悪い噂なんかは一度も聞いた事がないしな

けどそれは明らかに不自然な事でもある

人間は生きている限り必ずミスをする。どんなに偉い人でも、凄い

人でも一度は必ず大ポカをしでかす

逆に言えば、ミスを一度もしていないのに優秀な人間にはなりえない。そんなのは物語の中だけの話だ

ユ「…あのリシャール大佐がか…？いくらケイジの話とは言えど、信じられん…」

ケ「今はまだそんな疑いもある、くらいの認識でいいよ。確信も持ててないし」

そう言ってケイジはニヤリと悪い笑みを浮かべる

ユ「お前…まさか…」

ケ「そのまさかさ♪」

ユ「ハア…どうせ言っても聞かないんだろう？勝手に行って将軍に派手に怒られて来い」

ケ「そんじゃあ遠慮無く行ってくるわ」

そう言ってケイジはアルセイユを後にした…

第十七話『ｍｉｓｓｉｏｎ　ｉｎ　レイストン要塞』（前書き）

息抜きがてらに久々投稿！！

もし待って下さっていた人がいたならお待たせしました～！！！

第十七話『ｍｉｓｓｉｏｎ　ｉｎ　レイストン要塞』

「え？依頼？誰のかしら？」

「俺」

「はいはい、冗談はほどほどにしなさいな」

「冗談じゃねぇよ！リアルだから！マジだから！」

カルデア隧道を抜け、すぐにレイストン要塞に行こうとしたが、予想以上に警備が厳しいので、遊撃士に協力を頼もうとしたが、受付のキリカさんの対応がヒドかった

「いや、だって…あなたに手伝いが必要な仕事が想像できないのだもの」

「俺は人外か何かか！？」

「それにあなたが人を頼るなんて…明日は嵐かしらね…」

「俺だって人だからな！？無理な事だってあるからな！？」

そんな風にずっとからかわれながら進まない会話を続けていると…

「キリカさ～ん！グランセルで受けた運搬の依頼終わりました～♪

…ってアレ？」

茶髪の溌剌とした女の子（つっても同い年くらいだが）が入って来た

「あら、ご苦労様アネラス」

「あ、どうもです。この男の子は？」

「ああ、俺はケイジ・ルーンヴァルト。一応王国軍に所属してる」

「アネラス・エルフィードだよ。よろしく～♪」

軽っ！

「それにしても王国軍の人がここにいるなんて珍しいね。何かあったの？」

「いや、依頼しに来たって言ってるのにこのオバ（スチャッ）…オネーサンガキイテクレナインダヨ」

やっべえ！この人マジでヤバい！

オバサンって言いかけたら何の躊躇いもなく輪刀首に突きつけやがった！

「依頼？」

「…そうね。アネラス、この依頼あなたが受けなさい」

「ふぇっ！？」

「そうね…ケイジが依頼するくらいだからまず難易度はＡランク以上。同行人は一人…でいいのよね？」

「ああ。…後、難易度はヘタすりゃSまでいくぞ」

命懸けだからな

「ええっ!?Aランク以上!?そんな依頼私が受けて大丈夫なんですか!?クルツ先輩とかシェラ先輩とかに任せた方が…」

「そうしたいのは山々なんだけど…どうも急ぎみたいだから。それに同行人が遊撃士ランクで換算すれば確実にA以上のチート野郎だから問題ないわ」

「チート言うな若作り」

「依頼…取り消しでいいのね?「すんませんでした」」

ちくせう。人の弱味につけ込みやがって

「あの~…それで私の処遇は…」

「逝ってきなさい」

「ですよね~(汗)」

こうして、しばらくの間だが、コンビが見つかった

――――――――

~ソルダート軍事路~

「いいな、今回の依頼はレイストン要塞への侵入及び内部調査だ」
現在任務内容をアネラスに説明中です
「内部調査って…何を調べるんですか？」
「……ま、気が向いたら話すよ」
流石に軍のゴタゴタに遊撃士を巻き込むのは申し訳ないしな
「さて、行くか」
「どこから入るんですか？見た感じ猫一匹入る隙間も無いっぽいですけど」
「え？いや、正面から死角を縫って適当に…」
「無理！！」
おお、ナイスツッコミ
「出来るって。人間成せば成るもんだぞ？後何か年上に敬語とかむず痒いから止めてくれ」
「あ、うん…って無理無理！流石に限界あるよ！」
我が儘だな～…依頼者俺なのに
「じゃあ…とりあえず俺の後ろにピッタリ着いて来い。つーかおぶ

され」

「わかったよ…」

しぶしぶアネラスが俺の背中に乗る

それを確認した後、瞬動で一気に軍事路を駆け抜ける！

「ふぇぇぇぇぇっ！？速すぎぃぃぃぃっ！！」

「喋んなっての！！見つかるし何より舌噛むぞ！！」

そのまま入り口の近くの茂みに隠れる

「…ふぅ、とりあえず接近成功っと…大丈夫かアネラ…」

「きゅう～…」

「……」

のびてるし

つーかこれ…依頼した意味なくね？

「…しょーがない。起きるまで待つか」

それから三時間くらいしてようやく起きたアネラスと、貨物車が通る隙に瞬動を使って中に入る

「さて…こっからが本番だぞ？気ぃ抜くなよ？」

「わかってる…そっちこそヘマしないでよ?」

…限りなく信用出来ないの俺だけなんだろうか

第十八話『バレた!?』

「あのさ…」

「どうした?」

要塞内に侵入して、通路を歩いていると突然アネラスが話し掛けてきた

「なんで中にいるのに人が一人もいないの!?」

そう。誰もいないのだ

情報部はおろか一般兵や将校階級の奴さえいない

「…確かシード中佐が遊撃士に訓練依頼を出すとか言ってたような…」

「そうなの?というか軍の人って遊撃士を毛嫌いしてるってイメージあるんだけど」

「まぁ大半はな。俺とか例のシード中佐とか、有名どころでいえばユリア中尉、リシャール大佐は遊撃士肯定派だよ」

…軍のトップのモルガンの爺さんが否定的だからあまり大々的に協力できないだけで

「ふーん、そんなものなんだ」

「そんなややこしいもんだと思ってたのか？…っと、アタリか」

もはやいくつ扉を開けたのかわからなくなってきた時、やっと目当ての部屋にたどり着いた

「ここなの？特に不審な所は無いと思うけど…？」

「そりゃあ自分の部屋をわざわざ怪しく見せる必要なんざないからな」

そんなんするのはよほどの厨二病かただのアホだ

「ここはリシャール大佐の私室だ」

――――――――

「（…帝国の国境付近の…違う、新型飛空挺について…違う、クロスベルの近況報告…違う）」

アネラスを依頼完了として俺しか知らない抜け穴を教えて脱出させた後、俺は大佐の私室の資料をひたすら読んでいた

…これで情報部とあの組織のつながりが無ければよし、クーデターの疑いすら無ければなおよし…そんな甘い考えで資料を読んでいたのだが…

「（王都の地下の遺跡についての報告…？何だこれ？）……っ！？」

…オイオイ、マジかよ。いくら探してもねぇハズだ
オマケにこれで情報部の疑いは無くなった…あいつらは間違いなくリベールをひっくり返す気だ
「…とりあえず、王都に戻って…！！」
ガキィ
「勝手に人の部屋で私物を漁るとは…少しモラルに欠けてはいないかな？」
…チッ、最悪のタイミングだな
「…どーも。ご無沙汰してます、リシャール大佐」
「久しぶりだね、ルーンヴァルトくん…で？君はここで何をしていたのかな？」
…話題はそらせないな。かと言って簡単に論破できる相手でもない
…だったら
「いえいえ、ちょっと野暮用ですよ…そこ、通してもらいましょうか？」
「そんなつれない事を言わずにゆっくりしていきたまえ。…少し不自由はさせてしまうかもしれんが！」

再び俺と大佐の剣が交わる

そしてそれは徐々に速度を上げていき、次第に二人の剣は勿論、腕までが見えない域にまで到達する

「…流石は『白烏』と言った所か。まさかその年で私と同じ域に達するとは…！」

「そっくりそのまま返しますよ。…流石『剣聖の後継者』と呼ばれるだけはありますね

ま、今回は俺の勝ちですけどね」

瞬間、わざと追い込まれるようにして移動した窓から身を投げ出す

「なっ！」

「伊達に俺も大佐なんて役職に就いてないんですよ」

このまま正面にあった要塞の壁に蹴り登り、飛び降りて脱出…

チュン

「……っ！」

俺が壁に登った瞬間、狙っていたように導力銃の弾丸が俺の腹を貫いた

大佐の方を見ると、口パクで

『なんの対価も無しに情報を渡す訳にはいかないのでね。今回は君の戦闘不参加を対価に頂いておこう』

…図られた…！

俺はリシャール大佐のいる部屋の下の階から出ている銃と煙を見ながら、要塞の外へと落ちて行った

第十九話『護るために』

「…ほいっ、と」

城壁から撃ち落とされたが、割と地面まで距離があったので体勢を立て直して着地する

…え？人間技じゃない？うるせぇバーロー

にしても…リシャールはアレを見つけてどうするつもりだ…？

この国をひっくり返そうとしているのは間違いない

可能性としてはカルバードと組んでの帝国侵略…

「……」

とりあえず先に止血しようか

――――――

「…っし」

止血完了…

ん～…わりと時間喰ったかな

俺をこの程度の怪我で足止めしようってくらいだから間違いなくリシャールはひと月以内に行動を始める

…結局、一旦王都に戻るしかねぇか…

俺はさっさと王都入りする事に決めた

――――――

「通行止め？」

「ああ。今なんか王都に帝国の密偵が侵入したとかでね。情報部のリシャール大佐が厳戒令をしいているのさ」

ちっ…先を越された！

帝国云々はブラフ。実際はクーデターを成功させるための時間稼ぎ…！

「お袋が病気で倒してんだ…何とか通してくれないか？」

「う～ん……ゴメンね、やっぱり無理だよ。ある意味国民全員の命に関わる問題だから」

…仕方ない。一旦ツァイス…いや、エルモに隠れるか

「わかった…また出直してくる」

「ゴメンね…力になれなくて…」

そうして俺はエルモに向かった

「毎度の事だけど、厄介事に巻き込まれてるわね」

「いつもの事っスよ」

エルモに向かう途中でツァイスのギルドに寄り、依頼の報酬を払うと、キリカさんに傷を見抜かれた

「あまり無理はしないでおきなさい。遊撃士も騎士も体が基本なんだから」

「善処しやーす」

「……はぁ」

気の抜けた返事に、自重する気が無いのを確信するキリカ

「まあいいわ。あなたがケガをすればあのお姫様が激怒するだけだから」

「……」（汗）

「それが嫌なら気をつけなさい。ただでさえあなたは敵が多いのだから」

「…わかりましたよ。あとコレ、アネラスに」

「確かに受け取ったわ」

とりあえずこれ以上面倒な事にならない内にギルドを出ようとすると…

「待ちなさいケイジ。あなたに教えておかなければならない情報よ」

「…何ですか？」

首だけキリカに向ける

「王都が情報部に占拠されたわ。」

「！…詳しく」

「三日ほど前、王都のギルドとの連絡が途絶えたの。その後、王都の遊撃士から王都占拠の知らせが入った。アネラスに一度確認に行かせたのだけど検問で追い返されたわ」

「そして今王国軍内で陛下と意見が真反対でかつこんなことをしでかせる権力がある人物は…」

「リシャール大佐だけ。彼の軍拡思想は民の間でも有名だから」

流石はキリカさん…こんな少ない情報で此処まで展開できるとは

「…で？それを踏まえて俺にどうしろと？」

「全く…鋭いわね

…遊撃士協会から王国軍…いえ、あなた個人に正式な依頼よ。内容は王都の調査、できるなら遊撃士協会の解放、かつクローディア殿下の保護。

事前情報は一切なし。難易度はＳ～ＳＳＳよ」

「王都への侵入経路の確保は？」

「例の王都の遊撃士が手に入れた通行証があるわ」

「…ふっ、契約成立だな」

白き烏が王都に舞い戻り、太陽の娘と月の少年と交わる時…歯車は動き出す

「――――、準備の程は？」

「現在五割程完了しています。…しかし本当にこんなモノを人間が

制御できるのですか？」

「やってみせるさ…例え出来なかったとしても

『たかが王都が消えるだけなのだから』」

歯車は動き出す

例えそれが破滅に繋がっていたとしても…

第二十話『月と白烏と太陽と』（前書き）

かなり久しぶりの投稿！

待っておられた方、もしおられたらすみませんでした！

もうしばらく感想も返せないかと思いますが、この小説と作者をよろしくお願いします

第二十話『月と白烏と太陽と』

～王都グランセル・グランセル城前～

「…やっぱ閉鎖するよな、そりゃ」

ケイジ・ルーンヴァルト、現在王都潜入中

…早速手詰まりです

しょうがねぇだろ!?とりあえず城くらいは開放してるだろと思ってたらまさかのテロの所為にして閉鎖って…

そんな風に現実逃避していると…

「――、じゃあ田舎から出てきて城を見学したい。出来るなら女王様を一目みたいって設定で」

「いつもの事だけど、よくそんなホイホイと思いつくわね…」

懐かしい声が聞こえた

鴨がネギしょってキｏ（、▽,）ｏタ～～～！

…失礼、取り乱した

「その設定俺も混ぜろよ」

「うわっ！？」「きゃっ！？」

「「ケイジ！？」」

「久しぶりだな、エステル、ヨシュア」

「君はルーアンの学園にいるはずじゃ…」

「ちと野暮用でな…」

「クローゼは？」

「いや、わからん…というかセットみたいに言うな」

「だって…ねぇ？」

「ねぇ？じゃねぇよバカ。ヨシュアも頷いてんな！！」

と、再会と同時に軽い掛け合い（一方的）をして、本題に入る

「…それで、混ぜろって言うのはどういう事だい？」

「言葉通りだ。中に用事があるもんでな」

「中？」

「ああ。ちょっと人に会いにな」

嘘は言ってない。嘘は

ただちょっと激しくスキンシップをとるだけだから

…周りが壊れるくらい

「…わかった。でも始めは僕とエステルだけで行くよ。成功したら呼ぶから待っててくれないか？」

「あいあい、わかった」

そう言って二人で門番の兵士に近づいて行く

しばらく話していたが、結局失敗したらしく戻ってきた

「あ～…失ぱ「ちょっとケイジ！あんたが軍の人間だったなんて聞いてないわよ！？」い……」

あの門番、いつかシメる

――――――――

「申し訳ないが、今グランセル城は関係者以外立ち入りを禁止しているんだ」

「テロリストが捕まれば見学も許されると思うわ」

「なんだガックシ…これじゃあ女王様の姿を見るなんて夢のまた夢かしら…」

「そうだなぁ…生誕祭の当日には拝見できると思うけど…」

「最近陛下も体調を崩されていてね、今回はもしかしたらお姿を拝見できないかもしれないわね」

「陛下は体調を崩されたのですか？」

若干驚いた様子で尋ねるヨシュア

「ああ…信頼していた親衛隊にテロの容疑がかかっていて、その心労が祟ったらしくて…」

「最近は女王宮で安静にしてらっしゃって、謁見の間にも出られてないの」

「そうなんだ…」

「全く…私は前から親衛隊の奴らは怪しいと思ってたのよ」

「で、でも親衛隊のユリア中尉やルーンヴァルト大佐はみんなに優しく接してくれたじゃないか！俺達みたいな一兵卒にも剣を教えてくれたし…」

「「（“ルーンヴァルト”？）」」

「そ、そりゃそうよ！きっとあの二人は部下の行動に責任を感じてお姿をくらませているのよ！ああ…可哀想なケイジ様…」

「「（ケイジィィィィ！？）」」

「はぁ、そうだね…とりあえず君たち、城には……アレ？」

―――――――――

「…まあ、そういう訳だ」

「どういう訳よ」

「かくかくしかじかまるまるうまうま」

「わかるかァ！！」

いかにも説明するのが面倒くさい様子で適当に返すケイジ

「なるほど…つまり女王様のご好意で年相応の事もしなさいと学校に通わせてもらっていたと」

「あ、それだ」

「何でヨシュアにはわかるのよ！？何！？あたしがおかしいの！？」

「「これぞ同室の力！」」

「もうツッコむのも面倒くさい…」

「まあ、とりあえず正攻法で無理なのはわかった。とりあえず遊撃士協会に行こう。キリカさんの依頼の説明と協力者登録もしねぇとな」

「あ、じゃあ案内するわ」

とりあえず、遊撃士協会へと向かう一行であった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9503q/

英雄伝説・空の軌跡～銀の守護騎士～

2011年12月16日23時52分発行